キテレツミラクル

トゥルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キテレツミラクル

【Ｎコード】
Ｎ７１６９Ｎ

【作者名】
トゥルル

【あらすじ】
人類最強、人類最終、人類最悪、死線の蒼、生涯無敗、零崎の鬼子、そして戯言遣い。全て全てを巻き込む『災厄』が、終わった世界を再び終焉へと誘う。
「あいつは俺より数段太刀が悪いぜ、俺の敵。何せ、あいつは『災厄』。物語を崩落させる唯一無二の化け物だ」
西尾維新さん作＜戯言シリーズ・人間シリーズ＞のファンフィクションです。オリジナルストーリーおよびオリジナルキャラクターが登場します。

1―1

あの人類最悪との激戦を一つの物語とするならば、その物語にはすでに決定的なまでのピリオドが打たれエピローグすらも終了し、悉く完結してしまっているだう。

どこまで行っても終わっていて、果てしなく終結してしまっている。

物語がハッピーエンドだったかどうかはさておくとして、ぼくとしては限りなくバットエンドに近いと思うけれど、それでも全てを受け入れられないほどあの物語は暗澹たるものではなかったと思う。

殺伐としていて、不明瞭で、そして限りなく戯言めいていた。ぼくはあの時の決断に後悔などないが、それでも反省すべき点はいくらでもあった。

反省なんて全てが終わってみればこその話だが、ああして人類最悪との因縁が一段落したところでぼくはまず最初に今回の反省点をレポート用紙にでもまとめて哀川さんにでも提出すべきだったのだ。レポート用紙は過言だったとしても、それでも一から最初からまるっきり全てを猛省してみるべきだった。

もし、そうしていれば少なくともあんな世界を巻き込むような、それこそ人類最悪の言葉ではないが“世界を終わらせる”ような事態にはならなかったかもしれない。間一髪で避けれていたかもしれないのだ。

君は人間でも欠陥製品でもなく実はペロミクサだったんだよ、と春日井さんに言われてもぼくは寸毫の反論にさえ転ずることなく、その言われように心底同意しかねないだろう。

学習能力が皆無だと、お前の頭は猿以下だと罵詈雑言で罵られてもまったく文句のつけようがないくらいぼくは間抜けでアホすぎたのだ。人類最悪との死闘が終わって気が抜けていたのだろうか、ど

んな言い訳を並べでも無意味は承知だが、ここは戯言遣いとしての顔を立ててもらうべくぼくがあの日どうしても油断してしまった理由をお教えしよう。

あれは確か人類最悪との――――――想影真心対哀川潤の壮絶な戦いから数ヶ月が経った日のことだ。

『さて、再び始めよう』

1

想影真心にアパートを全壊にさせられて以来、ぼくは普段住み慣れた我が家を文字通り失い、それでもこんないい若いもんが路頭に迷うわけにもいかず、色々な考えを張り巡らせた結果、ぼくは今例の木賀峰助教授の診療所もとい元診療所を仮住まいとして利用させてもらっている。

事ある度にお世話になっている元診療所は劇的に物語が終了すると同時に無人の廃屋となり、誰の帰りも待つことのない既に終わった場所として存在し続けていたが、この度もう一度家屋としての役割をぼくらによって与えられた。あの年代物の骨董品のようなオンボロアパートを住処としていたぼくにしてはこの元診療所は多少広

すぎるが、まぁ贅沢を言える立場でもないし、それに今のこの状況を考えてみたら、むしろ我ながら相当天晴れな選択だったのではないかと思う。
なんせ――――

「不謹慎な物思いに耽っているように見えるぞ、いの字」

みいこさんと共にこうしてプライベートさえも融合した共同生活を送れているのだから。
そりゃ自然といやらしい目つきもなるってものだろう。

「そうですかね？クールでドライがぼくの売りなんですけど」
「それは違うな」
「違いますかね？」
「うむ、違う」
「そうですか」
「そうだ」
「ねぇ、みいこさん」
「何だ？」
「あいらぶゆー」
「……」

みいこさんは冷えた眼差しでぼくを見た。そして、機械運動のように、回れ右をして階段を下りて行ってしまった。ちなみに補足をしておくと、二階で布団を一緒に片づけている最中だったのだけれど。
というか、あれ
ノーリアクションッ！？
ふむ、どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。

「相変わらず戯言遣いのお兄ちゃんは品性に欠けています」

崩子ちゃんが本棚の上からぼくを咎めた。

うわ。

と、それなりに吃驚した。

「いやね、崩子ちゃん。紳士の振る舞いってのは、常々エロスとお淑やかさが融和したものだと思ってたんだけど、違うのかなぁ」

「お兄ちゃんは紳士を何だと思ってるんですか…」

崩子ちゃんはおよそ子供らしくない動作で肩を竦める。とは言え、本棚の上に寝転がるのはおよそ大人のする行為でもない。

うーん。とまぁ一応人物紹介。

闇口崩子。職業、ぼくの奴隷。

…いやいや、ぼくとしては奴隷だなんて寸分も思っていないわけで、そもそもぼくの預かり知らぬ内に、崩子ちゃんが勝手に殺し名である《闇口》としての契約をこのぼくと結んでしまったのだから、そこにはぼくの事情や意志は介在しないし、否定しようにも肯定しようにもすでに手遅れなのだ。ゆえに他意はない。絶対にない、はずだ。

しかしこのままでは、ぼくの奴隷擬き、だけで崩子ちゃんの紹介を終えてしまいかねないので、もう少しフォローしてみる。

闇口崩子、ぼくの奴隷擬き、みんなの美少女。

これじゃ、崩子ちゃんの清楚で素朴な印象がまるで伝わらないけ

れど、事実は事実で、実際骨董アパートの住人も含め、府警第一課のみなさん、らぶみさんが勤める病院のみなさんと、崩子ちゃん、大人気である。

そんな崩子ちゃんは骨董アパートの住人であったから、ぼくと同様、アパート崩壊と共に、帰る家を失ったわけで、いくら可憐な美少女とはいえそう簡単に住む場所が得られるはずもなく、丁度タイミング良くぼくがこの元診療所を思い出したので、それならばと思い彼女に提案したところ

『主人に仕えるのが私の役目ですから、戯言遣いのお兄ちゃんに言われるまでもなく私は付いていきます』

と即答したのだった。そう言えば崩子ちゃんはぼくの犬だったっけ、などと思い出しながら引っ越しの準備をしていたら

『ん、何だいの字。もう新しい住居が決まったのか？・・・・何、崩も一緒に住むだと。おい、いの字。前にも言ったが小学生はまずいだろう。それにお前のことだ。決してやましい気持ちがなかったとしても崩とお前を同居させるのは私の納得がいかん。ここでお前と崩の同棲を認めてしまったら萌と姫に申し訳が立たない。絶対に許すまじ、不純異性交遊。こうなったら監督役として私も一緒に住むしかあるまい。決して新しい住居が見つからないわけじゃないからな』

などと、長い長い街頭演説のような件をを経て、みいこさんこと浅野みいこの同居も決定したのである。ぼくとしては非常に嬉しい限りではあるが。

まぁ各人の自己紹介はこんなものだろう。

「ところで、お兄ちゃん。今日のお昼ご飯はどういった計画で？」
崩子ちゃんがタイミングを見計らったように、本棚の上からぼくに問いかける。

「うーん、今のところ、特に考えてはいないけど。せっかく、みいこさんのバイトが休みなわけなんだし、みいこさんの意見を最大限、優先してあげようか。よし、じゃあ仲直りも兼ねて、ちょっと相談してくる」
「わかりました。みい姉さんなら、たぶん外ですよ」
「うん、だろうね。ところで、崩子ちゃん」
「はい、何ですか？」
「何で本棚の上？」
「高いところが落ち着くんです」
「へぇ、なるほど」

まるで猫みたいだな。と言っても猫が高い場所を好むかどうかなんて、ぼくは知らない。

「ん、みいこさんに要望を聞く前に、冷蔵庫の中を確認したほうがいいかな」

と、ぼくはみいこさんの昼食のご要望の確認と先ほどの仲直りの前に、台所へ行ってみると、外にいるはずのみいこさんが戸棚からぼくが大事に隠していた生八つ橋を一つ頂戴しようしている場面に立ち会った。
みいこさんと目が合う。
「・・・・・・」

みいこさんは一度ぼくの方を見た後、そのまま首を９０度回転させ黙りこくっている。どうやらぼくを見なかったことにしたらしい。というか、何故ぼく秘蔵の生八つ橋をみいこさんが食べてるんだ。

ん、しかし待てよ。　これを口実にみいこさんと仲直りをしようじゃないか。いやいや、ぼくだって別にさっきは不埒な妄想をしていたわけじゃないし決してぼくが悪いわけではないけれど、この調子でせっかく久々にバイトが休みのみいこさんとつっけんどんなまま今日という日を終わりたくはない。

「みいこさん、その生八つ橋おいしいでしょう？ぼくのオススメなんですよ。良かったら今度一緒に買いに行きましょう」
「・・・・・・・」
「実はその生八つ橋、前に友達に教えてもらったやつなんですけど、府民でもなかなか知らない隠れた名店に置いてあるんです」
「・・・・・・・」

うーむ、どうやらみいこさんは生八つ橋事態を無かったことにしたいらしい。
ならこの手の話題は控えて路線変更だ。

「それにしても、みいこさんとこうして一緒に暮らすのはぼくの夢でしたから、まさにその夢が叶ったわけでしてね」
「・・・・・・・」
「だから今のぼくは世界一幸福な１９歳だという自負があります」
「・・・・・・・」
「１９年長く苦しい人生でしたが、このいの字、ようやく幸せを手にしました」
「・・・・・・・」

ダメだ。ぴくりともこっちを見ない。
しかも一度フラれた相手に何てことを言ってるんだ、ぼくは。
くそう、こうなったら。

「へーい、みいこちゃんよぉ。俺様と愛車のフィアットでブイブイビクトリーしようぜぇ？」
「・・・・いの字」
「はい、何でしょう」
「私はバカな男は嫌いだ」
「すいませんでした」

怒られて嫌われてしまった。ダメだ、ぼくはもう立ち直れない。
派手に倒れたぼくがふと顔を上げると、そんなぼくとみいこさんの様子を冷えた、そりゃ極寒の冬景色を彷彿とさせるような絶対零度まで下がり切った眼差しで崩子ちゃんが見ていた。しかし何故か右手に生八つ橋を持っていた。

「・・・・・・っ」

そして冷え切った顔をしていた崩子ちゃんは自分の右手に何を持っているかに気付いたのか、急に顔色を変えて後ろに走り出す。

くそ、さっき本棚の上に乗っていたのはこの伏線だったのか。そして、みいこさんが外にいるって嘘をついたのも、ぼくに気付かれない様に生八つ橋を片づけるための伏線！
今まで、ぼくにばれずに隠し通していたとは、流石力を失ったとはいえ『殺し名』序列第二位の『闇口』である。決してぼくが鈍いわけではない。

ぼくは崩子ちゃんに鉄槌を下すべく、その小さな背中を大人気も

なく追いかけた。

この後。

二階のカーテンに隠れるように丸まっている崩子ちゃんを発見したぼくがどんなお仕置きを処したのかは、語るにして少しばかり公序良俗に欠けるような気がするので、これはまた別の機会を設ける。つまり、ぼくが言いたいのは、日常には人それぞれの千差万別な形があって、その中枢にいる当人だけにしかそれを日常だと判断する術がなく、他者にとっては或いは角度や視点が変われば、それは日常でも異常とでも取れるのだから、しかしそうは言っても、みいこさんと崩子ちゃんとの共同生活がぼくにとって異常かどうかなんていうのは聞くにすら値しないわけで、すなわちこれはぼくの極々、平々凡々な日常風景である。

だからこそ、ぼくは過信していた。日常とは、童謡のように緩やかにフェードアウトしていくものだと、思い上がっていたのだ。

そして、実にこの数時間後、ぼくの日常は音もなく、気配すらなく、伏線すらなく、消失する。

１－１（後書き）

１０月２１日、改編。

2

閑話休題。

それにしたってぼくがこんなハーレム三昧な所行を日々堪能しているかと言うと実はそうでもなく、むしろみいこさんが同居を求めてくれたせいで、ぼくは崩子ちゃんとお風呂に入ることも出来ないし、夜な夜な崩子ちゃんの部屋に忍び寄ることもできていないのだ。だからぼくの寝床も一階の以前、姫ちゃんと理澄ちゃんが木賀峰助教授と面接を行った部屋になり、崩子ちゃんとみいこさんは二階のぼくと姫ちゃんが泊まった部屋に布団を敷いている。みいこさんや崩子ちゃんによる共同生活への期待なんていう期待はこの際、完膚なきまでに杞憂だろうけれどそれでも残念極まりないというのがぼくの本音である。まぁ戯言なんだけどさ。

さて、崩子ちゃんから生八つ橋を取り返し、ついでに罪への贖いもかね崩子ちゃんに首輪を付けて三回回ってワンの刑に処してから、今日も平和な毎日を堪能するぼくだが、そうそうのんびりしていられるほどの余裕があるかどうかと問われれば、それはまさしく否である。本音で言えば崩子ちゃんと遊んでいる場合でもない。ましてや崩子ちゃんを犬として調教する暇など、これっぽっちも、本当に寸分の余裕もないのだ。

今日は偶々、日々バイト尽くしのみいこさんが珍しく休みで、だからこうしてお昼時にみいこさんと楽しく会話できるのは貴重かつ有り難いのだ、ぼくも今日ぐらいは一切合財の仕事を放棄して一

日中伸び伸びしていようかと思ったけど、これがまた悲しいぐらいの叶わぬ願望であり、期待も願望何も単純にぼくが甘かっただけなのだが、現実問題、ぼくは滴る泪を飲んで甘い期待をトイレに流し辛い苦しい家事に勤しまなくてはならないのだ。みいこさんは普段はバイトの応酬で家にいないのだから当然家事なんて出来ないし、崩子ちゃんも言えばやってくれるかもしれないが、彼女一人に家事全般を託すほど戯言遣いは腐ってはいない。つまり必然的に家事全般はぼくの職務となっている。とは言ってもやはり炊事や洗濯、掃除などそれこそ日々主婦を悩ませる苦行全てをこのぼくが一身に引き受けるのには多少荷が重すぎたわけで、ぼく個人としては例のあの人の再登場を期待したけど、どうやらこれは伏線にもならないようである。今頃何してるのかなぁ、是非是非また京都に遊びに来てもらいたい限りだ。

「おい、いの字。醤油とお茶っ葉が切れてるぞ。買いに行かなくていいのか？」

みいこさんの声にはっと我に帰る。生八つ橋で機嫌が直ったのか、みいこさんが話しかけてくれた。

「ええ、ああ、そういえば」

そういえばそうだった、ぼくはこれから買い物に行かなくてはならなかったのだ。すっかり忘れてた。

「もし買い出しに行くなら私も行くぞ。骨董屋の仕入れが気になっていたところだったんだ」

オンボロの骨董アパートが崩落した際、みいこさんが蒐集していたアンティークな代物は全て瓦礫に埋まってしまって、事件当時は

流石のみいこさんも魂の抜けた放心状態だったが、今はまたこうして懲りずに掛け軸やら壺やらをかき集めているのだ。すでにみいこさんの部屋には多数の古美術品が綺麗に整頓されてある。

「いいですけど、なら崩子ちゃんも連れて久々に向こうでご飯食べますか」

唯一、この元診療所の欠点を列挙するならばそれは立地場所だ。もともとあの人類最悪が自分の研究施設として構えていたんだから、人里離れているのは当然と言っちゃ当然だけれど、京都の都市部まで行くのに往復2、3時間かかるというのは心底参っているのだ。ただの買い物だけでも相当な時間を浪費してしまうのだから、それならいっそ昼食を作る手間を省き、買い物と昼食を同じ過程で済ましてしまえば一石二鳥ってやつだろう。

「それもいいな。けどいの字。残念ながら私は古美術品蒐集の趣味が転じて財布の紐が緩みがちなんだ」

カッコよく言ってるけど、ようは金欠でしょ。とは言わない。だって相手はみいこさんだから。

「・・・・ぼくが支払いますから思う存分食べてください」

「流石、いの字ー。愛してるー」

ここ最近、うまい具合にみいこさんにたかられているような気がしないでもない。

「今日は外でお昼ご飯ですか？」

崩子ちゃんがひょっこり顔を出す。外食という単語を聞きつけてや

ってきたのだろうか。一般的に外食を好む子供は多いらしいけど、どうやら崩子ちゃんもその通例にはもれなく当てはまるようだ。外食がそんなに嬉しいのか、にっこり笑う崩子ちゃん。キラキラした目でぼくを見る崩子ちゃん。

崩子ちゃんの無垢で純朴な笑顔を見ると、ぼくもつられて口元が緩んでしまう。

笑顔の崩子ちゃん。微笑んでいるぼく。

そして。そして――――――。

首輪を付けた崩子ちゃんを見て無表情になるみいこさん。

崩子ちゃん、まだ首輪外してなかったのか・・・・。

「・・・おい、いの字。最近、骨董品屋で買った名刀がな――――」

「ほ、崩子ちゃんっ。ぼくのファッションセンスから言わせてもらえば、その装飾品は実に崩子ちゃんの雰囲気には合ってないし恐ろしいまでの激ダサだから外してしまおうっ」

ぼくは手際よく崩子ちゃんの首輪を外し遠くに放り投げる。

「うーん、お兄ちゃんなら気に入ってくれると思ったんですけどワン」

「・・・・・・」

だから崩子ちゃん、おかしな方へとキャラ作りしないでくれ。確かにぼくはさっき崩子ちゃんを犬扱いしたけど、常時犬スタイルを貫けなんて言ってはいない。

「いの字。この名刀なんだが」「こ、困ったもんだね、最近のアニメは変な奴ばっかりでさっ。純粋な崩子ちゃんまでもがこうして影

響されちゃうとは、いやはや参ったもんだっ」

とりあえずアニメのせいにしてみた。

「最近のアニメ事情には流石のぼくも困り果ててましてね。やたら同じ趣向の作品が多くて、ぼくにはどれも同じ見えてしまいますよっ」

「・・・・・崩はアニメを見るのか？」

「戯言遣いのお兄ちゃんと魔女のお姉ちゃんに勧めてもらったのは暇を見つけては見てます」

む、七々見のやつ崩子ちゃんに変なアニメなんか教えてないだろうな。まぁあいつはあいつでちゃんと常識と良識を備えているやつだから大丈夫だろうけど。

「最近じゃ男性同士がキラキラしながら触れ合うアニメーションを見てます」

「あの魔女、ぶっ殺してやる」

あの最悪の魔女め。ぼくの崩子ちゃんに余計な知識を植えつけようとするとは言語道断許すまじ。

もしみいこさんがぼくを制止してくれていなかったら、お前の命はまず間違いなく今日付けで終わっていただろう。

「それよりいの字、お腹が減ったぞ」

みいこさんが催促する。どうやら話題をアニメに逸らしたのは正解だったようだ。しかし今すぐにあの魔女への鉄槌を下せないのは癪に障るが、ふむ確かに今は昼食を優先すべきだな。

「それじゃ出発しましょうかね。今ちょうど家を出ればお昼ご飯に

はいい時分でしょうし」

というわけでぼくらは出発した。

3

昼食は予定通りぼくの奢りで、いや予定通りと言うとぼくを望んで昼食をご馳走したように聞こえるかもしれないが、そこはそこ。みいこさんの為あらば多少なりの出費は目をつぶるべきだろう。さて、当のみいこさんは宣言通り、骨董品巡りをしている。生憎、ぼくには古美術品を愛でる趣味は持ち合わせていないので、みいこさんに随伴することもなく、崩子ちゃんと一緒にぶらぶら繁華街を歩いていた。

「お兄ちゃん、次はこっちに行きたいです」

「はいはい・・・」

特に買い物をしているわけではないのだけれど、崩子ちゃんは興奮した小動物のようにあっちへ行ったりこっちへ行ったりと大忙しである。以前、巫女子ちゃんと買い物した時もこんな感じだった。女の子は買い物となると理性のタカが外れてしまうのだろうか。

「だけど、崩子ちゃん。もうそろそろ戻らないとみいこさんを待たせてしまうよ」

既にみいこさんと別れて二時間ちかく経っていた。崩子ちゃんのウィンドウショッピングに付き合うのも悪くないけど、これ以上意味もなく流浪に暮れていても晩御飯が自動的に出てこない以上、ぼくは帰って夕食を作らなくてはいけないし、そのための食材も揃えなければならない。

「そうですね。みい姉さんを待たせちゃいけませんし」

と、承諾した崩子ちゃんは少し不満そうだったが、渋々愁いた目で見ていたワンピースから目を逸らしぼくの隣にちょこんと並ぶ。

「そうだな、崩子ちゃん。今度、暇なときにでもまた来ようか。ぼくも毎年同じ服を着るのも飽きてね。もう少しで衣替えだしタイミング的にも丁度良いだろう？」

「は、はい。そうですね。戯言遣いのお兄ちゃんのファッションセンスは殊更最悪なので、是非わたしをお供してくださいっ」

・・・・崩子ちゃん、凄まじい貶しようだな。この子には一度、謙遜と遠慮を須らく学ばせるできであろう。

と、そんな時。変わらぬ日常の一コマに一瞬で、それは変わった。普段日常、平静と変わらぬ穏やかな空気が今日も今日とて流れていたはずなのだけれど、いやそれは確かに確実に、平和な日本らしい平和ボケした穏やかな緩やかな雰囲気があったはずなのに。

何の前触れも予兆もなく、それはあまねく消え去ってしまった。

ぼくは身じろぎできない。圧倒的に押さえ込まれたように、ぼくという存在を一切残さず消し潰そうとしているような、まさに蛇に睨

まれた蛙、呼吸もままならないままぼくは静かに、いつの間にか僕の目の前にいた人物を見つめていた。

「やぁ、こんにちは、僕の救世主。初めましてならぬ終わりまして。最高に愉快でハッピーな一日にさよならの挨拶は済んだかい？」

そう静かに口を開く人物はまさに――――――『災厄』

ぼくの物語は今始まったと言わんばかりに再び終わり始めた。

4

男だった。
いや、それを断定的に言うのには少しばかり理由が足りないかもしれない。それだけ目の前の人物は歪で、不明瞭で、霞んでいるのだ。前に澄百合学園で遭遇した玉藻ちゃんと同じのような、不確かさがあった。
目の前の男はぼくと崩子ちゃんを軽く、本当にそこら辺の道端にあるような石ころに向けるような視線で流すと、ふむと一人納得したようにくつくつと笑う。

「どうしたんだい、ぼくの救世主？いつまで間抜け面してんだよ？」

そう言って、目の前の”歪な男”は懐から黒光りする、それはまさしく、こんな平和大国日本じゃそうそうお目にかかれない代物、ずっしりと重そうな９ｍｍ口径の拳銃を取り出し

「あばばー」

躊躇いも、予断もなく、男は拳銃の引き金を引いた。
繁華街には全く相応しくない場違いな銃声と薬莢が落ちる甲高い音。それと供に今まで騒々しかった人通りは奇麗に静まりかえり、まるで計ったように一秒後、丁度”歪な男”の後ろで、本当に偶然、何の意図もなく、偶々立っていた４０台くらいの主婦らしき女性が倒れた。連鎖反応のように、倒れた女性から真っ赤な血液が広がる。

「――――ッ！」

ぼくは唖然としていた。唖然とせざるえなかった。目の前に何事もないように佇む”歪な男”に対して、ぼくはただ単純に呆然としていたのだ。そんなぼくを置いて繁華街は爆弾を投下されたように、一斉に悲鳴と混乱とで再び喧騒の火が灯る。誰も彼もが、この場から離れようと、”歪な男”から逃げようと、巻き込まれないためにただただ保身のためだけにこの場から離れていく。

唖然としているぼくはいきなり腕を強い力で引かれた。危うく倒れそうになるのをこらえ、ぼくは見る。ぼくの腕を掴んだのはほかの誰でもない、崩子ちゃんだ。

「お兄ちゃん、速くっ！”あれ”は例外なしに危険ですっ！」

崩子ちゃんはもはやぼくを引きずるように走り始めた。
強引に走らされながら、ぼくは”歪な男”を、本当に、本当に楽しそうに頬を歪ませる男を、視界の端で捕らえた。
男はすでに銃は構えていない。それでも、崩子ちゃんは走る。

「ちょ、ちょっと崩子ちゃんっ。もう大丈夫だから、放してくれっ」

しかし崩子ちゃんは動転しているのか、ぼくの言葉が届いてないのか、周りと同調するように必死に走っていく。後ろを振り返るが、どうやらあの男は追ってきてはいないようだ。それでも崩子ちゃんはまるで死が迫っているかのような形相で走り続け、繁華街を飛び出し、やがて人の通りも少ない裏道までやってきた。　そこで、ようやく崩子ちゃんは脚を止め、振り返る。当然、あの男はいない。

ぼくは息を落ち着かせてから、身体全体を震わす崩子ちゃんの背中に手をやる。

「大丈夫かい、崩子ちゃん？」

崩子ちゃんはまだ青い顔をしていた。

「・・・・は、はい」

崩子ちゃんは汗をたっぷりかいて、軽く頷いた。

「…それにしても何なんだ、あいつは？いきなり一般人を撃つなんてさ」

崩子ちゃんが落ち着くの少し待って、だいぶ冷静さを取り戻してきたのを確認し、ぼくはぶっきらぼうに尋ねた。ぼくとしては答えを求めた質問ではなかったのだけれど、崩子ちゃんは丁寧に「わかりません」と答えた。

「・・・・ただ言えるのは、”あれ”は十中八九、戯言遣いのお兄ちゃんが関わってはいけない分類の人間です」

関わってはいけない――――。しかしあの”歪な男”は自ら望んでぼくに接触してきたようだ。ぼくの意志や意思に関係なく、ぼくの前に出現した。

「関わっちゃいけないって、前に崩子ちゃんが言っていた『殺し名』とか『呪い名』の類かい？」

「…わかりませんが、属性はそれにかなり近いです。でも、わたしが知る限り、あれほどの存在感を有する『殺し名』や『呪い名』は

かなり少数しか存じ上げません…」

『殺し名』、『呪い名』。すでにぼくも一般人という定義から遠くへ逸れてしまっているから、そちらの世界にそれほど蒙昧というわけでもないけれど、それでもこうして実際に直に遭遇した『殺し名』の魑魅魍魎の連中が、あの人間失格や崩子ちゃんや萌太くんばかりだと、どうも『殺し名』に対する漠然なイメージが湧きづらい。

「ひとまず、みいこさんと合流しなくちゃね。たぶんみいこさんも騒動を聞きつけて、心配しているだろうからさ」

「・・・そうですね」

崩子ちゃんは力なく答えた。相当参っているようだ。なんせ繁華街からこの裏路地まで少なくとも一キロ以上は離れていて、それでいて崩子ちゃんは休息なしで、思いっきり全力疾走していたわけだから、疲れていて当然なのである。

ぼくは崩子ちゃんの前で小石を拾うように屈んだ。背中に手を回し、ぼくの意図を伝える。それを見た崩子ちゃんは

「主人の背を借りるわけにはいきません」

と頑なに拒否。

…うーむ。ならば少し汚い手段を使わせてもらおう。

「崩子ちゃん、これは敬愛するご主人様による手厚い心意気なんだよ。それをむざむざ断るとは、ぼくに恥をかかせる気かい？」

「……」

崩子ちゃんはしかめっ面で返事をしたが、やや間を空けて、「で

は」とだけ言ってぼくの背中にその小柄な体重を預けた。さすが崩子ちゃんとでも言うべきか、ちっとも人の重さを感じさせないのは、同居人として心配すべきなのだろうか。崩子ちゃんは育ち盛りなんだから、もう少しあってもいいと思うけど。

「戯言遣いのお兄ちゃん、あの、重かったらすぐに言って下さい。いくら主人の命令であれど、奴隷如きのわたしが主人の手間を煩わせるわけにはいきません。もし大変だったら、そこら辺の路地にでもほっぽりだして下さい」

「心配には及ばないよ。これでもぼくは鍛えているからね。そりゃ崩子ちゃんぐらい体躯を担ぎ歩くのなんてわけないさ」

それっきり崩子ちゃんは無言であったけれど、ぼくの頑固さに負けたのか、数分ゆったり歩いていたら背中から可愛らしい寝息が聞こえてきた。

闇口崩子、特技、乗り物での早寝。

ぼくの背中を乗り物と判断したのかどうかは定かではないが、崩子ちゃんはぐっすりだった。多少揺らしても起きる気配がない。首あたりにもたれた崩子ちゃんの口からはくすぐったくなるような寝息が漏れ、背中では浅い呼吸を確認できる。

さて、ぼくも考えなくてはならない。

突如現れて、繁華街をゲーム感覚で混乱に陥れた”あの男”について。

名前は名乗っていなかった。ぼくの事を　救世主と呼んでいた。”歪な男”と描写したように、極めてその形態は不自然であった。

しかし問題なのはこの際、男の風貌でも言葉でもなく、そう何の

関係もないであろう人物を、撃ち殺したことだ（正確にはあの時点ではまだ存命しているようだったけど、正直助かる見込みはなかったように思える）。あの女性があの歪な男とどう関係があったのかなかったのか、そればかりは解りようもないし知りようもない。しかしあの場を見る限り、関係性は薄いように見える。それにもかかわらず、あの男は引き金を引いた。とても理性や動悸、目的があったとは思えないほど突拍子で無作為な殺人だ。

けれど、あれだけの大人数の前で殺人を犯す必要があったのかは本当に謎だ。もしかしたら意味すらなかったのかもしれないけど、それでは被害者である女性にあんまりである。

だが例え意味があったとしてもぼくには到底理解できないような気がしてならない。

それにしても、あの感覚。圧倒されるイメージ。

これを、こんな感覚を味わうのは――――――二度目だ。

一度目は、ごくごく最近。言ってしまえば狐面の男と邂逅した際に感じたものだ。

『恐怖』

重厚にして、重圧なそれはぼくの身体を推し量り不安定な天秤のように左右へとぐらつかせる。人間の本能に最も近しい根源的な感情、慣れるはずのない感傷。

あの歪な男は確かにぼくを恐怖させた。理由も根拠も意味不明だけれど、一方であの男の取った行動は珍妙すぎて大胆だった。あの男が一般人でないのはすでに議論の余地もない確定に非常に近い予知であるけれど、しかしあれほどの騒ぎを起こしておいて無事逃げ

られるのだろうか。日本には一応、合法的に拳銃の所持は禁止されているしそれ以前にあんな大衆を前にして堂々を殺人を犯したのだ。無論、これを知った警察は動き出すだろうし、もしかしたら沙咲さんや数一さん辺りがすでに事件調査を始めているかもしれない。

どちらにしろ、今は無闇やたらに奔走するよりも現状が把握できない以上、とっととみいこさんと合流して警察に目撃情報でも提供するのが妥当だろう。運良くいけばすでに逮捕されているかもしれない。

そうな事を考えながらぼくは淡い希望ならぬ甘い希望に期待してみいこさんと合流した。

１―４（前書き）

誤字脱字があれば遠慮なく言って下さい。

また改行やら何やら細かい修正必要部分があるので、あしからず。

5

残念ながらぼくの期待は裏切られた。この場合はぼくの一方通行な願いなのだから、裏切られたと言うのもまたぼくの個人の一方的な感傷なのだけれど。

「それで、その男の外見的な特徴は何かありませんか？」

黒髪の彼女、佐々沙咲さんは急に黙ったぼくを訝しむように尋ねた。

「特徴ですか。でもぼく以外にも目撃者は多数いるはずでしょう？ぼくから聞かなくても、現場での事情聴取でわかりそうだと思いますけど」

「念のためです。事件発生直後は混乱しがちですから、間違って認識してしまう場合があります。その意味でも一番の当事者であるあなたからも聞いておきたいのです」

「なるほど」

沙咲さんは面倒そうな言い方をしながらも丁寧に教えてくれた。しかし、実を言うとあの時はぼくも割と混乱していたので絶対にそうだったと言い切るには些か自信がない。

とまたもや黙ったぼくを見かねたのか崩子ちゃんは

「白いスーツを着た１８０ｃｍくらいの男で左利きです」

と助け船を出してくれた。崩子ちゃんも結構あの時、焦っていた様な気がするけど、そこは冷静沈着、自若泰然の崩子ちゃん、よく覚えている。

「白いスーツですか。それは本当ですか？」

「はい、確かそうだったと思います」

「ふむ…」

沙咲さんは思案するような表情を作った。崩子ちゃんの記憶に齟齬があるとは思わないけれど、他の目撃条件と一致していなかったのだろうか。

「大体、他の目撃者から聞いたとおりですね」

「……」

久しぶりに会ったというのに、この人は相変わらずだ。目つきは警察特有の鋭さで、黒髪ストレートという雰囲気だけでなく外見からも職業柄一色で染まっているのに、この性格が加えられたとすれば、たまったものではない。流石哀川さんの友人といったところだ。このぼくでさえ頭がふらついてしまう。

さて、そろそろ何故この元診療所に沙咲さんがいるのかを説明すべきだろう。まずは自己紹介からか。

佐々沙咲――――京都府警捜査第一課の刑事。

つまり、今回の事件を担当することになった刑事だ。以前、大学生殺人事件の容疑者としてぼくの家に来たこともある彼女だけれど、会うのはかなり久々になる。いや、これは沙咲さんがぼくを意識的に避けているだけなのだろうけど。専ら頭脳労働専門である彼女は現場に出ることもなく、こうして目撃者の証言を集めたり、それを

元に犯人を追及したりと裏方で勤務に励んでいる。普段は相棒である斑鳩数一さんと行動を共にすることが多い彼女だけれど、どうやら今回は単独で行動しているようだ。

あれからぼくは崩子ちゃんを負ぶさって、みいこさんと合流し帰宅の途についた後、早速警察へと通報した。尤も、すでに銃乱射事件として対策本部も設置され何十人もの目撃者から情報を提供されていたので、今更ぼくの目撃談など然程重要性はなかったけれど、一応ぼくを標的にしている可能性もあるわけで、わざわざ沙咲さんにご足労を願ったわけだ。

沙咲さんは最初にぼくと崩子ちゃんを見た途端、『幼児監禁』ですか、と問いただしてきたけれど、今は落ち着いてぼくと崩子ちゃんの話を聞いてくれていた。ちなみにみいこさんは沙咲さんの来訪と同時に入浴。どうやら警察に良い印象を持っていないようである。

「でも、あれだけ派手に動いて捕まらないとはあの男もなかなかの手練れですね」
「それは皮肉ですか？」
「いえいえ、そんな意味じゃありませんよ。素直な感想です。沙咲さんのような優秀な刑事から見事逃げおおせるとは、まことしやかに信じられません」

そうなのだ。目撃者も山ほどいて、外見の特徴すらも押さえられているのに、未だに男の名前すら解らないというのは異常であろう。

「…この事件に関係あるかどうか解りませんが、一つ気がかりなことがあります」
「はい？」

「実は昨晩、潤さんがやってきたんです。勿論アポなしで」
「…なるほど、それはそれは」

あの人類最強の請負人は狐面の男との一件以来、再び忙しなく働いているようだ。ついこの間、崩子ちゃんを攫った挙げ句真心にボコボコにされて帰ってきたのは記憶に新しいが、あの人は相変わらず神出鬼没すぎる。

しかし、この場合何故哀川さんの話題を持ち出したのかぼくは解らなかった。ひょっとしたら厄介ごとかもしれない。

「哀川さんに何かあったんですか？」

また崩子ちゃんでも拉致しに来たのだろうか。もしそうならば再びぼくの親友に出張ってもらわねば。

「いえ、今回は割と深刻そうな雰囲気でした。何やら忠告があるとのことで」

哀川さんが忠告？それはかなり珍しい。

「それはまた哀川さんらしくない行動ですね。差し支えなければどんな忠告だったのか教えてくれませんか？」
「…天狗に気をつけろとの事です」
「天狗？」

天狗って、あの鼻の長い真っ赤な顔をした妖怪だろうか。

「ええ、それだけ言って、後はいつも通りの潤さんです。ひとしきり未解決事件を漁って帰りました」

ふむ。哀川さんなら未解決事件の一つや二つ、わけないだろう。それにそこは置いておくとしても、やはり哀川さんの行動は奇抜すぎる。ただの忠告ならば電話でも済ませればいいだけだし、京都に寄ったのならばここに顔を出せばいいのに。

「確かにタイミングが合いすぎるような気がしますね」

ぼくは言う。

「哀川さんの忠告と此度の銃殺事件。とても関係あるようには思えませんけど、あの最強の請負人がわざわざ京都にまでやってきて警告を残した翌日にこの事件。関係性が薄い割には奇妙なくらい説得力がありますね」

けれど、今回の事件を予め哀川さんが知っていたとすれば、警告などせずに自分で堂々と相手取ればいい話だ。それとも哀川さんにはのっぴきならない事情でもあったのだろうか。

「それより沙咲さん、そんなプライベートな事情を無関係なぼくに話していいんですか？それに崩子ちゃんにも」

「構いません」

沙咲さんはきっぱり言い切った。

「この忠告はあなたにも伝えるよう潤さんに言われていますから」

「哀川さんに？」

「はい。『あの戯言遣いにも言っといてくれや。まぁあたしなんかの忠告を聞くとは思わねぇけどな』だそうです」

うーん。それはさらに謎だ。ぼくへの忠告ならぼくに直接伝えれ

ばいいはずで、その方が確実である。
つーか、沙咲さん、哀川さんの物真似が上手すぎるだろう。
「それともう一つ。そちらの美少女さんに『おう、崩子ちゃん。また一緒にスカイダイビングしような』だそうです」
「…！」
ブルッと崩子ちゃんが身震いした。何かスカイダイビングにトラウマでもあるのだろうか。
「わかりました。忠告はしかと受け取っておきます」
「はい、是非そうして下さい。それと、もう一つ。護衛に関することですが」
「ああ、いいや。そういうのは大丈夫です。別に命が狙われたというわけでもないですから」
「そうですか。ならば、こちらとしても無駄な人員を割かずに済みます」
ぬ。さらっと酷いことを言われた気もしなくはない。
「では、私はそろそろ」
と、沙咲さんは腰をあげて
「また何か思い出したらご連絡ください」
と刑事お決まりの台詞を言って、そそくさと帰っていった。
「天狗に気をつけろ、か。どういう意味なんだろう」
「天狗がどうかしたのか？」

振り返るとみいこさんが甚平姿で立っていた。ちなみに風呂上がりなのでホクホクである。

「いえ、何でもありません。ただの独り言ですよ」
「ふーん、独り言か。それより、いの字。あのプライドの高そうな刑事さんはもう帰ったのか？」
「はい、沙咲さんなら今丁度帰ったところですよ」
「そうか、それは良かった」

みいこさんは踵を返してから、ふとぼくに振り向くと

「相変わらず、お前はああいう女性が好みなんだな」
「はい？」
「ん、何でもない」
「いや、何でもないと言われても気になりますよ」
「やーい、いの字のエロ助」
「はい？みいこさん、全然意味わからないですよ」

6

『――――お掛けになった電話番号は現在電波の届かないところに――――』
「ダメか…」

歪な男との邂逅から1日後の早朝。ぼくは満を持してぼくの親友

である玖渚友に連絡を試みたが、それはあえなく失敗した。そりゃ常識的な観念から見れば、こんな朝早くに電話を鳴らすのはかなりのマナー違反とも思えるけれど、玖渚友は自らの延命の代償としてその全てを失いかけているとはいえ、長年の週間がそう簡単に改善されるわけもなく、未だに朝も昼も夜も関係のない乱れきった生活を謳歌しているのだから、いつどのタイミングで電話してもいつもなら必ず捕まるのだ。しかし今回はその当ては見事に外れたようで、玖渚友の声を久々に聞くことは叶わなかった。

「友のやつ、まだ寝てるのか？」

仕方なくケータイをポケットにしまって、簡単な準備体操をし、台所へ向かう。出来れば友に昨日の射殺事件について色々と質問して、ある程度の情報を掴んでおこうかと思ったのだけれど、友に繋がらないんじゃそれも諦めるしかない。　昨日の事件を考えながらも朝食などの準備を済ませて、一息ついたところで

「んじゃ今日も頑張ってくる」

朝食を食べ終えたみいこさんは、バイトのため身支度を整え玄関へ向かう。ぼくも見送るためにみいこさんに続く。

「じゃあ行ってくる」
「はい、みいこさんいってらしゃい」
「いってきますー」
「みいこさん、らぶー」
「らぶー」

お馴染みの台詞を交わしてみいこさんは出発した。んー、何だか夫婦みたいだな。ちなみにみいこさんは小回りが利くとの事でフィ

アットではなくぼくのベスパで出発している。バイトに出たみいこさんに続くように崩子ちゃんも靴を履いて、外に出る。
「崩子ちゃんは今日はどちらに？」
「虫を殺しに行くんです」
と平然に言う崩子ちゃんは「いってきます」とドアノブに手をかけたまま、数秒ぼくに期待するような眼差しを向けたので、ぼくは気付く。
「…崩子ちゃん、らぶー」
「らぶーです。戯言遣いのお兄ちゃん」
と崩子ちゃんは気分良さそうに家を飛び出していった。
「崩子ちゃんもかなりませてきたな…」
さて、崩子ちゃんの今後の生活指導計画は一先ず置いておいて、ぼくも自分の準備をしなくてはならない。朝食の後片付けを済ませ、軽く掃除をこなし、洗濯物を豪快に外に干してから、ぼくは時計を見る。
現在時刻、１０：３０。
最初の待ち合わせは１３：００だから、そろそろ家を出てもいいだろう。この待ち合わせ時間は先方が取り極めたため、ぼくが遅れるわけにはいかない。いくら時間にルーズなあの人といえど、マナーは守るべきである。
「でも、こんなにも簡単に再会が叶うとはね」
気まぐれに電話をしてみた甲斐があったもんだ。昨日、交わした会話の雰囲気だと会ってくれそうもなかったのに。

「うーむ。そこらへん、あの人は読めないよなぁ」

今回最初に会う約束を取り付けた人物は、ぼくとしては再会を喜びたい相手なのだけれど、しかし当方の相手はむしろぼくを嫌っているてらいがあるので、ちょっとばかり注意が必要だ。あまり調子に乗って接したら機嫌を損ねてしまうかもしれない。

「まぁでも元々嫌われてるんだから、そう気構えなくても大丈夫か」

んー、嫌われるような事はしていないはずなんだけど。

いや、ここは久しぶりの再会に賭けて、淡い期待をしておこう。

そうして、ぼくはフィアットに乗り込み出発し、家は無人となった。

2―1（前書き）

物凄く、超が三つぐらいつくほど物語の進行は遅いですが、どうかご勘弁を。

2—1

0

泣くぐらいなら笑えよ

1

フィアットを適当な駐車場に停め、待ち合わせ場所である喫茶店まで歩く。烏丸通りを抜けて、やや人通りが減った区画に古風な店構えのカフェテラスがある。

そこが彼女との待ち合わせ場所だった。到着し入店し店内の全貌を眺める。ぼく個人の趣味趣向にはそぐわぬ店内の様式だが、確かにここならゆっくり雑談と洒落込むなら最高の雰囲気だろう。

「あの人、なかなかいい秘密の場所を知ってるじゃないか」

店内の心休まる雰囲気は彼女性格からはあまり想像出来ないけれど、まぁこうして彼女の意外性を垣間見えたのならぼくにとって今日のこの再会は十分に意味のあるものだったと言える。さて、意外性と言えば、まさしく意外だったのは待ち合わせ場所に指定されたのが京都市内にあるこの場所だったということだが、最悪、新幹線でも乗り継いででもぼくは彼女との再会を果たそうとしたけれど、こうして京都市内でその再会が願うとは一重に幸運と称してよいものだろう。

そして次に意外、というよりは想定外だったのは、時間概念に相

当横着な性格の彼女がすでにぼくの到着を待っていたということだった。
ぼくの姿を確認にした彼女は、至極嫌そうな顔をして、しかしそれでも大人の面子を保つためか、片手を上げて再会を喜んだ。
「久しぶりさね。あんたがあたしに逢いたいだなんて、一体どういう風の吹き回しさ？」
この人の私服を拝むのが初めてのせいかもしれないけれど、それでも数ヶ月ぶりの再会なのに彼女は――――右下るれろはだいぶ印象が変わっていた。というより、これは印象が変わったというより、ぼくが初めて右下るれろという人物をこのような日常風景を背景に出会ったせいであろう。著名人を街で見かけたときと同じようなものだ。
そういえば以前、人類最悪との一戦の時にぼくの親友に大怪我を負わせたるれろさんだが、すでに傷は完治しているようだ。包帯は取れているし、目立つ外傷も見当たらない。
「そんなにジロジロ見ないで欲しいさね。あたしでも恥じらいってのがあるんだよ」
「あ、すいません」
思わず謝ってしまった。そういえば、ぼくはるれろさんの包帯に巻かれた療養中の姿しか見ていなかったのだ。通りでＯＬ姿のるれろさんを珍しく感じるわけか。
んー、似合ってる。
「わざわざ呼び出してすいません。待ちましたか？」
「いいや。で、何の用さ？あたしはあんたに構っている暇はないんだけどさ。というか、何であんたがあたしの携帯電話の番号を知っ

てるんだ？」
「ああ、それは…」
絵本さんに教えてもらったから。
あの人、久しぶりに電話してみたら凄いハイテンションで用件を伝えるのに小一時間かかってしまった。
「まぁいいさ。で、本題は？」るれろさんは特に気にとめるわけもなく、どうでもいいやと言わんばかりに、大仰に脚を組み、先に注文していた紅茶の注がれた銀縁ティーカップに唇をつける。「大した用事がなけりゃあ、あたしは帰るよ」
「そりゃもう一大事ですよ。戯言遣い至上最大最高の大ピンチです。もはやるれろさんにしかぼくは頼るしかないんです」
「は、とっとと用件をいいな」
うわ、ちょーかっけぇ。
というかるれろさん、意外と姉御肌なんだな。
「…？」
「ああ、いえ」
るれろさんは表情だけで催促するという離れ業を見せ、ぼくはもう少し眺めていたかったけど、仕方なく諦める。ぼくは執事の衣装を身にまとったウェイターにコーヒーを注文してから、やや間を開け、そして言った。
「実はですね、昨日ちょっとした事件がありまして」
ちょっとしたなんて表現はこの場合全くもって不適切であるのは重々承知だが、会話の切り口としてはこんなものだろう。

「それで――――」
「その事件って、まさか昨日の繁華街で起きた射殺事件じゃないだろうさね？」

…す、鋭すぎる。

「そうみたいだね。はん、相変わらずあんたの周りはとんでもない事件がよく起きるさね。まったく、推理小説の名探偵か、あんたはさ」

事件は犯人が起こすのではなく、名探偵が引き起こすというのが、ぼくの持論であるけれど、今は黙っておくのが最良であろう。

「なら、話が早いですね。昨日の事件の詳細はニュースでも見てもらえば、大まかな内容はわかります。そこで、ぼくが聞きたいのは

今回の事件に狐さんが関わってるかどうか

それだけです」

るれろさんは黙った。ぼくは反応を窺うようにさらに尋ねる。

「ぼくの知り合いには、まぁそれなり気が触れてるんじゃないかと思うくらい変わった人間は多いですけど、それでもあんな往来で殺人に及ぶ人物なんてのはそうはいません。それこそ、あの人類最悪の手足であった十三階段のようにね」

再び、あの人類最悪が何かやらかそうとしているなら、それはぼくが止めなくてはならない。全身全霊をもって相手をしなければな

らない。　それがぼくが決めたルールだから。

「狐さんは、ぼくを標的にするのは諦めたそうですが、それでも世界を終わらせることに匙を投げたわけじゃありません。十三階段を解散したとしても、狐さんの人望、いやカリスマ性なら幾らでも新たな組織を作れるでしょう」

ふざけた男だが、カリスマ性が高いのは確かだ。だからこそ、こうしてるれろさんは十三階段が解散した今も、狐さんに付き添っているのだ。

「それで、未だに狐さんに従事しているあたしを疑っているのかい？」

「いえ、るれろさんを疑ってるわけではありませんよ。ただ、ぼくは懲りてるんです。幾ら一生付き合うと決めたからといって、狐さんの野望を一から十まで付き合う義理はありません。狐さんが何か企んでいるなら、それがまだ計画段階のうちに叩いてしまいたいんです」

「例え狐さんが、お前さんの言った通りに何かを考えていたとしてさ、それを正直にあたしがお前さんに教えると思うかい？」

「思いませんね。そんなご都合主義はこれっぽちも期待していません。そもそも、るれろさん。十三階段と相対した際に、ぼくは全員が全員、狐さんを裏切るように仕向けましたが、ただ一人、つまりるれろさん、貴方だけ失敗しているんですよ。そんな強情なるれろさんが、ペラペラと詐欺師みたいに話してくれるとは流石のぼくも思っていません」

「強情は余計さね。けど、結果的に見れば、あたしも狐さんを裏切ってることになるんじゃないか？狐さん本人に「裏切れ」と言われたとはいえ、決断したのはあたしさ。棋譜だけ見れば、あんたの目論見は成功してる」

「成功…ですか。確かにあそこまで狐さんがすんなり諦めてくれるとは思ってもみせんでしたからね。まぁぼくにしてみればあんなのは成功でも失敗でもない。狐さん風に言えば『そんなことはどちらも同じだ』ですよ」
「今さっき、失敗と言わなかったか？」
「そうですか？ならそれはるれろさんの聞き間違いです」
「ふん、そうかい」

るれろさんは数秒目を閉じてから「あの事件には」呟くように言った。

「あの事件に狐さんは関係ない」

るれろさんは慎重に言葉を選びながら言う。

「あたしが知る限り、狐さんはまだ何もしていない」

まだ、ね。また何かするのか。

「少なくとも、昨日の事件を狐さんは知らない」
「それはニュースを見てない、という意味ですか？」
「違う。…あんたも解ってるでしょ。狐さんは世界から追放されてしまっているのさ。あたし達の力を借りなきゃ、何も出来ないのさ」

世界から追放――――。
そう、かの人類最悪こと西東天は、因果から外れてしまっている。果てしないまでの最悪は、すでにこの世に関わることができない。追放され、除名され、殺されたのだから。狐さんは世界から見離されている。

「そうでしたね。しかし、るれろさん達が知らないところでまた何か企んでいるかもしれないじゃありませんか？」
「それはないさね」
「…随分自信たっぷりですね」

いくら、るれろさんと言えど狐さんが考えていることは見抜けまい。

「今は狐さん、２４時間木の実に監視されてるから」
「……」

今日ほど、狐さんが哀れだと思ったことはない。何でまた木の実さんが監視なんて。確かに彼女の空間制作能力は監視には打ってつけかもしれないけどさ。

「…何で監視なんですか？」
「この間、狐さん。『世界を終わらせる方法を思いついた』なんて言い出して、東京の歌舞伎町でぶらぶらしてたからさ」

あの男。何考えてんだ。
いや、何も考えていないんだろうけど。

「で、木の実さんが狐さんを監禁ですか」
「監禁じゃなくて監視」

ほとんど同じ意味だと思うけど。

「それじゃ、狐さんの仕業とは言い切れないですね。可能性がまったく０ってわけじゃなさそうですけど、あまり関係がないように見える」

「るれろさんが嘘をついていない限りはね」とは言わない。この場で、嘘をつけばいくらぼくでも多少は見抜ける。

「あたしの言葉を信じるか否かはあんたの勝手さ。けど、これだけは断言しておくよ。狐さんはもう二度と、『いーちゃん』あんたは狙わないさ」

「…どうして言い切れるんですか？」

「あんたも懲りてるって言ってたけど、それは狐さんも同じさ。狐さんも十三階段の時にあんたの異常性は痛いほど知っている。それでなお、狐さんはあんたを狙うような危ない橋は渡らないさ。狐さんは同じ轍は二度踏まない」

なるほど。それもその通りだ。狐さんにしてみれば、ぼくを標的にしたばかりに世界を終わらせることが出来なかったのだから。もし狐さんがぼくではなく、当初の計画通り零崎を狙っていればこういう終末にはならなかっただろうし。

「けど、あれが狐さんの差し金でないとしたら、あれは一体…」

正直言うと、今回もまた狐さんが関わっていると予測していた。だが、それは違うという。

しかし、どうだろう。あの場を支配していたあの歪な男は、ぼくを知っていたっぽいし、ぼくを狙っていた節がある。ぼくをわざわざつけ狙う輩が十三階段以外にいるとは思えないし、思いたくもないし、だとすると、やはり有力な候補としてどうしても狐さんが第一に出てきてしまう。

「はぁ、参ったね。こりゃどうも」

ぼくは恨まれる道理はあっても、狙われる道理はない。ましてや、意味もなく一般人を巻き込んでまで、ぼくを標的に定めるとは少々狂乱の度が過ぎる。
実に衝撃的で衝動的すぎだ。
何度も言うが、どう考えても、知能を持つ人間の仕業とは思えない。魑魅魍魎の類である『殺し名』や『呪い名』に遥かに近しい、異常なまでの思考回路でなくては、あんな行動は取れないだろう。
あの人間失格は、人を殺さない殺人鬼は『呼吸するように人を殺す』と言っていた。今となっては、哀川さんとの不戦条約に則り、手足をもがれた殺人鬼であるけれど、今回の射殺事件も以前の京都連続殺人事件と引けを取らない狂いぶりだ。
狂っていて、壊れている。
大抵、壊れている人間は多かれ少なかれ、破壊という衝動に動機や因果が存在しているはずだけれど、あの男に限っては　理由や根拠はない。
理由。
この世界において理由なんてのは後付け程度の意味しかない。結果に対する言い訳でしかない。
理由なき殺人はありえないと言うが、確かにそれは反論を弄するには苦しい事実であるけれど、結局殺人を犯している時点で理由など意味はないのだ。意味ある理由などない。零崎のような人間失格は例外の例外なのだ。
暴力や恋愛に理由は存在しないと考えられるが、それは単に”理由そのものを考える必要がない”からだ。理由を前提に考慮する過程が必要ないのだ。両者とも結果だけで十分であり、原因や理由など二の次でしかない。
だからこそ、暴力や恋愛には理由が存在していない、むしろ理由が必要ない。
あの歪な男はまさにそれだった。

まるで、暴力を振るうように人を殺し、恋するように人を殺した。理由は必要ない。考える必要がない。

ぼくもそれほど魑魅魍魎のあの世界を知っているわけじゃないけれど、『殺し名』や『呪い名』よりも恐ろしい、下手すればあの人類最悪に匹敵するやもしれない歪な男にとって、殺人は恋愛と同意義なのかもしれない。

それともう一つ。最初で最後、あの歪な男が、ぼくに対して言い放ったまさに戯言。

『やぁ、こんにちは。僕の救世主――――』

――――救世主。あの歪な男はこのぼくを救世主と言った。そりゃ、往来で堂々と殺人を犯すような輩の言葉など、信じるほうが浅はかだけれでも、それでもあの言葉がただの譫言（たわごと）とは思えない。何かしらの意味が――――。

「ねぇ、物思いに耽るは自由だけどさ。そろそろあたしを解放してくれないか？」

見るとるれろさんは、空になったティーカップをカタカタ揺らしながら、ぼくを見ていた。

「ああ、るれろさん、あなたまだ居たんですか」

「…あんた、あたしが橙なる種の肉体を調教した人形士だってこと忘れてるんじゃあるまいね？その気になれば、今この場であんたの肉体も藁人形のようにくしゃくしゃにして遊んであげるけど」

「冗談ですよ。いや、すいません。ぼくって会話の最中に自分の世界に入り込んでしまうことが多くてですね。いつも話し相手の子に

は嫌な思いをさせちゃうんです」
「それははた迷惑な癖だね。まぁそういう所は狐さんに似てるんだけどさ」
「実は今も、調教という言葉は、こうもどうしてもエロティックな響きを醸し出すのだろうって、考えてました」
「お前はあたしとの会話で何を想像しているんだ！」
「嘘です。本当はるれろさんのＯＬ姿を見て、いかがわしい想像をしてました」
「そっちのほうがよっぽど嘘であって欲しい！」
「るれろさんは、意外とナース服とか合いそうですよね」
「あたしを着せ替え人形のように扱うな！」

人形士のるれろさんを人形扱いしてしまう戯言遣いであった。

「まぁ本当に冗談はここまでにしておいて」
「本当に冗談なのか怪しいもんさね…」
「今回の事件に本当に狐さんは関与していないんですね？」
「していない」

うーん、ギャグで油断させるつもりだったんだけど、るれろさんは動じなかったか。
おそらくるれろさんの言うとおり、今回は狐さんは一片たりとも関わっていないのだろう。

「なるほど、わかりました。なら今はるれろさんの言葉を信じておきます。それに木の実さんに監視されているのであれば、限りなく白に近いですよね。では、今日はわざわざありがとうございました。お忙しい時間に」
「いいさ。本当はあまり忙しいわけでもないし」

だろうさ。るれろさんがＯＬ姿で企業に従事しているなど、それこそぼくですら想像できん。

「あ、最後にもう一ついいですかね、るれろさん」
「ん、何さ？」
「『天狗』ってどういう意味だと思います？」
「顔が真っ赤なカラスの妖怪、なんて回答しか思いつかんよ」
「そうですか、いえ気にしないでください。遊び半分な質問ですから」

伝票をさりげなく持って、カフェを出た後、しっかりるれろさんに昼食の誘いを断られて（何やら、次の待ち合わせがあるらしい。聞いてみたところ男と会うそうだ。結構ショック）、そしてぼく達は別れた。

「うーむ。３割は疑問解消ってところかな」

るれろさんとの再会は思っていたよりは有意義なものとはいかなかったが、それでもまずまずの収穫だった。それにしても、やはり狐さんは今回ばかりは繋がっていないのだろうか。
それならそれで、ぼくには多くの疑問が残るのだけれど。るれろさんの話を聞けてある程度、整理ができたが、まだまだ本質的な回答を得られないままだった。

「ん？」

ふと妙な視線を感じて、振り向くが、特に何もいない。カラスか何かだろう。見上げた空はいつの間にか暗くなっていた。

「この天気じゃ一雨来るかもね。崩子ちゃん、傘ないけど大丈夫か

な」

やや曇り始めた空を見上げ、喫茶店の駐車場に停めてあったフィアットに乗り込み、ぼくは第二の待ち合わせ場所へ向かった。

2―1（後書き）

さて、るれろさんの再登場となりましたが、実はイマイチ僕の頭の中で右下るれろという人物像が上手い具合に出来ていないんですよね。戯言シリーズではわりかし好きなキャラである彼女ですが、どうも外見を見てると姉御肌を想像しちゃうんです。語尾が「～さ」だったり、一人称が「あたし」だったりするからでしょうかね。でも姉御肌だとむいみちゃんと被っちゃうんですけど。
まぁセリフはおいおい改編するとして（そればっかだな）、とりあえずストーリーを進めていくのが最良だと判断したため、このまま行くとしましょう。

2－2（前書き）

急に改編したので文章が少しおかしいです。

いずれ修正します。

2―2

2

予定通りに、次の待ち合わせ場所にて彼と彼女に再会し、昼食も兼ねてしばらく話し込んだ後、ぼくは今日一日のノルマをクリアし、今日も今日とて三人分の夕食を作るため元診療所へと帰り、そしてそこで

みいこさんの遺体を発見した。

3

いや、死体はみいこさんの物ではなかった。

紺色の甚平にポニーテールという完璧なみいこさんの形態模写がなされていた為思わず勘違いしてしまったのだ。よくよく見てみれば、みいこさんの特徴がなされているだけで、輪郭や体格はまるっ

きり違っている。
もっとみいこさんは腰がね、とそんな事は今は関係ない。
「……」
ご存じないお方が床に横たわっている。この季節ともなると、結構フローリングのこの床は冷たいと思うけど、まぁ死体にはちょうどいい温度なのかもしれない。
「ふぅ、とりあえず外で深呼吸だな」
こうも矢庭にの死体との遭遇は疎遠だったので、どうも思考がクレイジーな仕様になっている。
外へ出て空気を深く吸い込み、吐く。肺に酸素が満たされ、見通しの悪かった脳内も爽やかになる。
よし、リセット完了。ぼくは再び、ドアを開ける。勿論死体は転がったままである。
「あの、どこのドナタ様でしょうか？」
ふむ、なるほど、なるほど。
応答はない。
さて、冗談はここまでとして、一先ず現場検証か。
殺害現場は木賀峰助教授元診療所の玄関である。死体に争った形跡はなく、本来なら果物を剥くために用いられるだろう小型のナイフが丁度心臓辺りに刺さっている。時間は１６：２６。第一発見者はどうやらぼくのようだ。
「参ったな。これじゃ夕飯どころじゃない」

見当外れな独り言を呟き、もう一度、最後の確認を含めて被害者の顔を伺う。
ふむ。一分一厘、知らない顔だ。道端で遭遇していたら、まず『初めまして』からの会話になるだろう。年はみいこさんと同い年ぐらいで、勿論女性、そして格好は先述した通りで、それ以外に奇妙な点はない。

「本当に誰だよ、この人」

いきなり玄関で死人に遭遇するのって――――しかもその死人は見知らぬ赤の他人――――どのくらいの確立なのだろうか。こうして、少なくともぼくは遭遇しているのだから、確立０％ってわけではないだろうけど。
ぼくは名無しの権兵衛さんの横を通り、居間を確認。次に二階に上がり、そしてもう一度、一階の部屋を隈無く見て回ったが、荒らされた形跡もなければ、犯人がここに駐留したであろう痕跡もない。
つまり厄介なことに、この事件は『密室殺人』であるようだ。窓という窓は鍵が掛かり、必然玄関のドアも同様で、そして合い鍵はぼくのを含めてみいこさん、崩子ちゃんので三つだ。出入りの手段はなく、誰かが帰ってきた形跡もない。手っ取り早い『密室』だった。

だが、『密室』である以上に気になる、異常とも考えられるのが、この死体だ。ナイフでひと突きのこの死体には確かに奇妙な点は存在していないけれど、それはあくまで死体にはないだけであって、この死体の在り方、つまり発見現場だけ取り上げれば、まさしく異常なのだ。
ぼくが知る限り、殆ど頼りにならない記憶を辿ってみるが、この女性がこの元診療所を訪ねたことはなかった。　もしかしたら、こ

こがまだ西東研究所として活動していた頃の知り合いかもしれないが、そうだったとしても何もここで死ぬ理由にはならない。まさか偶然、この診療に訪れた人間同士が犯行に及んだのだろうか。しかしそうだったとしてもわざわざ密室にする必要はないし、そもそもそんな奇跡みたいな偶然は起こりえない。

そう起こりえない。

行き過ぎた偶然は、つまり必然なのだ。

偶然に見立てた必然。

哀川さん曰く、確立の低いものほど実際には起こりやすいとお言葉だが、しかしだからと言って、これもあれも偶然だと、その一言で処理してしまうのはどうかと思う。普通ではとても有り得なさそうな確立だからこそ、何らの故意が働いてると考えるのが常人の考えだ。もしサイコロを１００回連続振って、１００回連続６の目が出たとしたら、きっとそのサイコロはすべての目が６なのだ。大袈裟に誇張すればそういうことで、実に単純明確、必然を偶然にすり替えているのだ。

つまり、ぼくが言いたいのは、この犯行は何らかの恐らく犯人の思惑が働いているということ。この現場も被害者も何かしらの意識によって生じているのだ。

「どうなってんだ、まったく」

しかし、行き着くのがそこまでだ。それ以上に話が進まない。

これでもぼくは何度か『密室』にも遭遇し、少なからず『殺人事件』にも関わってきたはずなのだけれど、今回は全くの規格外だ。

なんせ被害者も加害者もわからない。これじゃ、名探偵どころか探偵が臨むような事件ではない。

これは、警察の領分だ。数にものを言わせ、人海戦術のごとく情報をかき集め、被害者、犯人を特定していく一種のサバイバルゲームのようなものだ。

とても名探偵の仕事ではない、いや、ぼくの扱えるレベルじゃない。

「沙咲さんは――――来れそうもないか」

現在、警察は昨日の射殺事件犯人の特定に大忙しであろう。公共機関である以上、ぼくからの通報があれば忙しさなどに関係なく駆けつけてくるだろうが、それでも今の警察に頼るのは若干の躊躇いがあった。

「ひょっとしたら、昨日の男と何か関係があるのか？」

それは考えすぎの被害妄想かもしれないし、第一警察に追われているあの男がわざわざこんな辺鄙な場所にある元診療所で、しかもまったくの赤の他人を殺害するとは、考えづらい。

「ああ、やばいな、これは」

――――曖昧すぎる。しかも、この手の曖昧は、『不明』過ぎる曖昧はぼくの弱点だ。何もわからないし、何も見えてこない。　実に不明確で不透明だ。

「かと言ってこのままにするわけには…」

ぼくは少し考えて、携帯電話を取り出した。

そういえば、ぼくはもうほとんど、大学には顔を出していないの

だけれど、それでも学内の知り合いは都合よくぼくを忘れたりするはずはなく、ぼくとしても全てを機械的に忘却する機能もないのだから、多少なりとも交友関係は生きているわけで、つまり何が言いたいかというと、ぼくは学友である、病院坂失策に助けを求めたのだった。しかし、ぼくとしてはこの病院坂に頼ることは、ある意味、玖渚以上の最終手段だ。

奥の手も奥の手。
禁じ手も禁じ手。

非常に都合が悪い。
しかし、これはぼくの都合というよりは、この世界の都合という意味でだ。
例えば『零崎一賊』。彼らは『殺し名』において最も忌み嫌われる一族、敵にも味方にも回したくない、醜悪にして最悪の一賊だとか。
どの世界にも禁忌や忌避されるものは存在する。
そしてそれは当然、その中でも最も広く最も強い、普通の世界にも当て嵌まり、当て嵌まるが故に『零崎一賊』のように忌避される、とある家系がある。

それが『病院坂家』。

世間に疎まれ、嫌忌され、嫌厭される家系。
誰もが、異端で外道で邪道で。そんな奇天烈な家系。

しかし、それでも『病院坂家』がその風変わりな体(てい)から明白な迫害を受けているかと言うと、それは否である。そこはやはり普通の世界の住民。上手いこと共生を成し遂げている。大学へも通学しているし、友達もぼくよりはいるみたいだし。

まぁ、ここまで散々な事情を嘯いたが、実は『病院坂家』云々の話題はほぼ、前述の病院坂失策から聞いた内容を復唱しているだけであり、ぼくはそこまで『病院坂家』に対して隔壁あるわけではない。

そもそもぼくは『病院坂家』と言っても、病院坂失策しか知らないのだ。

とはいえ、やはり病院坂失策の登場はぼく個人としては、あまり好ましくはないのだけれど、この際そんな悠長なことは言ってられない。

なんせ、玄関に死体である。

普通なら卒倒だ。

ケータイを1コールで出た病院坂は、ぼくがとりあえず場所と簡単な用件を話すと、すぐ行くと即答し電話を切った。正直な話、この芳しくない状況を考慮してなお、病院坂の登場および再会はぼくは気が滅入って仕方がないが、まぁ我慢しかない。

数十分後、宣言した時刻よりもだいぶ早く、病院坂を乗せているだろう一台のバンが元診療所前に到着した。

「久しぶりだね、いー坊。僕こと病院坂失策(びょういんざかしっさく)はこの再会を実に胸躍る思いで期待したよ」

そう大層なセリフを溌剌と述べながら、病院坂は登場した。

「嬉しいな、まさかいー坊からお呼びだしがあるなんてさ。光栄の極み、いや病院坂家の誉れだよ」

病院坂は、いやこれは本当だよ？大学でも有名で人気者で、ふざけてんのかって思うくらい学校を休む、あのいー坊から救援の連絡

が来るとは、生きてて良かったって思うよ。
病院坂は表情だけで、そう語る。
相変わらず器用な奴だ。
相変わらず奇妙な奴だ。

「ああ、久しぶりだね。ぼくもまさかもう一度病院坂に会うことになるとは思わなかったよ。最後に会ったのは４年前だっけ？」
「ううん、２０年前だよ」
「それだと、ぼく達の出会いは母体の中ってことになるけど」
ボケをボケで返す病院坂。こいつは漫才に向いていない。むしろ向いてる職業なんてない。
挨拶もそこそこに病院坂は切り出した。
「んで、いー坊。救援って一体何をすればいいのかな？」
出来ることがあれば何でもするよ、勿論エッチなこともね。　と病院坂は笑う。
「しかし、それよりも病院坂。お前は相変わらず表情だけで、そこまで以心伝心できるのはすごいな。それも『病院坂家』の特徴なのか」
まさか、そんなことないよ！
病院坂は驚いたように言う。いや表情だけで語る。
「この特技は僕の知り合いの『病院坂』の真似さ。面白いし――――」
――――便利だから使わせてもらっているのさ。
ふむ、やはり『病院坂家』は変わっている奴が多いのか。

おっと、今はそれよりも

「まぁいいや。病院坂に見てほしいのは」とぼくは病院坂を玄関に招待した。　無論、まだ死体は転がっている。

死体を見た病院坂は、特に慌てる素振りも見せずに

「なるほど。証拠隠滅とアリバイ工作を手伝えばいいんだね？」

「違う。ぼくが殺した訳じゃない」

え？違うのかい？と病院坂。

「ぼくが殺人なんて犯すわけないだろ。大体、ぼくは被害者とまるで接点がないんだよ。ぶっちゃけ言って赤の他人もいいところさ」

「ふーん、そうなのか。面白くないね」

こいつ、ぼくが犯人のほうが面白いとでも言うのか。病院坂は黒い髪をかき分けてからしゃがみ、玄関に無残に放置された死体を見た。

「専門家でもないから、詳しく解らないけどこれは死後二、三時間ってところかな」

そして、この状況を見る限り、これは『密室殺人』なのかな？

病院坂は見透かしたように笑う。

「そうだよ。お察しの通りだ。さすが病院坂。だけど、別にこの犯人を見つけてほしい訳じゃないんだよ」

ん、どういう意味だい？と、病院坂はキョトンとした顔でぼくを見た。

「どういう意味も何もそのままの意味さ。ぼくは君を犯人解明のために呼んだんじゃない。だから謎解きに挑戦する必要はないよ。謎解きの役、名探偵の役は間に合ってるからさ」

ガーン、と効果音が聞こえてきそうなほど衝撃を受けたらしい病院坂は、大袈裟に打ちひしがれた。

ん、予想以上にショックが大きいようだ。

ぼくとしてはあまり病院坂に頼りたくなかったから言っただけなんだけど。

まぁ実際のところ、どうせ病院坂にはこの事件は解けまい。

「なら何のためだい？」震える声で病院坂は言う。「何のために、この僕に五限の授業をサボらせてまで呼びつけたんだ？」

「この死体を片付けて欲しいんだよ。これじゃろくに居間にも上がれないし」

ガーン、ガーン、と連続で病院坂はショックを受けたようで、わなわな震えている。

「片付けるために、それだけのために、呼ばれたのか。せっかく、せっかく、いー坊に呼ばれたと、思ったのに。ただの、思い上がりだったなんて。うぅ、あんまりだ」

酷いよ、いー坊。酷すぎるよぉ。こんな、こんな魅惑的な女の子を誑かすなんてぇ。

病院坂はくしゃくしゃになった表情で語る。

「別に誑かしてるつもりは微塵もないんだけど。で、病院坂。君な

らこの死体を都合よく、分別よく片付けられるだろう。何も東京湾に沈めろとは言わないからさ。発見場所をごまかして、死亡時刻をごまかして、そうしたら警察にでも届けてくれればいいよ」
「無茶言うね」

病院坂は涙を拭いながら

「なんで、ただの大学生にそんな事を頼むんだよ、いー坊。世界にはやれることとやれないことがあるんだ。それこそ都合よく、分別よく、死体を誤魔化すなんて無謀じゃない？」

「まぁ一般人なら無謀だろうけどさ」ぼくは続ける。「君は『病院坂家』なんだろう？」

「くしし、いー坊が期待してくれるのは光栄だけど、僕は『病院坂家』のはぐれものだよ？家長の病院坂苦言とかに比べたら、僕が動ける範囲は微々たるものさ。いー坊、僕を過大評価してない？」
「君だって、ぼくを過大評価しているだろうが」
「僕のは過大評価じゃなくて、崇敬さ」

崇敬ね。そんなもの、ぼくから見れば過大評価とさほど変わらない。

むしろ、より面倒だ。

「病院坂。ぼくも君とこうして話を続けていたいのはやまやまだけど、生憎、君の事はみいこさんや崩子ちゃん、それこそぼくの知り合いという知り合いには、その存在さえ話してないんだ。ぼくにとって君は裏技さ。だから、あまり君と長居をして、誰かに遭遇するってのは考えたくない。出来るか出来ないか、どっちかで答えてくれ」

「できるよ」

病院坂は即答した。

「さっきはああ言ったけどね」病院坂は玄関の死体を見下ろしながら「死体の処理なんて、この病院坂失策にしてみれば余裕綽々、朝飯前だ。だけどね、いー坊。この病院坂失策を裏技呼ばわりすると、まったくいー坊らしい、とてもユニークな愛称だけど、ここはあえて苦言を呈しておくよ。病院坂失策は裏技じゃなくて、バグそのものだ」

「ん、どういう意味だ」

「そのまんまの意味さ。病院坂失策は手段ではなく原因。それだけさ」

うん、そうさ。いー坊の言い分も解るけど、残念ながら裏技ってのは正しくない。不正解だ。裏技は手段であり方法、そして病院坂迷子は現象そのもの、原因そのもの。

裏技なんかじゃなくて、バグ。

裏技を引き起こす原因。

だから”俺”は病院坂失策であり、”私”は病院坂失策なのさ。

と、病院坂は口を閉じたまま、言う。

「話が長くなったね。しかし許してくれよ、いー坊。そんな裏技感覚で、使われるのは正直困る。それに、これだけは覚えておいてくれ。バグを使い続ければ、いずれそれはハードにも影響して、最後は壊れてしまう。この場合はハードが一体何に値するか、頭のイイいー坊ならわかるよね。いいかい、いー坊。これは忠告かつ病院坂失策の取扱い説明書だ。あまり、容易には頼らないでくれよ。それが『病院坂』なんだ」

「……」
「んじゃ、いー坊のご希望通り、ちゃっちゃと片付けてしまいますか」

と、一度病院坂は玄関を出て、駐車場に停めてあったバンに何やら指示を飛ばした。ぼくも一度外に出る。すると、バンから作業服を来た男性が数名出てきて、ぼくと入れ替わるように玄関に入り、手際よく死体を片付けていった。まるで流れ作業のように死体が片付けられ、血痕も奇麗に除去され、ほんの数分で掃除は完了した。

これで満足かな？
病院坂は元に戻った玄関を見ながら、ぼくの表情をうかがう。

「ああ、助かった。急な呼び出しで悪かったな」
「いや、もう気にしてないさ。それより、いー坊？」
「なんだ？」

あの女性には本当に心当たりがないのかい？
病院坂は今までの笑みを消してぼくをじっと見た。

「ああ、全く心当たりなしだ。これっぽちもない」
「そっか。ならいいや」

それだけ言って、病院坂はルンルン鼻歌交じりにバンに乗り込もうとする。

「あ、おい、病院坂」
「なんだい、いー坊？」
「せっかく久しぶりに会ったんだから、うちで夕食でも食っていかないか？積もる話もあるだろう」

ぼくは社交辞令ではなく、素直な気持ちで言ったつもりだったが

「それは遠慮しとく。いー坊とディナーだなんて聞いただけで全身鳥肌が立つほど興奮するけど、今回は、不本意だけど断っておくよ」

「何でだ？遠慮する必要なんてないぜ。別に気兼ねする仲でもないだろ？」

「んー、一応その質問に答えておくとね」

病院坂は少し無理したように笑いながら

僕は『病院坂』だから。病院坂に、病院坂失策にそんな幸せは巡って来てはいけない。

「それじゃ、いー坊。たまには学校に来てよ。首を長くして待ってるからさ」

そう言って、いや厳密には言葉ではなかったけれど、病院坂は帰って行った。

2―2（後書き）

さてオリジナルキャラクターの病院坂失策ですが、こいつは当然完全オリジナルではなく、世界シリーズの『病院坂』をモチーフに考えています。特にくろね子さんを意識。そして迷路ちゃんの表情での会話。まぁここまでくるとほぼクロスオーバーみたいなもんですが、ご了承下さい。

2―3（前書き）

さて、今回は人間シリーズで活躍したあのお方が登場します。

2―3

4

結局、音沙汰もなく一週間が過ぎた。

”歪な男”は未だ、警察の手には捕まっていないらしく、また元診療所もとい我が家の玄関で起きた密室殺人の解明もされていない。密室殺人の方は、何回か病院坂に連絡をとって事の次第を確認した。すでに遺体は警察に引き渡され、“第一発見者”の病院坂はそれなりの事情聴取を受けているようだが、当然病院坂の事情聴取というか、遺体の操作も含めて全てが偽装なのわけで、犯人など追及できるはずもなく、現状では後回しにされているようだ。ただ被害者の女性は、やはりというか予想通り、ぼくとは縁もゆかりもない人物だそうだ。ぼくにしてみれば大層迷惑で難解な密室殺人だが、今のところぼくも警察の皆さんに倣いこの事件は後回しにしている。この手の曖昧な先延ばしはぼくの得意分野だ。

勿論、この事は崩子ちゃんにもみいこさんにも話してはいない。あの密室殺人が何かのトリガーになりうる可能性もあるけれど、あの二人を下手に巻き込ませるよりは、全くの無関係であった方がぼくには好都合だからだ。無知は既知より強いわけだし。

それと、相変わらず玖渚には電話が繋がっていない。ぼくもそろそろ心配になってきた頃合だ。近々、城崎のマンションにも訪れる予定だが、連絡がつかない以上、アポイントなしの往訪も止むを得ない。

まぁ総合的な判断を下せば、大した激動もない一週間だったが（先週があまりにも劇的過ぎた）、それでもぼく個人の感想として比

較的大きなニュースもあって、つまり何かというと、どうやら真心が京都に帰ってくるようなのだ。
昨日の晩、病院坂を見送ってから、哀川さんの代わりに保護者担当を任せられた小唄さんから連絡があった。
「久々ですわね、お友達（ディアフレンド）。突然ですが、あなたの親友がどうもホームシックみたいでしてね。つきましては、近々京都へ凱旋と致しますので、十全のお出迎え、宜しくお願いしますわ、お友達（ディアフレンド）」
との事だ。
ふむ、しかしあの真心がホームシックになるとは――――恐るべし小唄さん。
あの人もあの人で性悪だからな。
まぁでも、真心との再会が楽しみでないわけがない。小唄さんに会うのは少し気兼ねするが、うん、親友のためだ、不精ながらこの戯言遣い、精一杯のお持て成しをさせてもらおう。

それと、もう一つ。
これに限っては、ぼく個人とはまるで関係のない話になるけど、日本の政権を握る御仁、つまり内閣総理大臣の邸宅が何者かに襲撃されたらしい。風の噂によれば、日本の敵視しているアジア系のテロ組織による犯行らしいが、テレビを見る習慣がまるっきりぼくにはないので、事件の詳細は解らない。
「物騒な世の中だな」
ま、ぼくが言えた義理でもないが。
日にちは変わって、密室殺人発生から一週間後の午後。ぼくは昼食の片づけをしながら、誰に問いかけるわけでもなく呟いた。平和

といえば平和、というより平穏だが、流石にあれほどの事件に直面したとしても、一週間も経てばこんなものだろう。

「ところで、ニート以上社会人未満のお兄ちゃん」

ふと、声を掛けられてぼくは流しで食器を濯ぎながら、横を向く。

「何だい、わんこちゃん以上忍者未満の崩子ちゃん」

「電話です」

「ん、了解」

濡れた手を適当に拭いて、崩子ちゃんから子機を預かる。崩子ちゃんはぼくに子機を渡すと、一目散で和室にあるテレビの前に舞い戻った。どうやら、昼ドラを見ているらしい。

「もしもし」

「あ、もしもし。えーっと、は、始めまして」

「あ、はい、始めまして」

誰だろう。聞いたことのない声である。

「あの、わたし、無桐――――じゃなくて、ぇーっと」電話の主は妙に言い淀む。「す、すいません。ま、舞織というものですよう」

「舞織さん、ですか？」

声に引き続き、聞いたことのない名前だ。ぼくの知り合いにはいなかった気がするが、しかしぼくの記憶力のことだ。単に失念しているだけかもしれない。

それに間違い電話という線もある。だとしたら、こうして話し続

けるのは向こうにも失礼だ。

「もしもし、舞織さん。番号を間違えてはいませんか？」

「ぇ、ぅぁ、そうかもしれないですよう。し、失礼しましたー」

と、電話が切れた。しかし、子機を持って数秒待つと、再び電話が鳴る。

「もしもし――――」

「舞織です！」

「……どうやら、間違いではないみたいですね」

「えっ？ぁ、そ、そうみたいです」

とりあえず、声から察するに女性であることはまず間違いないだろうけど、寡聞にして知らない声である。しかし、この診療所の電話番号を知っている人間はある程度限られるから、ぼくの身近な誰かの知り合い、というのが妥当な線だろう。

「ぇーっと、舞織さん。とりあえず、要件は何かな？でもだぶん、ぼくは君とは面識も認識もないと思うんだけど」

「ぁ、はい。《欠陥製品》のお兄さんとは、わたしはまだこれっぽっちもお逢いしたことはありませんので、その認識で大丈夫ですよう」

面識はないのか。なら今回はぼくの記憶で正解であったわけだ。といっても、面識があったかどうかを思い出せていない時点でぼくの記憶細胞は十分、不正確なのだけど。

と。そこで、ぼくは気づく。

「ん、ちょっと待って」

今、この子、ぼくを何て呼んだ？
ぼくの、聞き間違い出なければ――――。
「あ、すいませんっ！何か失礼なことを言っちゃったでしょうか！？」
「いや、そうじゃない。そうじゃないよ、舞織さん。あの、ぼくの聞き間違いかもしれないんだけど、もう一回、ぼくの名前を呼んでくれるかな？」
「え、どうして、ですか？……あっ。すいませんっ！そういえば、この呼び方はお兄さん専用、って聞いてたのを焼却してましたっ」
焼却？忘却だろうか。燃やしてどうするんだ。
いやいや、それよりもこの子。今確かに、このぼくのことをこう呼んだ。
『欠陥製品』
これでぼくのを呼ぶのは全人類探し回っても、一人だけ、たった一人だけだ。それも、ぼくの対極に存在する、あの男だけだ。
「君、もしかしてさ」ぼくは一つの結論にたどり着いて、電話の主にこう問う。「君って、零崎の、零崎人識の――――」
「ぁ、はい、『欠陥製品』のお兄さんの予想であってると思います」
ぼくの言葉を遮るように、電話の主は、舞織さんは、いや、零崎は――――言った。
「わたしは零崎舞織、零崎人識の妹にして、残存する最新にして最

後の零崎でぇしゅ。いたっ、噛んじゃったですよう！」

2―3（後書き）

短いですが、実は次話の準備もできているので、そう時間をあけずに更新できそうです。

2－4（前書き）

年明け一発目です。

2―4

5

あの『人間失格』とぼくの関係性を詳らかに説明するというのなら、それは単純に『表裏一体』の一言に尽きてしまうだろう。

ぼくはあいつで、あいつはぼくだ。まさに鏡のような裏表の関係。

ぼくは戯言遣いで、あいつは殺人鬼。

戯言か傑作。

そりゃ外見や体面は大いに、これだけは断固として認めたくない、大きな大きな違いがあるけれど、それでもぼくとあの人間失格は最も近く、最も遠い存在だ。　それはまさしく、鏡に映る己の姿のように。

これがぼくと、人間失格こと『零崎人識』との関係だ。

「…零崎人識の『妹』？」

「はい、と言っても零崎一賊は家賊としての集団だったので、わたしはみんなの妹ってことになります。「脱愚妹」「義妹主権」「妹重視」で国民の手に政治を奪還する！　みんなの妹はあなたの妹ですよう！」

「ごめん、ぼく、政治には疎いんだ……」

舞織ちゃんに公約を書かせたら二秒で落選だろう。というか、義妹主権ってなんだ。

まぁ。

それにしても。

過去形、ね。
家賊としての集団『だった』。
そう、すでに零崎一賊なる集団はこの世には存在しない。流血によって結ばれる鬼の集団は塵芥のように排除されてしまった。
想影真心によって、橙なる種によってぼく達のアパート同様に、壊滅させられた。
ぼくが知り得る限り、唯一の生き残りである『零崎』はあの人間失格だけだと思っていたけれど、そういえば、あいつ以前、別れ間際に妹がどうとか言ってたな。

それが、今のこの子か。

「で、その零崎の末裔さんがぼくに何か用かな？」
「ぇ、ぇーっと、実は人識く――――零崎人識を探してるんです」

零崎を探してる？まぁあの人間失格に妹を世話する甲斐性などないのだろうから、フラッと消えてしまってもぼくは特に驚きはしないけれど、それにしたってこんなに身を案じてくれる妹を放置して放浪とは、あの人間失格も中々人間ができている。

「でも、なんでぼくにその事を聞くんだい？同じ家賊なんだから、舞織ちゃんの方がわかりそうなものだけれど」
「わたしも色々探してみたんですけど、全くわからなくて。それで、人識くんが前に言っていた『欠陥製品』のお兄さんに聞いてみようって思ったんですよう。この電話番号も人識くんから聞きました」
「なるほど。でも生憎だけど、ぼくも零崎と最後に関わったのはもう数ヶ月前だからね。《死吹》っていう『呪い名』の人間には少し前に会ったけど、あの人間失格の行方なんてのはぼくにはわからないよ」

ただでさえ神出鬼没な殺人鬼なんだから、向こうからひょっこり姿を現してくれないと、ぼく達では探しようがない。
例によって、大泥棒である石丸小唄や請負人、哀川潤に依頼する必要があるだろう。

「そうですか。でも、また哀川さんに依頼するのも……」

それは、やあですねえ。と電話越しで呟くのが聞こえた。
そういえば、哀川さんは『殺し名』の中でも有名人なのだったっけ。何でも『死色の真紅』などという物騒な愛称で親しまれている（いない）とか。舞織ちゃんも一応は零崎であって、『殺し名』であるのだから、哀川潤に対して頼りづらいというのもあるのだろう。
しかしそれにしても、舞織ちゃんのこの話し方からすると、どうも哀川さんとの交流もあるようだ。ま、その交流が良好なものかどうかは、さておくとしてだけど。

「うーん、申し訳ないけど、零崎の行方だけはさすがのぼくは解りかねるね」
「そうですか……」

小唄さんは真心の教育で忙しいだろうし、そもそも小唄さんは便利屋さんではなく大泥棒だ、哀川さんは論外。
なら、ぼくが最後に思い付くのは、『凶獣（チーター）』こと綾南豹だけれど、彼は只今、絶賛幽閉中である。後、１４９年ほど我慢できるなら、ぼく直々に頼んであげてもいいけれど、ぼくの寿命も舞織さんの辛抱もそこまで長くは持つまい。玖渚に中継してもらう案もあるけど、何故か先週から連絡が取れない。

「お役に立てなくて、申し訳ない。でもまぁ心ばかりの励ましに聞こえるかもしれないけど、零崎人識はそう簡単に死ぬ人間じゃない

だろうから、あんまり心配しなくても大丈夫だよ。その内、ひょっこり、それこそ殺人鬼だけに神出鬼没に現れるさ」

――――戯言だけどさ、とはぼくは心の内で何ともなしに呟く。

ぼくを言葉を聞いて舞織さんは少し黙った後、呟くように言った。

「……まったく人識くんは、本当にかっこつけたがりなんですから」

「？」

「……いえ、これはきっと人識くんなりに家賊を演じているつもりなんでしょうね」

「？？」

ぼくは舞織ちゃんの言葉に戸惑う。

「舞織ちゃん、何を言ってるんだ？　思考が駄々漏れだけど」

ぼくの言葉を聴いて、舞織ちゃんは一瞬停止し

「うわっと、いけません、いけません！　舞織ちゃんはシリアスに無縁な元女子高生という設定でしたあ！　わたしとしたことが、危うくキャラ変更してしまうところでしたよう！」

「メタ発言はキャラ以上に物語にも支障をきたすから要注意だよね……」

「？」

確信に触れたところで、舞織ちゃんは「ところで、ですね」と努めて明るい声で話す。

「『欠陥製品』のお兄さんは、どれくらいこちらの世界の教養がありますか？　あ、別に返答を強要してるわけじゃありませんよう…

…なんちゃって！」
「……」
この子との会話はなんだか物凄く疲れる。
ま。ここはスルーでいこう。
話が進まないしね。

「えーっと」
こちらの世界――――世界を構成する四つの内の一つ『暴力の世界』、だろうか。

「最近は、そっちの知り合いが多くてね。一般人よりは、ずっと精通してると思う」
「そうですか。わたしも実は、あまりよくは知らないんですけど、どうも最近変な噂を聞くんです。それはどうも零崎一賊が壊滅したことも絡んでいるみたいで」

変な噂ね。
ぼくは寡聞にして知らない。

「わたしも詳しくはわからないんですけど、わたしの知り合いのお爺さんが言うには、暴力の世界が覆るような『災厄』が起きるって」
「暴力の世界が？」
「えぇ。これはそのお爺さんからの受け織りなんですけど、何でもいいから、兎に角用心しとけって」

世界が――――覆る。世界を――――終わらすのとは、また違うのだろうか。
とはいえ、暴力の世界が覆ろうが、ぼく達の世界、つまり『表世

界』にも影響があるとは思えない。

「でも、その近々起こり得る騒動と、ぼくが関係があるのかい？これでも、ぼくはまだギリギリ堅気の属性に当てはまると思ってるんだけど」

「直接は関係ないかもしれません。だけど、人識くんが、零崎人識が、その騒動にすでに巻き込まれているかもしれないんです」

なるほど。

そうなったら、確かにぼくにも影響があるかもしれない。いや、十中八九、九分九厘、ぼくも巻き込まれるだろう。

それが、ぼくと零崎の、関係だ。

「わかった、くれぐれも用心しておくよ。心構えがあるのとないとじゃ、歴然とした差があるからね。忠告は受け取っておく。それで舞織ちゃんは、何か伝手があるのかい？」

「はい？」

「いやさ、もし零崎がその騒動に巻き込まれているなら、君にはもう調べようがないんじゃないかと思ってね」

あの人間失格が何を思って忽然と消失したのかは定かではないが、少なくとも零崎一賊の末裔である舞織さんだけで零崎を見つけるのは至難を極めるだろう。というか不可能だ。

「…はい、そうです。実を言うと、『欠陥製品』のお兄さんは切り札だったんですけど。そのお兄さんでも解らないとなると、わたしとしてはもう諦めるしかないんです」

「変に期待を持たせちゃってるみたいだけど、誤解しないでくれよ。ぼくはこれでも、一般人だ」

それも、そろそろ言い切るのには自信がなくなってきたけれど。

「だけど、うん、まぁ心ばかりの助力ならできる」

「それは！？」

「＊＊＊＊＊＊。ここに電話するといいよ。少なくとも、ぼくよりは役に立ってくれると思う」

「……この番号は？」

「それは掛けてからのお楽しみって事で。大丈夫、楽しみとは言っても、ぼくの知り合いさ」

「そうですか、なら安心ですよう」

……素直な子だな。

……。

「だけどね、舞織ちゃん、実はその電話番号の主は凄くサディストでね、もしかしたら可笑しな事を強要してくるかもしれない」

「え、サディストですか！？もしかして、わたし身包みとか剥がされちゃうんですか！？」

「いや、それどころじゃないよ。下手したら身包みところが、舞織ちゃんの性癖とか恥ずかしい経験とか包み隠さずばれちゃうかも」

「なんと！それは家畜のような人ですう……」

家畜？鬼畜の間違いだろう。どこにサディストな牛や豚がいるんだ。

「でも、安心していいよ。そのサディストさんはあることをちゃんとすれば協力してくれる」

「そ、それは一体……？」

「そのサディストさんは挨拶を重視してててね。これは対人関係でも重要なことだけど、そのサディストさんは特に重視している。しか

もそのサディストの挨拶は一味違ってね。サディストさんを駄洒落で笑わせる。これがサディストさん流挨拶なんだ」
「うわ、界王様みたいな人ですねえ」
「これでとちったらやばいよ。一生協力してくれない。だから、ここで幾らか練習していくといい」
「な、なるほど。でもわたしにそんなことができるでしょうか？」
「何を言ってるんだ、舞織ちゃん。君はお兄さん、零崎人識に会いたいんだろう？　ならこれぐらいの困難の一つや二つ踏破できなくてどうする？　君の兄に会いたい気持ちはその程度なのか」

珍しく熱血系の戯言遣いであった。

「そ、それもそうですう。わたしはどうしても人識くんに会わなくてはいけないんです」
「よし、その意気だよ。じゃ、早速いってみよう」
「わ、わかりました」

舞織ちゃんは考え込むように黙ってから、やがて息を整え

「伊織ちゃんが庵を囲むッ！」

微妙すぎる！

「鬼の居ぬ間に桃太郎ッ！」

タイミングが悪い！

「邂逅一番、開口二番ッ！」

確かにその通りだけれど、ちょっと意味が違う！

「不細工の破顔一笑ッ！」

崩壊寸前！

「久志くんに貸して６４取られるッ！」

原型がない！というか久志くんって誰だ！

「酸いも甘いも噛みまみたッ！」

違う作品出ちゃった……！

「えーっと、えーっと、ですね！それから、それから――――」

「ま、まぁこんなものだろうね……」

まだまだ続きそうなので、ぼくは思わず舞織ちゃんを制止する。

自分でふっておいてなんだが、この子、以外とできるのかもしれない。

ちょっと後悔。

「そうですか、残念です。なんだか楽しくなってきちゃったですよう」

どうやら舞織ちゃんはまだまだ言い足りないようだが、これ以上やられると何をしでかすのか判らないので、ここいらで終わりにしておこう。

うん、リセット、リセット。

「とりあえず、これがぼくの精一杯だ」ぼくは気を取り直して「後

は、その電話番号の主と頑張ってくれ」
「はいっ、がんばります！」
「それじゃ、武運と息災を」
「はいっ、ありがとうございました！」
元気一杯に、舞織さんは電話を切った。
「ふぅ……」
何だ、零崎のやつ。随分と羨ましい、妹がいるじゃないか。
あいつもあいつで、妹の世話を焼いていたみたいだし、こう言ったら零崎は否定するだろうけれど、目から鱗が落ちるような家族愛だ。
零崎舞織、零崎人識。
家族のような、関係か。

それにしても、家族ね。ぼくには、未だに両親共々ご健在だけれど、とても家族なんて言えたもんじゃない。妹は死んだし、家族なんて骨組みは粉々に崩壊して———そうじゃないな、きっとその骨組み自体が、スカスカなのだろう。骨粗鬆症のような関係なんだ。
しかし、ぼくがこの世にいる限り、その残りかすのような脆弱な関係は消えはしない。いつまでも、いつまでも、例えぼくが家族なんてものをすっかり忘れてしまっても、両親が他界したとしても、それは残り続ける。
それが、家族の、絆とでも言うのだろうか。
「これは、病的なまでに戯言だな」
ぼくは子機を元の位置に戻してから、崩子ちゃんがいる和室の襖

を開けようとした。
　ちょうどその瞬間、崩子ちゃんが偶々リモコンでチャンネルを操作して、古臭いブラウン管テレビに映った、綺麗なスーツを着込んだ白人――――ぼくの記憶が正しければ某国の大統領、その大統領の頭が、ぼくが襖を開けるのと同時に、破裂した。

3－1

0

さてさて、ご堪能あれ。くそ虫どもが。

1

その日一日のニュースというニュース番組はほぼその話題で持ちきりだった。どの局も気でも狂ったように、延々と同じ内容をリピートし、またチャンネルを変えれば政治ジャーナリストたる人物等が議論を交わしている。各局メディアはほぼテロによる犯行だと断定しているようで、中東アジアの過激派テロ組織が主犯ではないかと推測しているようだ。

大統領暗殺。

狙撃銃で脳天を一発。

ま、即死だろう。

影武者でもないらしいし。

生死は未だ伏せられているようだけれど、あれほど決定的な映像を世界レベルで放送してしまった以上、いつまでも隠し続けるのは不可能だ。少なくとも、嘘や出任せでその場を凌ぐ限界を遥かに越えている。

「しかし驚いたな。まさか、号外が貰えるとは」

みいこさんは今晩の夕食をつまみながら、まったく見当はずれの驚きを露わにした。

「そりゃ号外ぐらい出ますよ。一国の大統領が殺されたんですから」
「ふーん、そういうものなのか。前はくれなかったけどな」

みいこさんは特に気にも留めた様子もなく、箸を握る。
このみいこさんの発言でいう『前』というのは首相官邸襲撃事件のときのやつだ。事件当初は死傷者も出なかったためか、号外には至らなかったが、大統領暗殺の事件がさらに引き金となって、先日の首相官邸襲撃事件もまた騒がれている。一部メディアでは同一グループの犯行だとかどうとか。

「でも、まぁ今のご時世に狙撃で暗殺を企てるやつがいたなんて、確かに驚きですよ」
「みい姉さんもお兄ちゃんも驚くところはそこじゃない気がしますが」

それに不謹慎ですよと、崩子ちゃんが冷静にツッコんだ。確かに少し不謹慎かな。

「それでさ」ぼくは夕飯をつまみながら「犯人はどんな奴だろうね。日本でも起きてるテロ活動とも関係あるのかな」

「ん、いの字。ちょっと待て」
「はい？　何ですか、みいこさん？」
「テロ活動って、この間、お前が教えてくれた、就職活動に嫌気がさした社会人の一歩手前が企業相手に報復活動をするっていうやつか？　それって日本でも起きているのか？」
「え？　ぼく、そんなこと言いましたっけ？」
「……」

無言のうち、チョップを喰らう。
痛てえ。
「ま、まぁ似たようなものですよ」
本当は全然違うけど。
「……最低です、戯言遣いのお兄ちゃん」
蔑むような目つきで崩子ちゃんがぼくを見る。
う、そんな表情するなんて、崩子ちゃんもだいぶ表情が豊かになってきたじゃないか。
「か、軽い冗談はここまでにして」
崩子ちゃんに軽く引かれちゃったところで。
ぼくは話を戻す。
「このご時世に暗殺なんて流行らないと思うんだけどさ」セキュリティの面においても国際社会を背景にしても一国の大統領を殺すのが容易とは思えない。「元暗殺専門の『殺し名』である『闇口衆』の視点から見れば、首相や大統領を暗殺するのって、割と簡単なの？」
魑魅魍魎の殺戮集団、『殺し名』。
いくら安全面を考慮したところで、彼らに目をつけられたしまったら、それこそお終いだろう。
デットエンドだ。
「まさか、簡単なわけがないです」

しかし、ぼくの目論見を踏み越えて、崩子ちゃんは素っ気無く答えた。

「え、そうなの？　日本の首相なんて、まるで無防備の丸腰でインタビューとか受けてるけど」

ぼくだったら防弾チョッキでガチガチに守りを固めてから、公の場に出るだろう。しかし、それ以前に、首相になるつもりなんてなかった。

「お兄ちゃん、考えてもみてください。何も、戦闘能力に長けた集団が全員「殺し名」ではないんですよ。当然、首相や大統領の側近にも彼らを護るべく、万夫不当の輩が大勢います」

「あ、それもそうか。でも特に今回の事件みたく暗殺という分野におけるエキスパート、『闇口』ならどうにかなるんじゃ？」

「いくら『殺し名』序列第二位の闇口といえど、大統領暗殺なんてのは万に一つも成功しないような、宝くじを買うようなものです」

宝くじね。

その比喩は先ほどのぼくの発言よりよっぽど不謹慎だと思うのは気のせいだろうか。

「もっと言えば、のび太くんにテストで満点を取らせるようなものです」

「それを言ってはのび太くんに大変失礼だと思うよ」

まさかの小学館。微妙なキャラ被りが生じた。

誰とまでは言わないけれど。

「でもそれってあくまで単体でって話だろ？　殺し名やましてや暗殺専門の『闇口衆』ともなれば、何人かで集まって集団戦法とかなんとかでいけば、いけそうな気がするけど」
「それなら……無理ではない、かもです。ただし――――」
崩子ちゃんは歯切れ悪く言う。
「――――、一個人だけでは不可能でしょう。せめて五人いれば」
「え、五人でいけるの？」
意外と少ない。
「えぇ、それでも闇口衆、最高峰の実力を持つ闇口濡衣や闇口白染、闇口空風、闇口執着、闇口月雲らが共闘しなくては難しいです。どれも一筋縄ではいかない人たちですが」
「ふむ」
「しかし、戯言遣いのお兄ちゃん、一つ勘違いしないで欲しいのですが、『闇口衆』は主の命令なしには暗殺（こうどう）できません。つまり、闇口衆の五人が手を組む前に各々の主が手を組む必要があります」
「ああ、そういえば、そんな設定だったね」
うっかり失念してた。
『闇口衆』
暗殺者集団というより、奴隷集団に近い「殺し名」。
主の命にのみ従い、主のために人を殺す。
「主様ね……」
だとしたら、それは結構、いやかなり難しそうだな。

闇口の主となる人物が手を結ぶなんてことは、「殺し名」に疎いぼくでさえ想像もできない。

「なら匂宮や薄野はどうなの？　特に『殺し名』序列第一位の匂宮なら楽勝のような気がするけど」

「実力的には相応ですが、彼らは少し目立ちすぎます。やはり、『暗殺』という分野でこそ可能な犯行なわけです」

「目立ちすぎか、それもそうだね……」

出夢くんや理澄ちゃんがこっそり暗殺なんて、それこそのび太くんに五教科満点取らせるようなものだろう。

「まぁ犯人が誰であろうと」と咀嚼を終えたみいこさんが言った。

「国外の事件だし、私たちじゃどうしようにもできない」

「……」

そりゃそうだ。

ぼくたちがいくら推理を張り巡らせたところで、ある意味、手も足も出ない。

所詮、ぼくは戯言遣いだしね。

「だけど判ったこともある」

「？」

「そんなに強い奴らがいるなら……」

「いるなら？」

「私もより稽古に励まなくては。これじゃまた負けてしまう」

「……」

どうやらみいこさんはリベンジするつもりらしい。

というか『殺し名』と戦うつもりでもあるらしい。

「み、みいこさん。水を差すようですけど、みいこさんを毒を蝕ませた奇野さんはもう二度とぼくらの前には現れませんよ」

「そうなのか？」

「そうなんですよ」

「それは残念だ、ショッキングだ」

と、みいこさんが気落ちしたタイミングに丁度被さるように。

お味噌汁を啜っていた崩子ちゃんがビクッと肩を震わした。

そして。

ドンドン、と玄関ドアが乱暴にノックされた。この場合、乱暴というのは割と大袈裟な比喩で、この元診療所にインターフォンなる物がないため、自然と来訪者はノックを強いられるわけだ。

「ぼくが出てくるよ」

玄関に向かおうとした崩子ちゃんを制して、ぼくは席を立つ。夕食時のこの時分に来訪者とは、この元診療所としては比較的珍しい。というか未だ来訪者なんて皆無だった気がする。

ぼくはドアを開け、来訪者を一瞥する。

「晩餐中、御楽しみのところ申し訳ありません。木賀峰助教授の研究所で宜しいでしょうか？」

黒服の男が二人、さらにその巨躯な男の影に隠れるようにしてもう一人、こちらは女性であるけれど、見るからに只者ではない三人が、そこには立っていた。立っていた、と言っても女性に限っては車体（驚くべきことに６１２スカリエッティだ。これだけでも只者でないと判断できる）に凭れているが。

「すいませんが、どちら様ですか？」

ぼくは外に出て、戸を閉めてから尋ねた。

「申し遅れました。私達は初春研究所の遣いの者です。木賀峰助教授に用あって来たのですが」

そう言って黒服の男は懐から名刺を取り出し、それをぼくに渡す。

「――初春教授ですか」

名刺には住所や電話番号などの表記はなく、ただの黒文字で高都大学人間心理学科教授『初春憩（ういはるいこい）』とだけ書かれてある。名前からでは男性とも女性ともとれる名前だ。

「ええ、我が研究所の所長である初春が是非、木賀峰助教授の意見を賜りたい、と申しておりまして参上した次第であります」

「ああ、木賀峰助教授ですか」

言いつつ。

ぼくは目の前の三人を観察する。

この屈強な黒服二名は如何にもな雰囲気だけれども、どうも後ろに控える女性の空気は科学者のそれと近しい気がする。と言っても白衣を着ているわけでもないし、確証はない。

「木賀峰助教授は今は居ませんよ」

相手の出方を見るためにも曖昧な表現で濁す。

「居ない？　どちらかへお出かけの最中とか？」
「いえ、そういう意味ではなく、もうこの場所にはいない、という意味です」
「では、貴方は？　木賀峰研究所の研究生か何かですか？」
「いえ、木賀峰助教授とは全くの無関係のニートに一歩手前の半社会人です。木賀峰助教授はこの住居の前任としか知りません」
「そうでございましたか」

黒服はどうすべきか躊躇したのか後ろの女性に助け船を出すよう振り向く。

「失礼ですが」タイミングを見計らって、ぼくは切り出した。「初春教授と木賀峰助教授のご関係って？」

どう考えても、目の前の三人は日々試験管を摘んでいるような真っ当な研究員には思えない。そもそも、木賀峰助教授自身が真っ当な研究員ではなかったのだから、その初春教授とやらも常識的な科学者ではないのだろう。木賀峰助教授を訪ねてくる時点ですでに一線を画していると言っていい。

「木賀峰助教授は敬愛すべき初春教授の大切な友人の一人です」と、後ろに控えていた女性がおもむろに口を開いた。「学生時代からのご友人だとか。私たちはそう聞いています」

どこか含みのある言い方だけれど、疑ってばかりいても埒が明かない。

「学生時代の友人ですか」意味もなく反復してみた。

「えぇ、排他主義の初春教授の唯一と言ってもいいご友人だそうで。

本日も初春教授がお開きになる会合に出席してもらおうと参上したのです」

会合のお誘い、ね。排他主義の割には随分と友達想いな教授だ。

ぼくの知る科学者の教授なんてのは、この女性の述べた通り排他的で利己的で、現実主義者の名を欲しいままにするエゴイストばかりだと少なからずぼくは思っていたわけだから、初春教授と木賀峰助教授の間柄は正直な話、意外であった。ぼくの認識が低いと言われればそれまでだけれども、仲良しこよしで研究に没頭する科学者というのも奇妙だ。奇天烈極まりない。

「そうでしたか。しかしその初春教授には悪いですけど、今ここには木賀峰助教授はいません。お引取り願えますか？」

「そうですか。では、お引取りする前にいくつかお聞きしたいことがあるのですが」

「何でしょう？」

「あなたは先ほどご自分を半社会人と称しましたが、この家にはお一人で住んでらっしゃるのですか？」

お。おお。

ついにこういう質問がきたか。

この辺りにはあまり民家や住宅街がないものだから、あまり不審に思われていなかったが、こんな成人して間もない青年が元とはいえ、それなりの広さを誇るこの診療所に住んでいることは、傍から見ても結構怪しい。加えて、学校にも通っていない美少女と普段着が甚平という剣道家が同居とくれば、怪しいを通りこして奇怪である。摩訶不思議ともいえる。

「いえ、年の離れた姉と妹がいますけど」

一応、この手の質問は診療所を住処として決めた日から、予め覚悟していたので、すんなりと答えることができる。まぁ、この設定に不満がある人も、二人ほどいるけれど。というか、よくよく考えてみるとこの設定自体かなり苦しくないか？

「そうでしたか。ご姉弟で切り盛りしてらしたのですか、大変ですね」

ぼくの不安を奇麗さっぱり裏切る女性。

何の前振りだろう。

「世間は今、それなりに物騒ですから、どうかお気を付けください」

「え？　はい。ご忠告どうも」

確かに世間は大荒れだ。しかし、こんな辺鄙な場所まで被害が及ぶとは考えにくいが。

それに、すでにぼくはそれなりの物騒事ならぬ面倒事に巻き込まれている。

「質問は以上ですか？　もうないのなら、ぼくはここで失礼します。夕食の途中ですし」

「では最後に。木賀峰助教授の行く先などはご存知ないですか？」

「さぁ。ぼくには解りません。さっぱりです。科学者の考えなんて理解しかねます」

本音が端から滲み出た気もしないけれど、これ以上この女性との会話を続けていたら、”真実”　をうっかり話してしまいそうなので、皮肉も交えながらこの三人にはとっととお帰り願おう。

「そういうことですから、では失礼しま———」

「お待ち下さい」

ドアノブに手を伸ばそうとしたぼくに、黒服の女性は落ち着いた口調で言った。

「あなたに折り入ってお願いがあります――」

それはまさに、このタイミングを待っていたと言わんばかりの、とまでは流石に過言に値するかもしれないけれど、どこか謀ったような、これを言いたいがために来訪したとも思える口振りだった。

彼女はぼくを真っ直ぐ見つめながら

「――木賀峰助教授の代わりに、あなた方ご姉弟が初春教授とお会いになってくれませんか？」

と、冗談にしては真面目すぎる顔で言った。

ぼくの返事はどうであれ（当然ながらぼくは断ろうとした。腐っているわかっている卵を食べるほど、ぼくも愚かじゃない）、目の前の屈強そうな男二人を相手にどこまでも不遜な態度で頑なに拒否していたら何をされるかわかっものじゃないので、会合の日程を確認し、初春教授の誘いを、もとい遣いの者の誘いを受けることにした。

今、思えば。

軽率といえば軽率。

軽はずみな考えだったと思う。

木賀峰助教授の代わりなんて時点で相当怪しいし、さらにぼくだけでなく、ぼくの姉（仮）と妹（仮）までも誘致するとは、明らかに疑わしい。ただの茶話会でないのは明白だろう。

だがしかし、まぁ、なんというか。

このときのぼくは決して油断をしていたわけでも慢心だったわけでもない。

言うなれば、慣れ。慣れてしまっていたのだろう。

こういう展開に、こういう物語に。

油断大敵と先人は言うが、一番の強敵はやはり慣習化による感覚の鈍化だ。

鈍感も鈍感。馬鹿で馬鹿。

こればかりはぼくもお手上げだ。万歳だ。両手を挙げましょう。

まぁ、言い訳はここに置いておくとして、ぼくはこれから、あの要求を頑なに断って、大柄な黒服二名にリンチされていたほうが数百倍ましだったと思えるほど、末恐ろしい災難、いや『災厄』に直面しなくてはならない。

先ほど、慣れてしまったのだと言った手前だが、ここで早々に変更させてもらう。

これからの物語は、ぼくにとっては実に新鮮で真新しくて、そして。

最悪だった。

3－1（後書き）

今回はギャグもなく、とりあえずストーリーの進展にベクトルを変えました。
と言ってもあまり進んじゃいませんが。
それでは引き続き、誤字脱字があれば報告よろしくお願いします。

3－2（前書き）

だいぶ間が空きましたが、よろしくお願いします。

3―2

2

今更ながら、嘘という言葉についてぼくはこれほど無意味な言葉はないと思うことがある。いちいち説明するまでもないが、嘘なんていうのは日常に溢れかえるほど局在し、あちらこちらへと伝染するかのように現代社会に蔓延っていて、それを知りつつもぼくたち人間は賢いのか図太いのかうまく嘘とバランスを取り、嘘と名ばかりの共生という道を歩んでいるのが現状だ。

そもそも人間が真実のみを語るというのは到底不可能な話なわけで、例えば自分の身の上話をしようものなら、それが過去の話である以上、正確無比に伝達できるほど人間の脳みそは聡明ではなく、さらには人それぞれ物事に対する感情や感想は大いに異なるわけだから、一つの情報を完璧に他者に伝達することなんてできるはずがないのである。

だから嘘とは意識せずとも自然に出てきてしまうのが一般的で、勿論自尊心や見栄、保身などの観点からの嘘も当然現れるが、この日常においてはごく小数の割合であり、やはり大きく占めているのは、この身に覚えのない嘘というやつだろう。

つまりはぼく達の生活を取り巻く環境において、嘘とは特別な意味でも一般的な意味でも、かなりの多数で存在し、むしろ割合的には虚構と現実とのバランスが狂ってしまうほど傾いてしまっているのだ。

そのためいちいち嘘かどうかを見極める必要はないし、例えそれが嘘だと判明したところで、本人にその自覚がないのであれば言及するだけ無駄な話であり、無意味な行為である。

だから嘘は無意味。

しかし嘘を吐くことは無意味ではないのだけれど。

まぁその話は今度に取っておくとしても、大半の嘘がこのような有様なのだから、見破るのはおろか、嘘の根絶などできるはずがない。
仕方なく、人は共生という道を選ばざる得ないわけだ。
共生というより寄生。
だがその寄生も、やはり共存という一種の形なのだ。
しかし人は嘘を嫌い、憎み、廃絶させようとする。嘘を見抜くなんて能力は誰にでもあって誰にでもなく、嘘を廃絶させる方法なんて決して存在しないはずなのに。そんなくだらない理由と人間の真実を求めたがる性せいで、探偵や警察なんてのが存在し、裁判なんていうのがあるのだろう。
罪は罪で償えないはずなのに。
嘘は嘘でしかないのに。

「じゃあ戯言遣いのぼくは現実に生きる人間なのかな」

嘘をつくことは生きることだと、前に死吹が言っていた。
誰よりも死にたがっているあいつが、このぼくに生きることなんて諭していった。
生きること。
死ぬこと。
生き続けるかぎり、嘘を吐き続ける。
逆説も然り、嘘を吐き続ければ、それは生き続けると言うことか。
立てば嘘吐き、座れば詐欺師、歩く姿は詭道主義。
文字通り生き様か。

「いい加減、戯言も説教染みてきたな……」
ぼくは誰に言うでもなく、呟いた。
場所は変わって。

診療所を訪れた女性の名は暇六花（いとまむいか）と名乗った。そして今ぼくの目の前にいるのも、その彼女だ。
ぼくは再度繰り返された質問を六花さんに投げかける。
「それにしても六花さん、何でぼくなんかを招待したのですか？何度も言いますけど、ぼくは木賀峰助教授とは赤の他人の関係ですよ」
「初春は面白い人間が好きなのです。私が見たところ、あなたは初春の眼鏡に合う素質を十分以上に持っています」
返答にはなっていない気がするけど、もうすでにこうして会合に出席してしまった以上もう後には引けない。
それにしても面白い人間、ね。
随分直接的な言い方だな。ぼくにはあまりそういう自覚はないのだけれど。いや、そもそも面白い人間と言われてああ、そうだなと納得する人間もいないか。
「戯言遣いのお兄ちゃん、わたしはまだこの状況がイマイチ飲み込めないんですけど」
崩子ちゃんはぼくの服の裾をちょいちょい引っ張りながら言った。
「それはぼくも同じだよ。まぁでも美味しいお昼ご飯をご馳走してもらえると思ってていいんじゃないかな」
「……お兄ちゃん、子供扱いしないで下さい」
崩子ちゃんはムスッとした。ふむ、怒らせてしまったかな。
ぼくは六花さんを横目で見ながら、ふぅと息を吐く。
――――初春教授の会合とやらはまだ始まっていない。そもそも初春教授すら、このレストランには来ていないのだ。今、ここに集ま

っているのはぼくを入れて三人。つまりぼくと崩子ちゃんと六花さんである。
一応、六花さんはみいこさんを含めた設定上の三姉弟を招待してくれたのだが、みいこさんには新しいバイトの面接とかどうかで上手くはぐらかされてしまい、本日は欠席である。まぁあの人はこういう雰囲気を嫌っている衒いがあるから、仕方ないっちゃ仕方ない。
崩子ちゃんは、当初行きたくないと言い張ったが、流石にぼく一人で行くのは憚られるので無理やり連行してきた。それもあって今はご機嫌斜めのようだ。

「それにしても随分豪華なレストランですね。ぼくには勿体ないくらいです」

周りの装飾やら内装を見渡しながら、ぼくは言う。
会合の場所は京都駅付近の『ｇｒａｎｂｉａ』というホテルの最上階にあるレストランであった。
他の客は見当たらないので、それについて六花さんに聞いてみると

「今日は初春が貸し切っています。どうぞおくつろぎ下さい」

どうやら初春教授は余程の金持ちで、凄まじく気前がいいらしい。というかホテルのレストランを貸しきるって、ドバイだけの特権かと思っていた。

「ところで六花さん。今日の会合ってこの三人に初春教授を含めた四人で行われるんでしょうか？」
「はい、この四人が最低限となります」
「ん？　最低限とは？」
「言葉通りです。基本的には初春教授を加えた四人で進行するつもりですが、それともう一人、来るかもしれない人間がいますね」

「それって、また初春教授とお友達とかですか？」
「近いですが、厳密にいえばそうではありません。友達というよりは同志といった感じですかね」
「同志ですか。同じ研究者としての身内みたいなものでしょうか？あまり想像できませんけれど」
「えぇ、大体そのような感じです。ただ研究員ではありません。一介の陶芸家でして、名を聖塚一元と申します」
「聖塚さん、ですか」

聞いたことの無い名前である。少なくとも有名な陶芸家というわけでもなさそうだ。

「その筋でもあまり表に名前が出ない人でして、しかし彼の作品はどれも至高で素晴らしいものばかりです。それに初春教授の好みそうな性格の持ち主でしてね。初春教授との関係性だけとれば、木賀峰助教授よりも深いものでしょう」
「ふむ、なるほど。ご友人の幅が広くて羨ましい限りですね」

ぼくの言葉を六花さんはどう受け取ったのか、朗らかに微笑む。

「それともう一ついいですかね？」
「はい、何でしょう？」
「初春教授がどんな方かは知りませんけど、到底ぼく達と話が合うような人じゃないと思うんですが」

何せ、初春教授とは面識も無ければ、この間まで名前すら知らない真っ赤な他人だったのだ。しかも初春教授は研究者という役職。これはむしろぼくは苦手とするタイプかもしれない。
春日井さん然り心視先生しかり。
どうも、研究者というのは苦手だ。

「そう心配しなくて大丈夫ですよ。私が保障しましょう」
正直、六花さんに保障されてもどうしようもないが。
「では、こちらも一つ質問しても宜しいでしょうか？」
「え、ぁ、はい。何なりと」
六花さんは「では」と息を溜めて「木賀峰助教授のこと何ですが」と切り出した。
「木賀峰助教授は人柄はもちろん、その研究内容も非常に面白いものをやっていまして」
「はぁ」「以前は初春と共同研究で人体蘇生の研究をしていたんですが。まぁ今では恩師のためだとか言って、別の研究をしているようですけど」
木賀峰助教授の研究。
それは、すでに終わった研究だ。
「へぇ、それは知りませんでしたね。ぼくが通っている大学にも客員教授として授業をしに来ることがあるらしいんですが、会ったことはありませんね」
「とすると貴方は鹿鳴館大学に在籍しているんですか？」
「ええ。まぁ今となってはほとんど出席していませんけどね」
「それはいけません。学校は行くべきですよ。学校はとても楽しいところですから」
「そういうものですかね。ぼくはあまりそう思ったことはありませんけど」
「それは貴方がそう思うようにしていないからです。楽しい事でも

最初からつまらないと思えば、それはつまらないものになってしまうのです」
「逆手にとれば、つまらないものも楽しいと思えば楽しいってことになりますけど」
「いいえ、つまらないものはつまらないものですよ」
「……」

やばい。
この人、案外やりにくい人かもしれない。

「話を戻しますけどね、木賀峰助教授が人体蘇生の研究に初春とコンビを組んでいたのと同様に、今行っている研究にも木賀峰助教授は誰かしらとコンビを組んでいるそうなのです」
「ほう、コンビですか？　何だか漫才みたいですね」
「いえ、彼女は漫才師ではなく研究員ですが」

冗談を真面目に返された。
すげえ恥ずかしい。

「そのコンビを組んでいる子の名前がちっぱー、ではなく円朽葉というのですがご存知ですか？」
「円朽葉……」

無論、ご存知でないわけがない。
死なない少女。
木賀峰助教授による死なない研究の実験体。

「いえ、知りませんね。いえ嘘をついてるわけではありませんよ？
これでも街中ですれ違った人間の顔から電車の席で隣り合わせになった人の顔も完全に記憶し把握できるぼくが言うんですから間違

いありません」
「へぇ、貴方は記憶力がいいんですね」
真面目に驚かれた。
お目々をパチクリさせてる。
「し、しかし何故そんな事をぼくに話すんですか？　円朽葉なんて美少女、ぼくは知りませんけど」
「誰も美少女とは言ってませんよ」
げ。
墓穴を掘った。
「おやおやおやおやおやおやおや」
六花さんはジリジリとぼくに顔を近づける。
「おかしいですね。非常におかしいですね。貴方の口ぶりと記憶では円朽葉なんて知らないような感じでしたのに。確かに円朽葉は美少女ですが、なぜそれを知っているんですか？」
「それはですね……」
ぼくは数秒考えて
「ぼ、ぼくには名前を聞くだけでその人物を特定できるスタンドがいるんです」
「それは冗談ですね」
いや、そこは信じとけよ。
流れ的にさ。

「何故でしょう？　木賀峰助教授さえも知らない貴方が円朽葉を知っているとは奇妙ですね。奇天烈です」
「……」
ここで「円朽葉っていう同名の友達がいるんですよ、その子の事じゃないんですか？」って惚ければなんとかなるだろうか。
しかし六花さんの次の一言でぼくはさらに黙らざるえなくなる。
「実を言うとですね、初春の情報網によると、木賀峰助教授はすでに逝去なさったというのです。しかも殺害現場はあの元診療所で」
「……」
それを聞いて、顔を歪めたのはぼくではなく、ぼくの服の裾を弄くっていた崩子ちゃんだった。そんな崩子ちゃんを様子を目の端で捉えて
「そうなんですか？　ぼくが知る限り、そう言ったことは聞いていませんけど」
「嘘を言わないで下さい」
六花さんは急に口調を変えて言った。
「私達は私達なりに調査しその情報にたどり着き、その過程の中で、当然貴方の事も僅かですが知る機会がありました。そちらのお嬢さんもです」
六花さんは崩子ちゃんを見た。
「貴方達の詳しい素性までは解りかねますが、それでも木賀峰助教

授とあなたが何かしらのコンタクトを取っていたことは確かです」
「……えらくその情報網とやらを過信していますね」
「過信ではありません。これは根拠のある初春の推測です」

六花さんは強気だ。　ぼくも特に意味があって嘘をついているわけではないけれど、　しかし確かにあの一件は玖渚に任せたはずだ。全ての処理は玖渚機関によって遂行されたはずである。なのに、どうしてこう、その事実が外部に漏れているんだ？

「しかし六花さん。例えぼくに木賀峰助教授と何かの縁があったとしても、ぼくが木賀峰助教授の死に関わっているかどうかはわかりませんよ」
「いいえ、わかります」
「どうして？」
「私には目があった人物の過去を把握できるスタンドがいるんです」
「冗談ですよね？」
「いいえ、冗談ではありません」

六花さんはぼくを強く見る。

「いい加減、白状して下さい。貴方には嘘をつき続ける意味はないはずです。もし警察への通報を警戒しているならば、話した後に私を殺してもらっても構いません。その事実を教えてくれるのであれば私は何でもしましょう」

六花さんがぼくの両肩を掴む。

「お願いします。私の意思は初春の意思なのです。どうか初春のためにも真実を話して下さい！　話してくださるのならば、私を好きにしてくださって構いませんから……！」

「……六花さん、少し落ち着いて下さい」

何故、六花さんがここまで初春教授に加担しているのか解らないけれど、この様子じゃこのまま騙し通すのは難しい。嘘にも限界がある。

「話す条件があるのでしたら何でも呑みます。何でもです、何でも。お金でも名誉でも、勿論身体でも……！」

「わ、わかりましたから。本当に落ち着いて下さい、六花さんがそのような状態ではぼくも話し出せませんよ」ぼくは六花さんを落ち着かせ「ぼくの知っていることはお話ししますから、一旦落ち着きましょう」

ぼくの言葉を聞くと、六花さんは数回頷いて何度か深呼吸をした。それを見て崩子ちゃんがぼくの服の裾をキュッと掴む。

「いいんですか？　お兄ちゃん」

崩子ちゃんはぼくを案じるように話す。そういえば崩子ちゃんにもこの話はしたことがなかったかもしれない。

「うん、これ以上隠すのは無理だろうしね」

酷な話になるだろうが六花さんがここまで望んでいるならば仕方ない。しかし崩子ちゃんは別である。聞く義務はないし、むしろこの話は崩子ちゃんにはかなりきついはずだ。

「崩子ちゃん、聞きたくなかったら席をはずしてもいいよ」

「いえ、私もちゃんと戯言遣いのお兄ちゃんからその話を聞いたことはありませんでしたから。私もしっかり聞きます。姫ねえのことも……」

崩子ちゃんの言葉は語尾に近づくにつれトーンが下がる。

そう、木賀峰助教授の顛末を語るならばあの少女のことは欠かせない。いや、話す必要性もないかもしれないが、ここまで来てさらに隠し事をするのは流石にフェアじゃない。

それにここまであの事件のことが漏れているならば、逆にそれに関して聞き出す必要もあるだろう。

「いいですか、六花さん。今からぼくが話すことはまごうことなき事実です。隠す必要もないので白状してしまいますけど、出来れば他言無用でお願いしたいです」

隠すものでもないが、そうおおっぴろけにしてもいいというものじゃない。

ぼくは六花さんが少しは冷静を取り戻したのを確認してから、すでに一年前の出来事となるあの事件について話し始めた。

3―2（後書き）

さて、次話ですが二月中には投稿したいと思います。

3―3

3

ぼくの話を一通り聞き終えた六花さんは晴れ渡る笑顔、とまでには達しないが、先ほどと比較するとだいぶ得心がいった顔つきになった。無駄な要素は省き、事の顛末を全て話したわけではなかったけれど、これはこれで六花さんには満足して頂けたようだ。

「やはりそうでしたか。先程は見苦しい姿を見せてしまい申し訳ありませんでした」

木賀峰助教授の運命を知った六花さんは深々と頭を下げた。

「これで初春も納得が完遂すると思います」

「それならばぼくとして話した甲斐があるってものですが。でもいいんですか？　木賀峰助教授は初春教授の大切な友人なんでしょう？　世の中には知っておくべき事と知らないでおいた方がいい事の二種類がありますから。この場合は後者であるとぼくは思いますけど」

そりゃ真実を知る権利は確かに初春教授にはあるんだろうけれど。だけど権利はあくまで権利。義務ではない。

「いえ初春はどうしても、真実を知りたがっていたみたいですから」

六花さんは小さく笑った。それはとても魅力的な笑顔だけど、今回の笑みは、いつもと違ったように思える。

まるで、旧来の友人を懐かしむような、そんな――――。

「さて、話はここまでにしましょう。そろそろ一元さんも到着するでしょうし、料理の準備をしてもらいましょう」

六花さんはそう言って立ち上がり、このレストランの入り口で風神雷神よろしくと言わんばかりに突っ立っていた黒服二名の方へ向かっていった。

ぼくはそんな六花さんの笑顔を見送ってから

「崩子ちゃんは、大丈夫かい？」

振り返り、しゅんと俯いている崩子ちゃんに語りかけた。

「……ええ、大丈夫です」

崩子ちゃんは小さく言う。

「姫ねえのことは、お兄ちゃんに聞いていた通りでしたから。それに、憎むべき匂宮兄妹は、もういませんから、わたしには何もできません……」

憎むべきか。

その言葉に、本来の意味があるようには思えない。

でもと、崩子ちゃんは小さい拳を作りながら言う。

「やっぱり、悲しいです――――姫ねえも覚悟のうえだったとはいえ、こんな結末は受け入れられないですよ」

「……」

こんな結末。

時は最良の薬といわれるけど、心の傷はそう簡単にはいかない。
ただでさえ崩子ちゃんの心はいくつも”致命傷”を受けているのだ。
その小さな身体に。
その幼い精神に。
何度も何度も。
立ち直れないほどに、死んでしまうほどに。
それがこの程度の時間で克服できると考えるのは楽観的すぎる。
「それに、こういう風にも考えちゃうんです」
崩子ちゃんは俯きがちで言う。
「姫ねえは、あの骨董アパートに来てしあわせ、だったのかなって」
「崩子ちゃん、それは」
考えてはいけないことだ。
「わかってるんです、こんなことを考えちゃいけないって」崩子ちゃんは小さい唇を噛みながら「でも、姫ねえが骨董アパートに来なければ、こんな結末には」
「それを言っちゃ、ぼくにも責任があるんだよ」ぼくはなるべく無機質に言おうとする。「ぼくが姫ちゃんをあんなバイトに連れ出さなければよかったって、今でもそう思うさ。けど、そんなこと考えても本当の意味でどうしようもない。酷なようだけどいなくなった人間の事なんか考えちゃいけないのさ。それに重要なのはそのいなくなってしまった人から何を学んだか、なんだよ。何を学んで、何をこれから先に生かさなくちゃいけないのか。それは自分自身で決めていかなくちゃいけない。死んだ人を偲ぶのは大切なことだけど、

それ以上にこれからのことを思うのが肝要なんだよ」

「わたしは、戯言遣いのお兄ちゃんはみたく、簡単には割り切れないです……」

「割り切る必要はないよ。そんな必要はない。崩子ちゃんがぼくみたいにある必要なんて全然ない、絶無さ。けど、振り返るより前を見据えていたほうが、姫ちゃんも喜ぶと思うんだよ。これも死人に対してあまりにも楽観的で無頓着な考え方だけど、姫ちゃんならそういう風に思うと思うんだよね」

「……そうなんでしょうか？」

「うん。けど、姫ちゃんが幸せかどうかだったなんて、ぼくにもわからない。それは、きっと誰にもわからないことなんだよ、姫ちゃん以外はね。だから、ぼくたちは姫ちゃんが何を思ってくれていたかより、姫ちゃんがどう思うかを考えるべきなんだよ」

「どう思うか、ですか」

「そう、だから崩子ちゃんは姫ちゃんならどう思うかって、姫ちゃんならどうするかってのを考えたほうがいいと思うよ。それはきっと崩子ちゃんにとっても大切なことだからさ」

「……」

ぼくの言葉に崩子ちゃんは黙る。

少しして、崩子ちゃんはくいっと顔を上げた。

「わたしには少しむずかしいですけど、頑張ってみます」

「うん、崩子ちゃんはぼくよりもずっと大人だから、すぐわかるよ」

ぼくは何とか笑う。

そんな会話をしながら、ふと時計を見た。

時刻はすでに１２時過ぎ。

もうお昼時である。

丁度、小腹も空いてきた頃合いだ。
心なしか厨房のほうから、美味しそうな香りが漂ってくる。
「ふむ、どうやら崩子ちゃん、ようやく美味しい食事にありつけそうだよ」
「……わたしを腹ペコキャラにしないでください、お兄ちゃん」
崩子ちゃんは気を取り直したように、言う。
それからポケットから子供用携帯電話を取り出してピコピコと遊び始めた。
最近、買ってあげたやつである。
「うぅむ……」
崩子ちゃんに聞こえないように、ぼくは唸る。
崩子ちゃんもついに現代っ子デビューを果たしつつあるのかもしれない。
そういえば最近は洋服のバリエーションも増えてきたようなが気がするし、たまにぼくに隠れてティーン雑誌なんかを読んだりしている。
ここは、萌太くんの代わりにぼくが厳しく躾をしとくべきだろうか。
「それにしても……」
ぼくはあたりを見回す。
未だにこの名ばかりの会合のホストである初春教授は姿を現していない。それは聖塚一元さんも同様だが、客と主が同じ登場でどうする。

「確かにぼくとしちゃ初春教授が出張ろうがどうしようと、もうあまり関係ないだろうけど。それでもやっぱり六花さんをあれほど豹変させてしまう人というも気になるね」
「……そうですね」

崩子ちゃんは何か訝しんでいるように答えた。
ぼくは崩子ちゃんの言葉に疑問を覚えつつも

「とりあえずぼくはお手洗いに行ってくるよ。全員が揃うまでもう少しかかりそうだし」

そう言って、席を立つ。このレストランのトイレは確か店の外にあったはずだ。

「じゃあ崩子ちゃん、六花さんが戻ってきても失礼のないようにね」
「戯言遣いのお兄ちゃんに言われるまでもありません」

崩子ちゃんが携帯電話から顔を上げたのを見て、店を出てトイレを探す。店から出る際、屈強な黒服二名に鋭く睨まれた。昨日の晩に元診療所を訪ねてきた黒服二名とはまた違う黒服のようだが、ぼくの乏しい記憶力じゃ断定するのは難しい。まぁ狐さん風に言うなら『そんなことはどっちであっても変わらん』だ。

しかし初春教授か。
確か、人体蘇生の実験を木賀峰助教授とこなしていたんだっけ。
そんな非人道的な実験に精を出す人が、六花さんほどの人間を動かすなんて、とても考えにくい。偏見と言えば偏見だけど、六花さんがそこまでするほど初春教授とは魅力的で魅惑的な人なのだろうか。ぼくにしてみれば六花さんも十分魅力的だけれど。

トイレを出て、ふとレストランの入り口を見ると例の黒服はもう立ってはいなかった。
交代時間なのだろうか。それとも飽きて仕事を投げだしたのだろうか。後者はないとしても、そもそもあのような黒服はこの場に相応しくない。特に要人が食事を取っているわけではないし、護衛に付くとしたら初春教授の方だろう。

「それとも初春教授のお迎えにでも行ったのかな」

特に気にもせずに、数歩進む。さらに、数歩。レストラン入り口まで残り3メートルといったところで、ぼくは何かを感じた。そして、一歩。

「……っ」

それは、強烈な既視感だった。以前にも、どこかで感じたことのあるドロッとする、蛇にでも舐められるような不快感。
一歩。
ぼくは歩幅を変えず、レストランの入り口に立った。
無音。
ぼくは聴神経が狂ってしまったかのような錯覚を感じる。いや、もしかしたら狂っていたのは耳じゃなくて目かもしれない。さらに一歩進み、ぼくの鼻は強烈な強烈な、血の臭いを感じた。先ほどの香りが嘘のように、強烈で鮮烈な臭い。
やがて、聴覚、視覚、嗅覚、その全てが一度に全て同じ情報を脳内へと伝達する。
ぼくはゆっくり目線を下げ、そこで硬直した。床には上半身と下半身が別れ離れになっている、暇六花の死体が転がっていた。

３－４（前書き）

地震には負けません。
私の身内には、東北出身者がいないので、今のところ嫌な情報は入ってきていませんが、それでも予断を許さぬ状況です。
被災地のみなさんの安否だけが気掛かりです。

3―4

4

その光景を見てぼくが一番始めに浮かんだ感想は酷く酔狂なものだった。

『死神』

滑稽な話かもしれないが、胴を横に両断された六花さんの死体は、まさに死神の大鎌によって裂かれたような数奇な印象を与えた。筋肉や内蔵だけでなく、肋骨や脊髄までもが問答無用に切断されている。

床には、ただの血が溢れている。

血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血、血。

そして、その鮮血の中に六花さんがいる。

静かに、横たわっている。

微動だにせず、固まったかのように。

「そりゃ、そうだ」

だって、死んでいるのだから。動くわけがない。

人間を真っ二つにすれば、そりゃ死ぬよ。

死んで、死んで、終わっている。

終了し完了している。

動かないに、決まっている。

「…………」

それにしても。
美しい。綺麗な、死体だ。
不謹慎だけれど、ぼくはそう思った。思ってしまった。
あまりの切り口の鋭さに、不謹慎にも芸術性を見いだしてしまうほど、激烈で鮮烈な殺し方だった。
横断された死体は、黒く変色していて、まだ乾いていない鮮血が妙に浮いている。この黒と赤を基調としたバランスが、どうも絵画っぽいのだ。
六花さんの表情は、うつ伏せのせいで、よく見えない。
しかし、上下に分かれた六花さんは、外傷はあまりないように思える。

「はは……」

外傷？　外傷がないなら、まだ助かるか。まだ命に余裕はあるのか。大丈夫ですか、六花さん。今、救急車を呼びます。
返事をしてください、呼吸してください、心臓を動かしてください、ぼくを見てください。

「ぅ……」

一瞬、呼吸ができなくなる。
意識が混濁する。
意志が汚濁する。
思考が空回りする。
意向が無駄に駆け回る。
六花さんは死んでいる。死んでいるんだ。

「落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け、

落ち着け、落ち着け――――」

これは、殺人。

殺人、で間違いない。いや、それよりも。

「ほ、ほうこちゃん……？」

崩子ちゃんがどこにもいない。ぼくは無意識に辺りを見渡す。しかし、あの無垢な少女はどこにも見当たらない。

頭が、痛い。

思考がぼやける。

視界が揺らめく。

「ほ、崩子ちゃん……？」

確かに、ここに行儀よく椅子に座っていたはずなのに。

ピコピコと携帯電話で遊んでいたはずなのに。

それなのに。

崩子ちゃんは、神隠しのように消え去ってしまった。

「あれ、あれ、あれ？」

何だ、この展開は。

何だ、この物語は。

ぼくは、この物語を。このストーリーを。

どこかで見た記憶がある。

「――――っ」

嫌な汗が流れる。

嫌な予感が走る。
記憶が。
ぼくの、乏しい僅少の記憶が。
ガンガンと訴えかける。ドンドンと告げる。
これって、パロディーか。これって、サイドストーリーか。
いいや、違う。これは、これは本編だ。
現実で真実だ。
虚構でもフィクションでもない。
現実で真実だ。
そして、あの夏の日の出来事も確かに、事実、史実だ。
夏の日。
木賀峰助教授のバイト。巫女子ちゃんに紹介された木賀峰助教授。
ぼくにヴェスパをくれた巫女子ちゃん。
ああ、巫女子ちゃん、いいね。会いたい。今すぐにでも会ってハグしてやりたい。頬を擦り合わせちゃったりして、楽しくもない話に花を咲かせたい。ああ、会いたい。会いたいな。誰でもいいから。

「うぅ……」

過去の回想とともに。
連鎖するように一年前の、最悪な結末を思い出してしまう。
嫌でも思い出される。
拒否も阻止もできない。
鮮明に、浮かび上がる。
こういう時に限って、ぼくの記憶は最高峰の力を発揮する。
今と同じ、血に沈む風景。
死滅った空気と死消った空気。
内臓を食い荒らされた、死なない少女。

首と肩を無残に破壊された木賀峰助教授。

ぼんやり濁った瞳がぼくを見ていた。いや、そんなわけはない。あれは確実に死んでいたのから、ぼくを見たくて見たわけではない。

さらに二度殺された理澄ちゃん。

首を斬られて、心臓をもがれた匂宮兄妹の片割れ。

そして。

血の海で横たわる、蒼によく似たあの少女。

思いだされる。

両腕を切られ、それでも『人喰い』に挑んだ少女を。

記憶が、蘇る。

糸と意図に雁字搦めで縛られた少女を。

脳内で、あの時の感情が、気分が、光景が、全て、全て、甦る。甦ってくる。帰ってくる。還ってくる。記憶が、何もかも。

『師匠！』

ぼくを。

ぼくを師匠と呼んだ――――姫ちゃんが。

「何考えてるんだ、ぼくは……」

確かに、さっき姫ちゃんの話をしたけれど、そんな伏線のために

ぼくは言ったわけじゃない。
ぼくは汗で湿る手で拳を作りながら、あたりを見渡す。
遠くのヘリの音だけが聞こえる。
「そんな事が起こってたまるかよ……」
狂った思考が生みだすのは、唯一つの回答。
破綻しきった、腐った解答。
去年の再来、再現。
中庭で、血に沈む姫ちゃん――――。
それと重なるように、考えうる最悪の結末――――。
血の海に浮かぶ、ほう――――。
「くそっ！　冷静になれっ。何を考えてんだ、ぼくは！」
意味のない悲壮に浸る暇があったら、崩子ちゃんを探せ。
探すんだ。隈なくだ。
勝手に、くだらない妄想に浸ってるんじゃないぞ。
ぼくは。
ぼくは、もう。
ぼくは、もう、そんなものは見たくないんだ――――！
何も、失いたくない。
「くそったれ！」
落ち着いて考えろ。
平常心は大切だ。
平穏も大切だ。
平和は嫌いだけど。
脳を冷やせ。頭を冷やせ。

ぼくがトイレに立つまでは崩子ちゃんは確かにここに座っていた。
それは間違いない。
だったら、ぼくが席を外している時に？
でも一体誰が？
一体何のために？
というか、何故六花さんが死んでいる？　殺されたのか？　誰に？　何のために？

一体何が何のために何がどうして誰が何が何で六花さんが何が何で何が何故何で何が何のために何がどうして誰が何が何で六花さんが何が何で何が何故何で。

……ダメだ！
状況をもっと整理しろ。現実を見ろ。目を逸らすな。考えろ、考えるんだ……。

「随分慌ててるみたいだなぁ、お兄さんよぉ」
「――――っ！」

急な問いかけに驚き、慌てて振り返った。

「ニヒルでドライがお兄さんの売りじゃねぇのかぁ？」
「……誰だよ、お前」

高校生ぐらいの、学生と思しき人間がぼくの後ろで不気味に笑っていた。

「ああ、俺？　俺の名前かぁ？」

ぼくの気持ちとは裏腹に、目の前の男はくつくつと焦らすように

笑う。

「さぁ一体どんな名前でしょうか？」

男は、笑顔でぶりっ子よろしくと言わんばかりに首を傾ける。

なんだこいつ。

ふざけているのか。

「生憎、ぼくは今とっても忙しいんだ。阿呆に付き合っている暇はない」

「あ、ひでー。初対面の奴をアホ呼ばわりとか、最低だね。ふふん、まぁいいや。そんじゃ、ご希望にお応えして、いっちょ格好良く自己紹介といきましょうか」

男は懐から果物を切るようなナイフを取り出して

「吾輩、名を唯崎唯識。人呼んで、愛すべき馬鹿、親愛なる頓馬、友愛なる愚鈍。そしてそしてそして――――」

男はくだらなそうに、目を細めて。

「哀と非望だけが友達の、汚ーい、醜ーい、殺人鬼でぇえええす」

5

零崎はぼくの鏡のような存在だと以前話したけれど、だからとい

ってぼくがあの殺人鬼と仲良し子よしな関係であるはずはなく、むしろそこらにいる人々と何ら変わりのないありふれた関係である。
ただ関係はなくとも因果がある。
だからぼくと零崎は、本来実現しえない邂逅を果たしたのだ。
誰かが望んだわけでも、計ったわけでもなく。
偶々京都ですれ違っただけで、偶々零崎がぼくに似ていただけ。
ただそれだけの理由でぼくらは出会った。
偶然に偶然が掛け合わさり、今まで平行線を辿っていた関係は、結果としてぼくと零崎を混じり合わせてしまった。
いや、ただの平行線ならば如何なる場合においても一生交わることはない。ならばぼくと零崎、そのどちらかが何かによって今までの航路から逸らされ、曲げられ、捻られ、そして引き合わされた。
だからこの出逢いには何かの、誰かの介入があったのだと思う。
名も知らない誰かが、拾った落し物を交番に届けるような、ただ漠然とした気軽さを持って、何の計らいもなく、何の企てもなく、ぼくと唯崎を引き合わせたのだと思う。
そこに意識、無意識は関係ない。
出合って、出会ってしまったのだ。
線と線が。
人と人が。
零崎がぼくと人類最悪を結びつけたように、ぼくが真心と哀川さんをまじわらせたように。
出逢いとはそういうものなのだ。
これが例え戯言であろうとも、ぼくはそう信じたい。
何故なら、目の前の男――――唯崎唯識との出逢いは、偶然の二文字で片づけるには後百文字ぐらい足りないぐらい、ぼくにとって最悪だったから。

「殺人鬼だって……？」
「うん、そうだよぉ。人を殺す鬼と書いて、殺人鬼ぃ」

「それじゃ人殺鬼だよ」

思わずツッコミを入れてしまったけれど、それどころではない。

こいつが、本当に殺人鬼であるならば、この六花さんの死体も納得がいく。

「ん、どうやらお兄さん。勘違いしてるみたいだから、言っとくけどぉ」

唯崎は真っ二つになった六花さんを指で差しながら言った。

「それは俺じゃないぜぇ。俺は、そんな無残な殺し方はしないもん」

「……そうかい、ってそう簡単に信じられるほど、余裕のある状態じゃないんだよね、今のぼくはさ」

確かに、これほどの壮絶な殺し方の割に目の前の男――――唯崎の服装は血の一滴もついていない綺麗なものだ。これほどの殺人を、返り血を全く浴びないでやってのけるのは、相当に難しいはず。時間からして服を着替える余裕もないだろうし。

しかし。

だからと言って、はいそうですねとはぼくは言えない。

「信じてくれないのかい？　酷いなぁ。俺さ、人間の良好な関係って信頼から生まれると思ってるんだけどぉ。これじゃ、お兄さんとは良好な仲は築けないじゃん」

「君と良好で友好な関係なんて築いてどうするんだよ。それより、殺人鬼の君がどうしてこんなところにいるか教えてくれないか？」

「えー、どうしようかなぁ。俺っち迷っちゃう」

唯崎はぼくの返事を聞いて笑うのみだ。

何なんだ、こいつは。言動から体現まで理解不能だぞ。
しかしいつまでもこいつに付き合い続ける得策ではない。ここで登場したのだから、こいつにも何らかの目的があるはずだ。その目的が崩子ちゃんと――本人は否定しているが――六花さんの殺人であるならば、こいつを逃がすわけにはいかない。

「えーっと、唯崎唯識だっけ。わざわざ登場してくれたんだから、ここに何の用があるじゃないのかい？　こっちは生憎時間がなくてね、君とくだらない不毛なお喋りするくらいなら零崎とカラオケに行ってた方が時間の有意義な使い方だよ」
「……はぁん、零崎ねぇ」

唯崎は、ニヤニヤしながら答える。
どうも薄気味悪い笑みだ。
人を不快にさせる。

「いや、お兄さん。別に用ってほどのもんじゃないんだよぉ。何だか、滅茶苦茶慌ててるみたいだから、挨拶してみただけぇ。それと探し物があるなら、まずは落ち着けって言おうと思ってさぁ」
「君が崩子ちゃんに何かしたっていうんなら、すぐこの事件は解決するんだけどね」
「はぁ？　ほうこちゃんだぁ？　誰だよ、そりゃ。新しいジブリのヒロインの名前かぁ？　何だかよくわかんねぇが、俺は知らねぇぞぉ。つうかどんな漢字書くんだ、その名前はぁ？」
「……君が何処の誰なのか知らないけど、ぼく相手に嘘をつくのはやめといた方がいい。痛い目を見るよ」
「うひゃ、こえー。けど残念。本当に知らねーよぉ。俺はここに仕事をしに来ただけなんだ」
「仕事？」
「そうさ、まぁ誰かに先を越されたみたいだけどよぉ」

唯崎は床一面にぶちまけられている血を避けるように歩き、そしてその中心にある六花さんの上半身を足で軽く小突くと

「ありゃりゃ、ひでーな。こりゃまじで死んでる」

まじでなくとも、一目見れば明らかだろう。冗談のつもりか。これが生きているわけないだろう。これを生きてる可能性があるなんて戯言をぬかす奴がいたら、お笑いものだ。腹を抱えて笑ってやる。

「いやそれよりも、もしかして、君の仕事って――――」

「おぉう、そうだよ、鋭いねぇ。ご明察だよ、お兄さん」

ぼくの言葉を察して、唯崎は本気で驚いたように両手を叩いて感心する。

皮肉に聞こえなくもないが、唯崎は名残惜しそうに腕を組みながら言う。

「俺の仕事は、今ここで寝ころんでいる奴を殺すことだったんだがぁ。悔しいが、先を越されたみたいだわぁ。あーあ、悔しいけど、んは、感じちゃうねぇ。ははっ」

言いながら、唯崎は持っていたナイフを六花さんの頭に突き刺した。血は出ない。豆腐を刺すように、ナイフはするりと頭に突き刺さる。

「まぁ、とりあえず仕事は完了、完了ぉ。終わっちまったもんはしょうがない。ポジティブに考えようぜ、ポジティブにっと。あーあーあー、誰だか知らねぇけど、余計な手間を省いてくれて、まじで助かったぜぇ。感謝感激雨あられってかぁ」

唯崎はナイフを回収せず、その場で思いっきり伸びをした。
「で、お兄さん、俺今仕事終わったんだけど、この後暇？　暇なら俺と遊ぼうぜ」
「馬鹿言わないでくれ」
ぼくは怒りのこもった声で言う。
「六花さんを殺すことが仕事だって？　それはどういうことだよ。理由によっちゃ、六花さんのファン会員第一号のぼくが黙っちゃいないぜ」
「んー、それの名前ってむいかって言うのか？」
ぼくの口調にも言葉にも唯崎は意にも介さない。
それに、”それの名前”か。
本当にどうでもよさそうに、唯崎は言葉を連ねる。
「うぅん？　残念だけどさ、仕事のことは何も教えらんねぇよぉ。そこは守秘義務ってやつ？　俺はぁ秘密主義者なのよぉ」
「守秘義務？　おいおい、笑わせないでくれよ。こうして仕事の現場を見られている以上秘密もクソもあったもんじゃないだろ」
「ん、そりゃ確かにその通りだぁ」唯崎は目を丸め「参ったなぁ。秘密バレちったぜぇ。うぅむ、ここは冷静にお兄さんを殺しておくかなぁ」
と、物騒なことを言い始めた。
「えーっとね」

ぼくは少し冷えた頭のこめかみを摩る。どうも、こいつと長く会話するのはぼくにとってかなり負担になるようだ。

「唯崎くん、ぼくを殺すのは構わないけど、その前に一つだけ答えろ。崩子ちゃんはどこだ」

「だから知らねぇよ、ほうこちゃんなんてぇ。でも俺がここに来る途中それらしき奴を見かけたなぁ」

「……っ！」

「眼鏡を掛けた華奢な男でさ、ブルーのコート着てなぁ。確かそいつさ、脇に子供抱えててよ、親父が子供抱えて家を飛び出したんだと思ったねぇ」

んなわけねぇよなぁ、ここレストランだしと唯崎は笑う。

「おっと、追っかけようとしても無駄だぜぇ」

「……何でだ？」

「だって、あの男たぶん《咎凪》だもん。もう地球の裏側まで逃げちゃってるよぉ」

《咎凪》――――『呪い名』か！

確か『呪い名』序列第七位、咎凪党。石凪と対をなす殺人集団。しかし、なぜ『呪い名』の《咎凪》が崩子ちゃんを。

「考えるだけ無駄だよぉ。『呪い名』の連中が考えていることなんてわかりっこない」

「随分と『呪い名』に詳しいんだね……」

『殺し名』も『呪い名』も存在自体すら極秘の殺戮集団じゃないのか。なのになんでこいつはあたかも自分がそうであるかのように

話すんだ。
第一、こいつのこの雰囲気は、どこかで。
唯崎唯識――――唯崎、唯識。
唯崎、唯崎、唯崎、唯崎、唯崎、唯崎、唯崎、唯崎、唯崎。
唯、唯、唯、唯、唯、唯、唯、唯、唯、唯、唯一、唯一、唯一、唯一。
唯一つ、唯一つ、唯一つ、唯一つ、唯一つ。一つ、一つ、一つ、一つ。
一、一、一、一、一、一、一、一、零、零、零、零、零崎。
「――――っ！」
「あはは、お兄さんはなかなか頭がいいんだねぇ。そうです、俺が零崎と対をなす『呪い名』、《唯崎王室》の末裔、唯崎唯識でございますぅ」

3―5

6

「零崎と対をなす、『呪い名』……？」
「そう。あの血で繋がった家賊を唯一相手取る『呪い名』。唯一無一の殺戮集団、《唯崎王室》でぇす。よろしくぅ」
きゃぴきゃぴ跳ねる唯崎、その光景をぼくは何とか飲み込む。
「……ぼくはそんなに詳しい方じゃないけど、確か《零崎》と対をなす『呪い名』は存在しないんじゃなかったっけ？」

《匂宮》と《時宮》
《闇口》と《罪口》
《薄野》と《奇野》
《墓森》と《拭森》
《天吹》と《死吹》
《石凪》と《咎凪》
そして《零崎》

それぞれが対極の対極の対極にあたるという『殺し名』七つと『呪い名』六つ。
確かに、《零崎》の対となるグループだけが存在しないのは、極めて不自然で奇天烈ある。
零崎とはそういう話はあまりしなかったし、何しろ、零崎自身もその理由を知っている体（てい）ではなかった。
『殺し名』の一員である零崎にも解らないことが、ぼくに解るわけもない。

ぼくの問いかけに、跳ね回っていた唯崎は、ニコリと特上の笑顔を作り答える。

「うん☆」

☆じゃねぇだろ。

玖渚並みに電波である。

いや、本当に殺人鬼ならある意味玖渚以上に、質が悪い。

「そこら辺の説明はめんどいから省略ねぇ。ってか、零崎一賊自体無くなっちゃったらしいから、俺はもう対をなすとかカッケェ事は言ってらんないんだよねぇ」

「……そうだね」

とりあえず頷く。姿格好も言動も奇天烈なやつだけれど、その言葉にはよくわからない説得力がある。しかし今の唯崎の発言は間違いだ。まだこの世界にはぼくが知る限り、二人の《零崎》が残っている。

舞織ちゃんと――――零崎人識が。

「ん、お兄さん。何か知っているみたいだね」

「……」

「んは、俺に隠し事はなしだぜぇ。俺っち、何でもわかっちゃうから」

「……へぇ。そりゃ便利な能力だね。嘘発見機の人間版ってところかい？」

「ん、まぁそんなとこぉ。けど、これは技術というより勘に近いだけどねぇ。ん、もしかしてお兄さん、いちいち『ダウト、ダウト！』って連呼して欲しかったりするぅ？」

「……中学一年生は興味の対象外だよ」

「ん、それは『ダウト』じゃないねぇ。んはは、年上が好みかぁ、イイ趣味してんなぁ」
「そいつは、どうも」

唯崎は笑う。
ぼくは黙る。

「んー、お兄さん、実を言うとさぁ」

唯崎は先輩に悩みを打ち明ける後輩の様に改まる。
まったく不格好極まりない。
それでも、ぼくは何も答えず、唯崎の言葉を待つ。

「俺達こと、《唯崎王室》は《零崎一賊》を潰すことがだけが生き甲斐なのよぉ。零崎を見つけたら、それこそ老若男女、種族、生物、全て問わずに殺すのがモットー。魂って言ってもいいね。それが、何だよ、おい」

唯崎は額に手をあて大袈裟に振舞う。

「せっかく、《唯崎王室》が”復活”したってんのに、相手がいなきゃつまんねぇんだぁ！　潰されたとか滅ぼされたとか、あの《零崎》が簡単に壊滅するわきゃねぇだろ。なぁ、お兄さんもそう思うだろぉ？」

そう言いつつ、唯崎は半歩、ぼくに近づく。

「だいたいさぁ、復活してみれば『裏切り同盟』もなくなっちまってるし、この世界はどうなってんだよぉ」

もしかして、パラレルワールドですか。
意味不明の言葉を、唯崎は並べる。

「だから、その知ってることを教えてくれよぉ。俺はぁ《零崎》を探してんだよ。お兄さんだって、唯一の生き甲斐を失ったら悲しいだろう、つまらないだろう、うんざりするだろう？　他人の気持ちになって考えてみろよ」

唯崎は憂鬱げにしながら、ポケットに手を突っ込む。
それを見て、ぼくは半歩後ずさる。

「自分の気持ちが解らないのに、他人の気持ちが解るわけないじゃないか」

戯言――――なんかかまして場合ではないけど。
冷や汗が流れる。
これは、先ほどとは異なる危険な予感。
本能的な危険察知能力。
んは、と唯崎は笑って。

「まぁそんなことは建前、建前ぇ。お兄さんはどうやら、『殺し名』も『呪い名』も知ってるみたいだしさ。ここは一つどうだぁ、俺に教えてくれねぇかな？　《零崎》についてさぁ」

言いながら、唯崎はポケットから針のようなものを取り出した。
ただ、それが普通の針でないのは一目瞭然である。
まずサイズがふたまわりほど大きい。
とてもお裁縫に使える代物ではなさそうだ。
これが、唯崎の得物だろうか。

「ぁ、そうだぁ！　ここでお兄さんが《零崎》について教えてくれたら、お兄さんを殺すのは止しといてあげる。んは、我ながらナイスな判断じゃね？」
「勝手に話を進めないでくれるかな……」

そもそも、ぼくが殺される理由はないだろう、と殺人鬼の前で言うのは流石に皮肉にしかならない。
ぼくは、言葉を呑みこみながら、沸騰寸前だった頭を冷やしながら考える。
確かに唯崎の提案は、ぼくにとっては優良だ。
ぼくにはデメリットはないし、痛い目を見るのは零崎だし。

「懐かしいな。出夢くんにも同じような事を言われたよ」

あの時は零崎ではなく、哀川さんだったけれど。
それと、あれはぼくの意思でやったことだ。
ぼくが望んでやったことである。
この場合とはまた違う。

「出夢くん？　また知らねー名前だしちゃってさぁ。もしかしてお兄さん、自分の友達を自慢するのが趣味なのかい？」
「……案外そうかもしれないね。友達なんていないはずなんだけど。さて、それよりもさっきの提案だけどさ」

乗るか、乗らないか。二者択一。

「生憎、零崎の居場所なんて知らん。あの放浪癖が何処にいるかだなんて、琵琶湖でネッシーを探すよりも途方に暮れちゃうさ。それより、ぼくは崩子ちゃんを探さなきゃいけないんだよ」

あいつを庇うのも癪だけど、澪標姉妹の一件では命を救ってもらってるし。
ここは、一つ貸しといてやるよ、零崎。
ちゃんと後で、返してくれよ。
まぁ、その時まで、ぼくが生きていられるかどうかだけど。
返す相手がいなきゃ、返せるものも返せないだろう。

「……そうかい」

唯崎は自分の提案を蹴られたというのに意外と平気な顔をしていた。
ぼくは、ちらりと横たわる六花さんを見る。

「なら仕方ないね、お兄さん。まぁ《零崎》の行方なら俺にも少なからず知る術はあるんだわぁ。禁断の一族に手を借りるのは癪だが」

言い終わって、唯崎はポケットから取り出した針を逆手に持ち変えると

「じゃあ、お兄さん。昇天の時間だぜぇ。座布団をくれてやるから、とっとと死んじまいなぁ」

大して上手くもないことを言って。
唯崎は”駆けた”。

「――――っ！」

何とか目で捉えることはできた。
ぼくと唯崎の間は3，4メートル。
その距離を唯崎は、”一歩”で”一瞬”で零に引き戻す。

ぼくは辛うじて、弾丸のように突っ込んでくる唯崎をかわした。
しかし、唯崎はぼくとすれ違う瞬間に、片足でぼくの足を払う。痛みを感じる暇すらなく、下半身の安定に欠いたぼくはそこで片膝を付いてしまった。誰がどう見ても決定的な隙といえる体勢。唯崎は突進のスピードそのままに切り返すと、再びぼく目掛けて猪のように向かってくる。

「ノロマな亀みたいだなぁ、お兄さんよぉ！」
「――――っ！」

体勢を捻り、何とか唯崎の突進コースから外れようと、ぼくは身を逸らす。
肩にかする様にかわして、ぼくは唯崎を視界にとらえる。

「ちっ」

唯崎は二度の突進を避けられ、一度、停止する。
当然、息も切れていなければ、苛立ちや焦燥も感じ取れない。
ぼくは、二本の足で立ち上がり、唯崎を見定める。

「殺人鬼のわりには、動きが随分単調じゃない？」
「ははっ、言うねぇ、お兄さん。でも俺ぁ驚きだよ。どうやら、お兄さんはこういう戦闘は初心者じゃないみたいだね」

今度の唯崎は、逆手の針を斬りつけるように振り回す。

「ほらほら、避けないと、死んじゃうよぉ」
「――――！」

後ろに下がる形で、唯崎の攻撃を捌いていく。

流石に『呪い名』だけあって、攻撃は速い――――しかし。

「……っ！」

針は所詮針だ。

リーチはたかが知れてるし、そもそも針はナイフと違い、刺すものだ。

斬りつけるには圧倒的に向いていない。

故に――――かわせる！

「これでも、一般人よりは修羅場をくぐってきたからね！　《零崎》や《匂宮》の最大最悪の失敗作ってやつとも、何とか渡り合ってきたんだからさっ」

「経験豊富で、羨ましいねぇ。んじゃ、これはどうだぁ！」

二本目の針を取り出す唯崎。

両手に針を逆手に構える。

「――――っと」

ギリギリでかわす。

否、ギリギリでかわせる。

このぼくでも辛うじて、かわせる。

というか。

唯崎のこの針捌きは、まるで素人だ。

乱雑で粗暴で、これじゃ子供のちゃんばらに近い。

「『呪い名』ね……」

「ん、お兄さん、言いたいことがあるなら、言った方がいいぜぇぇ！」

「別にっ！　何でもないさ」

唯崎の語気に僅かながら怒気が混じってきた。

ぼくは考える。

避けながら、思慮する。

『呪い名』――――ぼくが相対したことがある『呪い名』は《時宮》と《奇野》の二つ。

どちらも身の毛も弥立つ能力を有していた。

《操想術師》と《病毒遣い》

泣く子も黙る鬼哭啾啾（きこくしゅうしゅう）の連中だったけれど。

どちらも決定的な弱点があった。

決定的で絶対的な――――弱点。

「んはっ！」

唯崎は無我夢中で針をふるう。

これじゃ、構える針が一本だろうと、二本だろうと変わりはない。

速いけれど、ただ振り回してるだけだ。

「避けるのが上手じゃんっ。けど、これがいつまで続くかなぁ？」

唯崎は、それこそ言葉は平常だけれど、唯崎の攻撃をぼくはかわし続ける。

「よっと――――」

両手の動きをよく見れば、十分凌げる。

リーチが短いのだから、後は針を投げてくるのを警戒していれば、絶命は免れそうだ。

「おらっ！」

初手の足払いがまぐれのように、唯崎はぶんぶんと針を振り回す。

幼稚な攻撃だ。

はっきり言って稚拙だ。

これなら。

――――ぼくでもいけるか。

「ちっ！　ひょろひょろ、避けちゃってさぁ！　男なら向かって来いよぉ」

唯崎は諦めたように、両手に持った針を捨て、拳を構えもう一度、向かってきた。

――――よし、しめた。

ぼくは、内心、勝ちを確信する。

勝利を過信する。

『呪い名』の弱点。

それは――――圧倒的な肉弾戦闘の弱さだ。

薄くて脆い。それが『呪い名』の有する特徴であり、弱点であり、共通点である。

以前、ぼくを強襲した奇野頼知――えっと、何て呼べばよかったんだっけ――でさえ、一般人のみいこさんに一方的にのされていた。

人類最終を《操想術》で拘束・支配した時宮時刻でさえ、非戦闘員の一里塚木の実さんに捕縛されたぐらいだ。

故に、眼前の《唯崎》も『呪い名』であるならば、この特徴は顕著であるはず。

否、すでに顕在している。

この子供のような体たらく。

一般人のぼくにでさえ、かわし続けられる、無様な攻撃。

「ぬりゃぁっ！」

唯崎は、その事に気付いていないのか、諦めず拳を振り回す。
かわせるということは、相手の動きについていけるということ。
ならば、防御でなく――――攻撃も可能なはず。
攻撃で、唯崎を封じることも不可能ではない。
しかし――――唯崎を打倒するには、武器が必要だ。
攻めに転ずるには、武器が不可欠である。
己の拳に頼るのも悪くないけれど、拳打というのは、漫画やドラマほど便利なものではない。
打ちどころが悪ければ、自分にも被害があるし、相手を一撃で沈めるためには、ぼくの力や体重は不利だ。
なら、どうするか。
ぼくの手持ちにはそんな都合がいいものはないけど――――唯崎が捨てたあの針を使えば。
あの針を逆にぼくの得物にすれば。
唯崎を制圧できる。

「――――っ」

ぼくは、唯崎の攻撃をかわしながら、さり気なく、唯崎が捨てた針に近づく。
あと、三歩分。
唯崎の振り下ろした拳を、避ける。
あと、二歩分。
唯崎の突き上げるアッパーカットを上体を逸らして、回避する。
あと、一歩分。
唯崎が乱暴に放った胴を横薙ぎにする蹴りを、かわす。
あと、零歩分。

「くっ！」

攻撃が外れたことで、唯崎はバランスを崩したのか、後ろに下がる。

そして、流石に、苛立ったのか。

眉間に皺を寄せて、歯噛みしながら、突進を試みる。

最初の攻撃と同じように。

「うぜぇぇぇえええなぁぁあああ、おいぃぃいいいいいい！」

ぼくは、唯崎が動き出す前に針を掴んだ。

もう一本は、ここからでは届かないが。

この一本で十分だ。

この一本で、いける。

これで、いける！

下半身に力を入れて。

ぼくは、唯崎の突進を迎え撃つように構えた。

そして。

それが、全て過ちだと気付く。

「んは☆」

突然。

唯崎は不適に笑った。

全てが予定調和と言わんばかりに。

それはもう残酷なほど凄惨に笑った。

「えっ？」

そして唯崎は、ぼくの三歩手前で。

今度は”飛んだ”。

実際はただの垂直跳びだろうけど、その跳躍力は半端ではない。

しかも、速い。

圧倒的に、だ。

今までの行動が全て芝居だったかのように、否、芝居だったのだろう。

「――――っ」

ぼくは一瞬、気を取られる。

唯崎の跳躍力に、ではない。

自分の構えている姿にだ。

攻めの姿勢。

針を構え、迎え撃つ姿勢。

明らかに、不適切だ。

あの跳躍力とスピード。

それに、今までの針で攻撃や戦い方が、手抜きで、芝居だったのなら。

攻撃と攻撃で。

ぼくが唯崎に勝てるわけが無い――――。

攻撃と防御ならまだしも、一般人のぼくがプロのプレイヤーを正面で迎え撃つなんて、無謀だ。

人間が素手で虎に挑むようなものだ。

逃げるのが、最良の一手。

しかし、最良である回避は、この姿勢では無理だ。

「――――っ！」

そして唯崎は突進のスピードと地球の重力さえも利用して、ぼくに飛びついた。この場合は飛びついたなんて生易しい表現ではない。地面に埋まるんじゃないかと思うくらいに上から圧力をかけられた。実際、ちょっと埋まったような気がする。どんな化け物だ。

「がはっ！」

ただの一直線の打撃だが、その分馬鹿みたいな破壊力だった。洒落にならない痛みでぼくは床にへばりつくように仰向けに倒れる。そのぼくの上に唯崎は覆い被さるように着地し、”いつの間にか”逆手に持っていた針をぼくの喉に突き立て。

振り下ろした。

「うわっ！」

顔をずらし、緊急回避。

針は床に刺さらず、空中で静止している。唯崎はぼくが避けたのを見て、ニッコリ笑うと、今度は針をぼくの右手の平に突き刺した。

手の平には鋭い痛みが流れる。

「ぐっ！」

「ダメだなぁ、お兄さん、油断しちゃあさぁ」

唯崎はニヤニヤ笑う。

「俺ぁ『呪い名』だぜぇ。闇雲に突っ込んでくるわけねぇじゃん。それも『呪い名』相手に攻撃に転ずるって。お友達の零崎くんからは教えてもらわなかったのかぁ？　『呪い名』を見たら一目散に逃

げろってよぉ」
「……さぁね？　聞いた、覚えがないよ」
「ああ、そう。なら仕方ないかぁ」
唯崎は残念そうに、目を細める。
「じゃぁ、死ぬしか無いよねぇ。でも、まぁ確かにお兄さん一般人とは違うみたいだね。んは、座布団一枚ぐらいの差がしかないけどさぁ」
見当はずれなことを、唯崎は興奮したように言う。
ぼくは馬乗りになっている唯崎を睨みつける。
「……唯崎くん、ぼくを殺してしまったら、それこそ本気で零崎の行方は闇の中だよ」
「いいよ、もう別に」
あっさり肯定する唯崎。
「その気になれば俺にも伝手があるって言わなかったけぇ、お兄さんよぉ？」
なんだよ、それ。
聞いた覚えはない。
「ぼくは記憶力には自信がないんだ。のび太くんじゃないけど、少し横になっただけで、全てを忘れてしまうぐらい酷いもんなんだよ」
というか伝手があるんだったら、零崎の行方なんてぼくに尋ねるなよ。

ああ、もう。
ぼく、何で殺されかけてるんだっけ。
「殺人鬼に殺す理由を問うなんて、ナンセンスだよぉ、お兄さん」
「ああ、そうかい。なら殺される前に幾つか聞いていいかい？」
「ん、いいよ、別に」

言葉だけなら肯定か否定か判断つきにくいが、針をぼくの首筋のところで寸止めしたところを見ると、ぼくの質問を認可してくれたようだ。
この辺り、この唯崎唯識は寛容である。
というより、テキトーである。

「ぼくが聞いた話だとさ、『呪い名』ってのは、肉弾戦闘よりも《闇口衆》みたいな暗殺に長けているって聞いたんだけど。でも君の動きを見る限り、とても『呪い名』とは思えないね」
「そりゃまぁな。確かに肉弾って意味の戦闘に関しちゃ《唯崎王室》は『殺し名』にも劣らねぇよぉ。だって《唯崎王室》は『殺し名』『呪い名』の中で最も忌み嫌われている、あの《零崎一賊》を相手にすんだぜ？　《時宮》や《抜森》みたいなせこい手段であの一賊相手に勝てるかよぉ」
「なるほどね」

無駄口を叩きながらも、唯崎は一向に力を緩めない。
抜かりは無いのか、抜けているのか、どっちつかずだ。
どうもこの唯崎という人間を、ぼくは上手く相手取れない。

「へぇ、話には聞いちゃいたけど《零崎一賊》ってそんなにぶっ飛んだ連中なんだね。でも、何で《唯崎王室》は『呪い名』に含まれるんだ？　肉弾戦闘専門なら『殺し名』なはずだろ」

とりあえず、延命のためにも、話を振る。
ああ、誰か助けて来てくれないかな。

「んは、俺は別に肉弾戦闘を得意としてるわけじゃねぇのよぉん。ちゃんとしっかり、『呪い名』たる由縁があるんだわ」
「……それは気になるね。是非知りたい」
「そいつは無理な相談だね、お兄さん。俺の《唯崎王室》の、超必殺技はある程度条件を満たさなきゃ発揮できんのよぉ。そんで今日は無理な日ぃ」

ふむ、やけにムラッ毛がある『呪い名』だ。
ぼくは、唯崎の後ろの橙色の装飾を見ながら、溜息をつく。
こんな豪奢なレストランで死ぬは嫌だな。

「んん、質問はおしまいかぁ、お兄さん」
「いや、ちょっと待ってくれ！　あと最後に一つだけ」

ぼくは出来るだけ、冷静を装いながら

「『天狗』って知ってるかい？」
「知ってるよん」
「え？」

即答だった。あまりの反応の早かに尋ねたぼくが驚いてしまう。

「本当に知ってるのか？　妖怪や魑魅魍魎の類の話じゃないぞ？」
「当たり前じゃん。そんなことは万も承知。けど百倍知ってるわけじゃないぜぇ」
「じゃあ教えてくれ。『天狗』ってのは何だ？」

「言葉にすんのは難しいな。けどまぁ簡単に簡潔に言えば

――――『災厄』、だな」

唯崎はシニカルに笑いながら言った。

「……『災厄』？」

「そう『災厄』。地震雷火事三十路ってな」

……まぁ確かに一部の人間にとって三十路は災厄かもしれないが。

「話が見えてこないよ。『天狗』やその『災厄』ってのは、誰かの肩書きみたいなものか？」

「んは、これ以上は教えないよぉ。『天狗』ってのはそうそう簡単に呼んでいい名前じゃねぇんだ」

……名前、ね。

「そもそも、俺としてはお兄さんの口から『天狗』って言葉が出たことに驚きさぁ。ったく、お兄さんはどんだけ情報通なんだよ。あ、お兄さん、ファミ通とか読む？」

「読まないよ。第一、ゲーム自体あまりしないからね。ぼくはレトロな２０歳なんだよ」

「ふーん、かっこいいねぇ、そういうの。お兄さん、モテるんじゃない？」

「冗談。こんな根暗な戯言遣いに親しくしてくれる相手なんて、人類の終着点みたいな奴だけだよ」

「はーん、名づけて人類最終ってか？」

唯崎は、何か満足したように、目つきを変えた。

「さてと、お話はそろそろおしまいだぁ。お兄さんとの会話は楽しいけど、そろそろ打ち切りにしようっと。帰って昼ドラ見るんだぁ」
「……そうかい、ぼくはもうちょっと話していたかったけどね」

もう限界、か。
これ以上、唯崎が情けをかけてくれるとは思えないし。
もしかしたら、まだ見ぬ聖塚一元さんとか、初春教授が助けに来てくれるかと期待したけど、世の中、そんな上手い話はないもんだ。
よりにもよって。
こんなタイミングで来てくれないよな、普通。

「ったく、本当についてないなぁ……」

ぼくは、そう呟いて。
唯崎と目を合わせる。ぼくの最期の攻撃に唯崎は動じない。

「じゃぁ、終わりにしよう。辞世の句とかなら聞いといてやるよぉ」

本当に。
唯崎は適当だ。
殺すなら、はやく殺せばいいのに。
そんなんだから――――。

「そんじゃ最後にぼくが取って置きの呪文を教えてあげるよ、『呪い名』」
「へぇ、そりゃ一体――――」

――――痛い目をみるんだ。

「助けてくれ、ぼくの親友」

唯崎が言い終わる前に、唯崎は吹き飛んだ。

これは何の比喩でもなく、今目の前で起きた事実をそのまま言っただけだ。

オレンジの閃光、だけが見えた。

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ」

独特の笑い声。

橙色の髪。

意志の強そうな眉毛。

鋭い目つき。

そして、だいぶ伸びた身長。

「――――おい、俺様の親友に何やってんだ、お前は」

橙なる種にして人類最終。

数ヶ月ぶりの再会にして邂逅。

つまりは。

想影真心の凱旋である。

3―6

7

「俺様の親友に何やってんだ、お前」

橙なる種こと想影真心、素晴らしいタイミングでの帰還である。橙色の髪をゴムで一本に纏め、スラリと、たった数ヶ月ぶりの再会なはずなのに、見違えるほど大人びた真心のその容姿は唯崎だけでなくぼくまでも圧倒させた。

「がぁ……な、なんだ、おめー……？」

「何って？　ぼくの親友に決まってるだろ」

よろめきながら立ち上がった唯崎にぼくは言う。

「人類最終こと、想影真心。ぼくの大切な親友で、誇るべき最高の友達さ」

掛け値なしの最終。人間としての終着点。それが真心、想影真心。

「ん、は。こりゃ、ねぇだろ……」

唯崎はふらつきながらも、鋭い視線でぼくと真心を見る。

「こんなデタラメな奴が、親友とか。……お兄さんよぉ、ちぃと、……ずるくねぇか」

「親友にずるいも汚いもないさ。親友っていうのは、言葉じゃなく

てね絆で繋がるものだからね」
「はは、かっくぉいーこと言っちゃってさぁ……」
唯崎は息も絶え絶えに言った。
「……こりゃ、零識以上じゃん。……俺も『呪い名』として、戦わなきゃ、いけねぇかも……」
唯崎はふらつく脚で立ち上がる。
そんな光景を真心は冷静に見る。
「おい、無理しないほうがいいぞ、お前。俺様は手加減なしで殴ったからな。身体がばらばらにならなかっただけで大したもんだぞ」
「そりゃ、ほめ言葉かよぉ……。くそ、なんだよ、一体。この世界はどこまで狂ってやがるだぁ……」
「世界なんて、いつも狂ってるものさ」
ぼくは立ち上がり、針で刺された傷跡を確認する。
血は出ちゃいるが、貫通はしてないようだ。
「まったく磔にされるところだったよ。ぼくはメシアでもどこぞの王様でもないんだけどね」
そう呟いて、唯崎を見る。見定める。
「形勢逆転かな。言っておくけど、真心相手に戦うのはやめたほうがいいぜ。なんせ人類最強の娘なんだからな」
「人類最強か……。あの赤色め、随分と株を上げてんじゃねぇかぁ……。んはは、しかもその娘ってぇ、おいおい。本当にこの世界は狂っちまったのかよぉ」

唯崎は嘆く。
それから、傷を庇う様にその場に座り込む。
それは座るというより、崩れたと言ったほうが正しいくらいだけど。

「でぇ、お兄さん。俺を吹っ飛ばして、どぉすんだよぉ……。つーか、よくよく考えたら、何で俺ぁ、お兄さんを殺そうとしたんだ？」
「ぼくが知りたいさ、そんなことは。それより、唯崎。身体は動かなくとも、口ならば動くだろう。お前、確か崩子ちゃんを拉致した男を見たって言ったな？」
「ああ、言ったね、言ったよぉ。で、それがどぉしたぁ？」
「そいつの特徴を教えろ。それと、六花さんを殺そうとした理由もだ」

咎凪がどうといっていたけど、それが本当かどうかは解らない。
唯崎はうんざりしたように、目を細め、ため息を一つ。
それから

「何度も言うけど、崩子ちゃんなんて知らねぇよ。お兄さんもしつこいねぇ」

と呆れて言う。

「けど、咎凪がそれらしい子を連れてったのは本当だぜぇ……。お兄さんとはすれ違いになったようだけどなぁ」
「……もしそれが本当だったとして、何故咎凪が崩子ちゃんを狙う？　お前が六花さんを狙ったのと関係があるんじゃないのか？」
「ん、んん」

唯崎は思案顔で

「んはは、もしかして、お兄さん」唯崎は大袈裟に首を振りながら

「俺を尋問するつもりかぁ？　墓森じゃねぇんだからさ。怪我人に無理言ってくれるぜぇ」

「必要ならするかもね。けど、出来れば穏便に済ましたいよ。ぼくは平和主義者なんだ」

ぼくは柄にもなく言う。

それに対して唯崎は諦めたのか、呆れ果てたのか、どちらにしてもつまらなさそうな表情を作った。

「……おーけー、おーけー。なら何でも話してやるよぉ。サーヴィスタイムだぁ。ま、長話は勘弁してほしいけどなぁ。傷に響きそうだ……」

「なら、まずは最初の質問に答えろ。何で咎凪が崩子ちゃんを狙う？」

「あー。ぶっちゃけぇ咎凪がその子を狙う理由は判らない。んはは、そう、睨むなってぇ。これは嘘じゃなくて本当さぁ。何せ、咎凪ってのは『殺し名』『呪い名』併せて、最も希少で珍重な存在だからなぁ。そんな奴らの考えなんて、同じ『呪い名』の俺でもわかんねぇよぉ」

「なら、六花さんを狙った理由は？　まさか今になって無差別殺人なんて言わないよな？」

「まっさかぁ。俺にもちゃんと流儀ってのがある。そんでもって、そいつを殺せと言われたのは、仕事の上司だよぉ。俺ぁこう見えても立派な社会人でなぁ。働かねぇと、ご飯食えねぇのさ」

「殺人鬼が立派な社会人なわけあるかよ」

「んはは、いちいち噛み付くなよぉ。この程度の冗談、流せ。話が

進まねぇぜ？」
「……」
「けどま、正直な話をすれば、暇六花（いとまむいか）、だっけ？　そこの女。そいつを殺さなきゃいけない理由なんて、俺には判らない。本当だぜ？
俺は上からの指示に従っただけぇ。いちいち、上司から一から十まで説明してもらえるほど、社会は甘くないんだぁ。覚えておきな、ひっよこが」
「……『呪い名』のあんたに仕事を与えるなんて、とんでもない上司だ。是非、名前を聞かせてもらいたいね」
「ん、んん、ああ。お兄さん、別に俺は隠すつもりはないぜぇ。ぶっちゃけ、守秘義務なんてねーし。あるのは目的と報酬だけぇ。だから、カマをかける必要なんてねぇよ」
「なら教えてくれよ、そのふざけた上司をさ」
「あー、んー。ウジガミって言って、お兄さん、わかるかな？」
「ウジガミ？　さぁ？　聞いたことがあるような、ないような名前だね」
「知らないならいい。俺の上司の情報はそれだけぇ。おっと、がっかりするなよぉ。本当に名前しか知らねぇんだから」
「ならその話はもういい。次はお前の言った咎凪の話だ」
「……咎凪の話、ねぇ。俺が言うのもなんだが、『呪い名』ってのはそこそこ卑怯な奴でなぁ。そう簡単に表の世界には出てこねぇ。暗がりを好むのか、日を嫌うのかは知らないけどぉ、そんな『呪い名』でも咎凪は断トツで異端だ」
「異端……」
「そもそも咎凪ってのは『殺し名』『呪い名』の中で最も希少で、最も規模が小さい集団だぁ。俺の知る限り、今じゃ１０人もいるとかいないとか。そんな連中だよぉ」
「随分と少ないね。確か、《匂宮》とかは本家、分家をあわせたら相当な数になるって聞いてたけど。それとは真逆だな」
「『殺し名』と『呪い名』を比べるのは畑違いだよぉ。けど、だか

らこそ咎凪はそう簡単に遭遇できるはずもないし、現れることもない。ましてや、こんな表の世界、いや微妙に裏にも通じてるか？　いや、ともかくこんな真昼間から、普通の世界であるこんな建物に現れるはずがないんだよぉ。ん？　ああ、けど勘違いしないで欲しいのは、俺は嘘をついていないってことだぁ。俺が見たのは確かに、咎凪だった」

「まどろっこしいよ。つまりは――――」

「そういうことぉ。咎凪がそのほうこちゃん、だっけ？　そんな子を拉致して殺すために、わざわざこんなところには来ねぇのさ。咎凪は馬鹿でもなければ暇でもないのさ」

「……」

「ま、信じるか信じないかはお兄さん次第だねぇ。んはは、珍しく長く話しちまった。あー、いてぇいてぇ」

「唯崎、お前の事情はわかった。咎凪のことも含めて。だからと言って、ぼくはお前のこのまま野放しにはできない。零崎みたく情けをかけるつもりはないからね」

「……零崎みたく、ねぇ。なぁ、お兄さん、最後に一つ聞かせてもらいたいんだがぁ。もしかして、お兄さんの知り合いに零崎がいるのか？」

「ん？」

ぼくは少し考えて、言った。

「ああ、いるよ。とんでもない殺人鬼の名折れがね」

「……そうかい」

ぼくの言葉を聞いて、唯崎は黙る。

「さて、それじゃこの場合は、警察に連絡？　いや、真心のこともあるし、やっぱり玖渚に――――」

「おい、お兄さん」
助けてもらうしかないか、と言おうとして、言いかけて。
唯崎が次の言葉を奪う。
「これは忠告だけどよ――――」
倒れるように座っていた唯崎が。
何気なく立ち上がっているのに、ぼくは気付く。
そんなぼくの一瞬の戸惑いも許さないように、唯崎は静かに告げた。
「――――『呪い名』をなめるな」
「！」
動けないはずの唯崎は、駆けた。
否、それは駆けたなんてもんじゃない。
そんな生易しくない。
瞬間移動、とも言えるスピードで――――！
爆発的に加速した。
「いーちゃん、伏せとけっ！」
真心が叫ぶ。
しかし真心が言うより早く、唯崎は真心目掛けて、いや、真心の後ろのガラス窓に向かって文字通り体当たりした。　当然、ガラスは弾け飛ぶ。
そして、唯崎は体当たりした勢いのまま、勿論急に止まれるはずもなく、世界の物理法則に従い、

落下した。

「！」

ぼくは割れた窓ガラスに近寄る。

それに真心も続く。

「無茶苦茶な……」

ぼくは真心と一緒に、地上を見つめた。高さは間違いなく２０階立て以上ある。落ちたら例外なく即死だ。しかし、ここから見る限り、地上で騒ぎになっている様子もなく唯崎が何かにしがみついている様子もない。

「追い詰められての自殺か？　いやそれでも、あのスピードを見たら諦めたとはいえないか。それでも――――」

――――こんな高さから落ちたら幾ら哀川さんや真心でも一溜まりないだろう。

哀川さんなら強がって崩子ちゃんでも抱きつつ飛んでみせるだろうが、それでも無事とはいくまいし、そもそも哀川さんがそんな馬鹿をしでかすわけがない。

「どうする、いーちゃん？　追うか？」

「追うって言ったって……」

確かに真心なら平気で飛翔しそうだが。

「いや」

唯崎をそこまでして追う必要は今はない。
あの様子じゃむしろ崩子ちゃんを優先して探すべきだ。その崩子ちゃんを拉致したという《咎凪》も含めて。
「仮にここから飛び降りて、生きていようと死んでいようと、たぶんもう、あいつに会うことはないよ。なんとなくだけど」
そんな気がする。
縁が切れたような。因果が切れたような。
そんな感覚。
「何にしても助かったよ。真心」
一先ず、難は去ったわけだ。
「気にすんなよ、いーちゃん。で、今の奴は誰なんだ？　大学の友達か？」
「まさか。今日初めて会ったどうでもいい奴さ」
「ふーん、そっか。それより、いーちゃん」
「ん、何だ？」
「ただいま！」
そう言ってぼくに飛びつく真心。ぼくは真心の頭を撫でながら
「ああ、おかえり、真心」
ともかく、数ヶ月ぶりの真心との再会である。
「お迎え十全です、と言いたいところですがね、お友達（ディアフレンド）。何なんですか、この有り様は」

入り口から石丸小唄が顔を見せた。
いつもの長い三つ編みとハンチング帽。
この人も、相変わらず健在のようだ。

「小唄さんもお久しぶりです。少し取り込んでいましてね、それより何でこの場所に？」
「そこの橙色が貴方の匂いを嗅ぎつけたんですよ、お友達（ディアフレンド）。そうしたらこの場所にたどり着いたんです。ちなみに屋上にはヘリが停めてあります」

そうだったのか。さすがぼくの親友だ。登場シーンを弁えている。

「ところで、真心。お前だいぶ背が伸びたな。もう玖渚ぐらいあるぞ」
「そうかなぁ、身長は自分じゃわかんねぇよ。でも、おっぱいは大きくなったぞ！　いーちゃん、触ってみるか？」
「ん、それは遠慮しとく。親友の胸を揉むなんて罰ゲームだろ」

真心の心躍る提案を却下し、ポケットから携帯電話を取り出す。

「何やってんだ、いーちゃん？　携帯アプリか？」
「違うよ、真心。実はさ、以前哀川さんに崩子ちゃんが拉致られた時に学んでね。崩子ちゃんにはＧＰＳ機能付きの携帯電話を持たせてるんだよ。最近は専ら、崩子ちゃんのゲーム機になってるんだけど」
「へー」

さっきは混乱のあまり、ど忘れしていたけれども、今日も確か崩子ちゃんは携帯電話を持ってきていた。

「親バカみたいな発想ですわね、お友達（ディアフレンド）」

む、みいこさんにも同じ事を言われたな、そういえば。ぼくは単に崩子ちゃんの所持者として、或いは保護者として努めているだけである。過保護でもなんでもない。ましてや七年後が楽しみだなんて思ってない。

「つまり携帯電話で崩子ちゃんの場所がわかんのか？」
「そういうこと。そら、これが今ぼくのらいるホテルで、これが崩子ちゃんの居場所だ」
「おっ、意外と近いな」

あまり時間も経っていないし、移動距離としてはこんなものか。それにしてもまだ京都市内とはね。
あながち、唯崎の言葉が当たっているかもしれない。
咎凪の、目的ね。

「おや、お友達（ディアフレンド）。お手を怪我しているようですが」
「ああ、これは、さっき針でぶすりとやられまして。貫通はしてないみたいですけど」
「それはいけませんね。少しお待ちを」

と、小唄さんはポケットからハンカチを取り出し、そこそこ高級そうなハンカチを問答無用に切り裂き、そしてそれを

「こ、小唄さん？」

ぼくの怪我をした両手に巻き始めた。
性悪の小唄さんにしては、信じられないほど慈愛に溢れた行いだ。

「お気になさらず、お友達（ディアフレンド）。どうせ安物です」
「そういうことではなくってですね」

なんだ、いきなりキャラ変わりすぎてないか、この人。
まさか、真心の保護者を経験して、母性本能に目覚めたとか？

「これでいいですわね。簡単な応急処置ですけれど」
「あ、ありがとうございます」

なんだか、裏があるような気がして、どうも素直に喜べない。

「それで、お友達（ディアフレンド）。これから、どうするおつもりで？」
「え、あ、そうですね」

とりあえず、今は咎凪だ。
《咎凪》――――『殺し名』ではなく『呪い名』。ぼくには未だにその両者の具体的な区別はついていないが、兎にも角にも事は性急を要するのは明確だ。崩子ちゃんの身に何か起きてからでは遅い。
小唄さんのな謎の善人説を疑ってる場合ではない。

「ぼくは今から咎凪を追います。場所も近いようですし」
「なら、俺様も行くぞ」

真心がぼくを腕を掴む。

「崩子ちゃんがピンチなら、放っておけない。崩子ちゃんは大切な友達だからな」

大切な友達、か。

ぼくとしては真心を利用するような真似はするつもりも、させるつもりもないけれど。本人がそう望むならば、ぼくがとるべき行動は一つ。

「なら、頼むぞ、真心。崩子ちゃんを取り戻す」

「おぅよ、合点だぜ、いーちゃん」

真心はカッコ良くガッツポーズをしてから、小唄さんに向かい合うと

「それじゃ、ちょっと行ってくるぞ、小唄！　止めても無意味だからなっ」

「……無駄ではなく無意味ですか。まぁいいでしょう、しばらくは貴方の好きになさい。それに、お友達（ディアフレンド）だけでは《咎凪》には通用しないでしょう。ならば、私は何も言いませんし咎めません。ただし――――」

「ただし？」

「暗くなる前には帰ってきなさい」

小唄さんはそう言うと

「この死体は私が片付けておきます。完璧に誤魔化すのは骨がいるでしょうが、まぁこれは貸しということで良いでしょう、お友達（ディアフレンド）。ではいってらっしゃい」

頼んでもいないのに死体処理を引き受けてくれた。

やっぱり、この人、案外良い人なのだ。

最後に床の上で息絶えている六花さんに目をやる。上半身と下半身には別れた暇六花。もう彼女はただの肉塊、呼吸も瞬きもできな

い肉と血だけの塊だ。
結局最後まで現れなかった初春教授。彼女の死を知った教授は何て思うだろう。自分をあれだけ慕ってくれていた人間がこうして無惨にも真っ二つなっていたらどう考えるだろう。
『死』を彼女の『死』を受け入れられるんだろうか。

「戯言だな…」

お決まりの台詞を吐いて、ぼくは真心と共に走る。

4－1（前書き）

お待たせしました。一ヶ月ぶりの投稿です。
相変わらずの原作とはまるで異なる亀更新。西尾先生の恐ろしさがわかりますね。

4－1

0

夢から覚めたら、そこは。
腐った世界だった。

1

《咎凪》、しつこいようだけど、ぼくは『呪い名』について詳述するなんてことはできない。だったら、『殺し名』はどうかといえば、無論語るに尽くすほどの関係があるわけもなく、はっきり言えば両方ともぼくにとって目を見張るほどの因縁などない。
ただ『殺し名』の連中には少なからず出逢ったことがあるだけだ。
零崎、闇口、石凪、匂宮。並べれば、ふむ、なるほど、そうそうたる顔ぶれだが、だからと言ってこの全員と全員、血も涙もないその名の通りの『殺し名』なのかといえば、そんな事はない。ぼくが「あぁ、こいつはどうしようもなく『殺し名』だな」と心に残っているのは、ただ一人、匂宮だけだ。
《匂宮》、『殺し名』序列第一位にして、『殺し名』最大の規模を誇り、そしてその《匂宮》史上最大の失敗作として生誕した彼と彼女。

彼だけはぼくが唯一自信を持って（どんな自信だ）『殺し名』だと言い切れる奴だった。
しかし、結局。
それだけなのだ。
零崎も石凪も闇口も、それなりの『殺し名』としての実力は披露しているが、　ただそれだけだ。

ただそれだけの認識しかない。当然言葉の上では『殺し名』の恐怖や劣悪な漠然としたイメージは湧いているけれど、それはどこまで言っても言葉の上や言葉の下でしかない。どんなに『殺し名』の怪奇譚や伝記を口酸っぱく語られたところで、そんなものは単純な言葉だけで、本質を理解するには全然足りない。

これっぽっちも足りていない。『呪い名』ともくればなおさらだ。

百聞は一見に如かずとは先人もよく言ったものだが、まさしく一度の邂逅は千もの噂に勝るのだ。噂通りの人間、聞いた通りの人間。そんな上っ面だけの人間などいない。噂や他言を軽視するわけではないけれど、重視し過ぎるのも危険であるのだ。

今回の場合、ぼくは『呪い名』を軽視していたわけではないし、油断や慢心があったわけでもない。ただ単純に理解していなかった。順応していなかっただけの話。

つまるところ。

『呪い名』序列第六位《咎凪》こと――――咎凪栂助（とがなぎとがすけ）はぼくの想像を超える『呪い名』だった。

2

ともあれ、ぼくと真心は携帯電話に映る地図を見ながら、地下にある駐車場まで来ていた。ＧＰＳ機能によれば、この建物から電波が送られているようで、一先ず地下にあるこの駐車場から探索を進めておくことにする。こうして見る限り何の変哲もないただの駐車場だ。４０メートル四方の空間の輪郭をなぞるように車が駐車されており、出口と入口は二車線で平行に並んでいる。

地下駐車場なだけあって、ひんやりと涼しい。上の階は四階まである中型のビルで、駐車場の屋上にパイプやらが所狭しと犇めき合

っている。
うん、至って普通の駐車場だ。まぁ普通じゃない駐車場もあまりないような気がするけれど。
ただ、一つ懸念すべきことと言えば、どうもこの駐車場に停めてある車体はどれも高級車ばかりということだ。
駐車場は普通だが、駐車されている車が普通じゃない。このビルには大富豪や王族が集まるバーでもあるんじゃないかと勘違いするほど、猛烈な高級車が隙間なく並んでいた。
「おいおい、すげぇなこりゃぁ……」
ブガッティにキャデラック、ＮＳＸ－Ｒ、ジャガーにベントレー、挙げ句にはロールス・ロイスやマイバッハまでもある。ぼくにしてみれば夢のような夢であったら決して覚めないで欲しい空間であった。
「んー、いーちゃん。崩子ちゃんはいないみたいだぞ。本当にここでいいのか？」
真心はＮＳＸ－Ｒの下を覗き込みながら言った。
ぼくは気を取り直し、携帯電話の画面を見る。
「えーっと、これを見る限りここで正しいはずなんだけどな。もしかしたら追跡される心配を考慮して携帯電話は破棄したのかもね」
そうだったら非常にまずい。仮に本当に携帯電話が捨てられていたら、もう崩子ちゃんの行方を知るのは絶望的だ。
崩子ちゃんの安否はおろか生死すらも危ぶまれる。
「なぁ真心。お前って人の気配とか察知できないのか？　何処かに

隠れている可能性とか」
「むー、確かに人の気配というか微弱電磁波は感知できるけど、それを差し引いてもここには誰もいないぞ。隠れている可能性も皆無だ」

ダメ元で聞いてみたが、意外といけるらしかった。

「なら何か崩子ちゃんがいた形跡は探せるか？　携帯電話とか崩子ちゃんの髪の毛とか？」
「出来なくはないけど、俺様が見る限り何もない。痕跡や形跡、全部だ。そう、全部。全部なはずなんだけど……」真心は悩むように首を振る「んー、何か違和感は感じるんだよなぁ」
「ん、違和感だって？　何だよ、そりゃ」
「うー、なんて言ったらいいのかなぁ。身体がちくちくするような、びりびりするような、どきどきするような。なんか、毛糸のマフラーを全身に巻いてるみたいだぞ」
「それはまた、ぼくには判り辛い例えだな。けど、そんな違和感を差し引いても、ここに崩子ちゃんがいないなら、次はこの上に行ってみるしかないな。見た感じ普通のビルだし、何とか誤魔化せば中を見せてくれることぐらいできるだろ」
「いーちゃんがそういうなら、俺様も付いていくぞ」

真心が妙に楽しそうに、ぼくの横に並ぶ。最近の真心は毎日が楽しそうだって、哀川さんに聞いていたんだけれど、どうやら本当みたいだ。
不謹慎だけど、日常も非日常もこういう事態も真心にとっては新鮮なのだろう。平常も異常も何もかもが、新しくて、潤っていて、楽しいのだろう。それを咎めるつもりはぼくにはない。
真心も普通の女の子なんだから。普通の人間なんだから。もっと、ありのままでいいと、ぼくは思う。

うん、差し当たっての問題は。

「この目立つ髪だよなぁ」

ぼくひとりなら就活だとかで適当に言いくるめそうだけれど、真心の容姿や容貌はちょっと奇抜だ。間違っても就職活動をしている子には見えないだろう。というか年齢的にも無理がある。ならばここはぼくの妹という立場でゴリ押しで行くしかない――――

「――――」

か――――とぼくが言おうとした丁度同じ瞬間。

まるで、ぼくの真心が背を向けるタイミングを計ったように、凄まじく唐突に。

後方から。

ぼくと真心の後ろの、先ほど真心が覗き込んでいたＮＳＸ－Ｒのちょうど反対側にある車のライトが突然点灯した。

「え？」

振り返り。

あまりの唐突な出来事にぼくと真心は一瞬、体を硬直させる。

いや別に車のライトが点灯するのに、何の不思議はない。そりゃそういう風に造られてるんだから当たり前だ。

だから、そうではなく、ぼくが驚いた理由は“無人の車がいきなり駆動したこと”だった。

「っ！」

勿論、それだけでは終わらない、終わらせてくれない。
車体はライトが点灯するのと同時に、無人なのに、誰も運転しているはずがないのにトップギアで、ぼくたちに向かって突っ込んできた。

「――――っ」

ぼくや真心と車との距離は１０メートルもない。そんな短距離をぐんぐんスピードを上げる車。
脳みそに危険信号がぶちまけられる。
誰かが乗っている気配もない。誰かが操っている気配もない。
にもかかわらず、明らかにぼくと真心を的にして、突っ込んでくる。

――――ヨケナクテハ
脳から信号が送られる。信号が神経を光速で伝達している。伝達している。している、はず。送られているはずなのに。
それなのに、ぼくは動けない。身体が動かない、否、動かせない。
動作というものが消し炭になったように、ぼくは馬鹿みたいに立ち竦む。

「いーちゃんっ、危ねぇ！」
「えっ？」

呆けるぼくを真心が突き飛ばす。突き飛ばされて、ぼくは間抜けみたいに乱暴に尻餅をつく。あう。痛い。痛い。お尻が痛い。骨にひびが入ったかも。こりゃ入院、いやそうじゃない。そうではなく――――！

「真心っ！」

ぼくが叫ぶのより速く、車が真心に突っ込んだ。
問答無用に、突っ込んだ。加減も限度もなく、一ｔ近い重量の鉄の塊が真心を飲み込む。
それでも車は止まるわけもなく、真心が覗き込んでいたＮＳＸ－Ｒに衝突し、凄まじい轟音とともにようやく動きを止めた。

「……、……」

悲惨なんてもんじゃない。そんな言葉では足りない現実が目の前で起きた。
突進、猛進、暴走？
一番最初にぼくが思ったのは先ほどの唯崎が見せた猛進だ。しかし今回は唯崎のそれとは全く異なる。第一、質量が違いすぎる。人間と車、比べるまでもない。

「ま、真心！？」

ぼくの叫びと連動するように、もう一台車のライトが点灯した。
さらにもう一台、もう一台と。
一斉に車体のライトが光る。
これじゃ敵中に迷い込んだ足軽の気分だ。車のライトの一つ一つが鋭い眼光のように灯る。

「おいおい、なんだよ、こりゃ」

気づけば、駐車場に停めてある全ての車にエンジンが掛かっている。ブガッティにキャデラック、ＮＳＸ－Ｒ、ジャガーにベントレー、挙げ句にはロールス・ロイスやマイバッハまでも、夢だったら早く覚めてほしい悪夢だ。

ぼくの思いを裏に、全ての車が確かに無人なはずなのに、まるで生き物のように駆動し始めた。
そして、餌に喰らいつくピラニアの如く――――この場合、ピラニアは車で、ぼくは餌だ――――前方の車が一斉に迫る。

「っ！」

突っ込むベントレーアズールを辛うじて躱す。
今度は先ほどのような無様な姿は晒せない。思考するより速く、ほぼ反射の領域で左右へと横に飛ぶ。
目標を失った車は先ほどと同じように、後方の車体を巻き込み激突し、その運動を完全に停止する。
くそ、命がけのアトラクションかよ。
ぼくが一台避けたのを皮切りに、次々の高級車たちの突進が開始した。そのどれもが、ぼくを標的にして襲う。
車種によっては初速は異なるがこれを全て避けられるとしたら、そいつは間違いなく反射神経の化け物だ。奇跡でも、奇天烈な奇跡でも起きない限り、無傷では済まないだろう。

「くそっ！」

あの重量とスピードならば、掠っただけで致命傷になりかねない。
否、バランスを崩されてもアウトだ。一発終了だ。
一台、もう一台と避けていき、丁度ぼくがこの駐車場の中央らへんに構えたところ。

「冗談はよしてくれ……」

今度は、前方だけでなく左右の車までもがぼくを標的に発進し始めた。

さっきも言った通り、この駐車場は四辺をなぞるように車が停められている。
３６０。見渡す限り車、車、車、車、車。
それがすなわち何を意味するか。
それがすなわち何を意味させるか。
答えは、簡単だ。

「もう死ねってことか！」

全方位からの一斉攻撃。
これはなかなかしんどい。

「うっ」

これが罠なのは明白だ。加えて、こんな大それた罠を張れるとしたら、間違いなく、『呪い名』の《咎凪》だろう。どういう風な仕掛けかは知らないが、高級車でぼくの命を狙うとは、何ともイカしたセンスの持ち主だ。

死の間近を経験したことは沢山、それこそ両手の指の数じゃ足りないぐらい多いけれど、それでもこんな大それたアメリカのアクション映画みたいな展開は初めてだ。ナイフで頸動脈を狙われたことも、銃で目玉を狙われたことも、自慢じゃないが幾度となく経験はしている。その度、生き残ってきたのもまたしかり。
だが、どれもこれも、ぼくの死に瀕する体験はすべて共通点がある。
鴉の濡れ羽島で名もない彼女に襲われ。
去年の五月に、鴨川公園でむいみちゃんに襲われ。
澄百合学園で子荻ちゃんや玉藻ちゃんに襲われ。
斜道博士の研究所で犬に襲われ。

元診療所で出夢くんとバトって。
京都御所前で澪標姉妹に襲われ。
もうなんだかよくわかんないくらい襲われまくってるが、つまり、ぼくはこれまでに人間や犬みたいな生物としか相手取っていないわけだ。そりゃ、漫画やアニメじゃないんだから、これは実に真っ当なことだけど（これぞ、まさに戯言だ）、だからこそ今のこの状況にぼくはかなり参ってる。
無機物というか、車に殺されかけるって、おい。
冗談もいい加減にしろ。
いや、冗談であってほしい。
うん、冗談であってください。

「でも、勝機がないわけじゃないんだけどね――――！」

この場で、勝機を考えてるぼくはまぁ正気じゃないんだろうけど。
それでも、光明はある。死なないための、生きるためにどうすればいいか――――。
可能性は限りなく低いけれど、そんなものぼくには無意味――――。

「え、嘘だよね」

だが、それも今ちょうど無残に、ちょうど無意味になったところだった。
ぼくとしては、車の台数に限りがあって、しかも車は壁に激突して完全に動きを停止させるわけだから、全ての車を避けられれば、無事生還できる予定だったのだけれど。

「あ、やばい」

ベントレーのミラーに肩を弾かれ、ぼくはその場に崩れる。
一瞬の余裕が、命取りになった。一瞬の慢心が、ぼくの首を刈り取る。
くそう、なんだよ。なにやってんだよ。ぼくって、こんな格好悪かったっけ？
生物じゃない車に言葉が通じない以上、ぼくの戯言は無意味というか、無駄、無効、無益。
流石に、哀川さんみたくはいかないか。あの真っ赤な人類最強みたく、かっこよくキメるのは、ぼくに無理か。
くそう。
柄にもなく、悔しいぜ。
まぁでも高級車に轢かれて、死ぬなら本望か。もしかしたら、これがぼくにとっての大往生かもしれないし。

「ったく、最後の最後まで戯言尽くしだよな……」

そう呟いて。
走馬灯なんて過ぎる暇もなく、ぼくは目を閉じる。
ぼくに向かってきたのが赤色のジャガーだった気がするのは、ただの気のせいだろう。
そういや、ぼくは殺されそうになっても、目を瞑らないのが売りだったな――――。
てる子さんや哀川さんに言われたんだっけ。
ああ、懐かしいような、懐かしくないような。
まぁ、今はそんなことどうでも――――。

「いーちゃん、捕まっとけ！」

と、急な背後からの真心の言葉にハッとする。そして、そのまま真心はぼくの胴体を脇に抱え、ひと思いに垂直に飛び上がり、天井

に張り巡らされているパイプを掴んだ。真心はパイプをしっかり右手で掴み、逆の手でぼくをしっかり支える。
ぼくは急な浮上に一瞬吐き気を催したが、無理に堪えて、下を見る。

その光景はある意味、地獄絵図であった。
激突しまくる高級車。蹴散らされるフロントガラスに、虚しく弾け飛ぶベンツのロゴマーク。
ぼくは発狂寸前でその悲惨な光景を眺める。

「これって総額いくらぐらいの損失になるんだ、いーちゃん？」

パイプにぶら下がりながら真心は聞く。

「……さてね。ぼくには皆目見当もつかないよ。ただただ持ち主さんがショックのあまり自殺しかねないか心配だ」

全ての高級車が（一台も残らず）壁や互い激突し、その機能が完全に停止した頃、ぼくと真心は地に足をつけた。
瓦礫の山と化した元高級車を横目で見ながら、真心に問いかける。

「真心、お前大丈夫なのか？」
「おぅ、ピンピンしてるぞ」
「少しでも痛いところとか、頭を強く打ったとかもないのか？」
「全くないぞ。俺様は常に絶好調だからな」
「……」

車に吹き飛ばされた者の台詞とはとても思えないが本人がそう言うなら、それを信じよう。それによくよく考えたら、真心が車程度にひかれたぐらいで死ぬわけがなかった。むしろ真心に衝突した車

を心配したほうがよっぽど現実的だ。なんせ、真心はあの人類最強の子供なのだから。

「で、真心。この残骸（こうきゅうしゃ）の持ち主には後でゆっくり泣いてもらうとして、どうだ？　車に誰か乗っていた感じはしたか？」

「いいや。どれもこれも蛻の殻だったぞ。人の気配はしなかったし、勿論崩子ちゃんも乗ってなかったみたい」

「そうか」

なら、いいけど。いや、決してよくはないが。

「ふむ、となるとこれは巧妙な罠ってことね」

罠。

しかも、かなり手の込んだものだ。

これほどの大掛かりな仕掛けを用意をしているということは、ぼくらがここに来るのを見越していたのだろう。

「そしてぼく達は間抜けにも引っかかってしまったわけか。このぼくとした事が、有り得ない失敗だよ」

「そう肩を落とすなよ、いーちゃん。誰にでも失敗はあるさ」

失敗は失敗でも、下手すれば命を一つや二つ失ってしまう大失敗だ。

そりゃ肩も落ちる。滑り落ちる。

「しかし真心。ぼくは自分自身の愚かなミスで自分の身だけでなく、お前さえ危険に晒してしまった。こんなの間抜けを通り越して、愚図もいいところだ。ははっ、まさしく欠陥製品だぜ」

「けどいーちゃん、落ち込んでいる暇はないぞ。次はどうするんだ

？」

「次か、次ね――――」

ぼくはすくっと顔を上げて

「あそこでぼくと真心を観察している人に聞いてみるのはどうだろうか？」

残骸の上に、気付けば人が居た。

最初からその場所にいたかのように、ひどく自然に、居た。

ぼくの視線に気付いたのか、”ブルーのコートを羽織った男”はその場から逃げるわけでもなく、不敵な笑みを浮かべて一歩前に踏み出した。

4―2

2

カツカツと革靴が地を踏む音が響く。
身長はそれ程高くない。白髪の混じった髪の毛はだらしなく伸びまくり、ブルーコートの襟を立てて俯くように素顔を隠している。
「なるほど、ブルーのコートか。こいつで間違いないな」
奇しくも唯崎の目撃情報は的を射ていたわけだ。身体の起伏からして男だろうが、まだ声すら発しないその様は不気味としかいいようがない。
何が娘を連れた親父、だよ。こいつの何処を見たら父親と勘違いするんだ。やはり殺人鬼の言葉なんて本気にするものではない。
「初めまして、少年少女諸君」
男は嗄れた濁声で言う。
「私は咎凪栂助、二児の父親だ」
「父親かよ！？」
思わず渾身の力でツッコんでしまった。男は意味がわからないような顔をしてぼくを見ている。当然だ。
……これは唯崎に謝る必要がありそうだ。あの男、大した観察眼である。
「そして『呪い名』序列第六位《咎凪》、咎凪栂助。自己紹介もこ

れで十分だろうか」

ぼくのリアクションを無視し、続けて咎凪は名乗った。えらく覇気のない風貌に、抑揚のない喋り方。細かい表情は掴めないが、頬の痩けた痩せ男、というのが目前の『呪い名』咎凪栂助の印象であった。

「ん、そちらの――――茶髪のお嬢さんは見かけない子だな。宜しければ名乗ってくれ」

「ん？　俺様は想影真心だ。いーちゃんの親友だぞ」

真心は堂々と名乗り上げる。

それに対して、咎凪は興味深そうに顔を上げた。

「ほう、想影真心？　あぁ、なるほど。巷で有名な『人類最終』か。この歳になって、ここでお目にかかれるとは」

やはりそちらの世界では既に真心の名は勝手に一人歩きしているようだ。そりゃ例の『死色の真紅』こと哀川さんや『人喰い』こと出夢くんを軽く薙払った経歴があるくらいだからな。逆に今まで無名だったのが不思議なものだ。

「そうか、私としたことが凡ミスをしてしまった。『人類最終』を車程度でひき殺そうとするなんて、蟷螂が象を倒そうとするようなもんじゃないか」

そして、何が可笑しいのか、咎凪は薄っすらと笑う。

背筋が凍るような、嫌な笑い方だ。

ぼくは目を瞠りながら、警戒を強める。

「ふん。まぁしかし」咎凪は続ける。「私の目的はあくまで君の方だからな、少年。わざわざ『人類最終』と相対する必要性はない」
「ぼくが目的？」

ぼくは語気を抑えながら、なるべく冷静に言おうとする。

「おいおい、こんな派手なトラップまで用意して、計算通りってわけか？」スクラップになった高級車を見遣る。「ぼくの命をここまで追い詰めておいて、大したご都合主義だよ」
「何、私としてはどちらでも良かったのだよ。少年が死のうと生きようと。どちらでも、ね。運良く生き残ったようなので、次のステップに進もうとしているだけだ。ただそれだけだよ、些事なことさ」

咎凪はどうでもよさそうに、下らなさそうに言う。
まるで、全てが台本通りだと言わんばかりに。

「あなたの考えている予定にぼく達を巻き込まないで欲しいね。とんだ迷惑だ」
「ん、んん？　もしかして、少年」

咎凪は面白いものでも見つけたかのように

「怒ってるのかい？」

と言った。

「ぼくが怒ってるかって？」ぼくは嘆息する。「大切な家族を奪われて、大事な親友を車で吹き飛ばされて、それでも、平静でいられるほど、ぼくはクールキャラじゃない。はっきり言って、不愉快だよ。『呪い名』だか何だか知らないけど、ぼくは今、猛烈に怒って

る」
「ふむ、意外と人間らしい側面もあるんだな、これは予知外だ」
そう言いつつも、咎凪は冷静さを崩さない。
本当に全てを見通してるかのように、ぴくりとも表情の色を変えない。
この冷静さは――――なんだ。いや、違う。この不快感は――――。
ぼくは、この感触を経験したことが、ある。
でも、一体どこで。
「ふん、しかしそういきり立つな、少年。少年を殺すことにはもう失敗している以上、私は少年を狙う理由はない。どうやら私にはまだ他人の運命は見えないようだし、操作もできないようだ。これじゃ尖離さんには遠く及ばないな」
咎凪はぶつぶつそう言いながら、木端微塵になった高級車を一瞥する。
「さて、少年。少年が私に敵意を持つのは構わないが、むしろ光栄だが、残念なことに私にはもう少年と交戦する意欲はない。いや、もう交戦できないのほうが正しいか。私は『呪い名』なんだから」
「じゃ、そんな『呪い名』がどうしてここに来たんだよ。まさか崩子ちゃんを返してくれるのか？」
真心は『呪い名』に恐れる様子もなく、はっきりと強く問う。
「それはまさかだな、『人類最終』。ここに来た理由はそうではない。私がここにいる理由。簡単にいえば、取引だ」
「取引だと？」

ぼくを殺そうとした次は取引と来た。
いい加減、苛立ちに対する我慢も限界に達しそうだが、今ここで咎凪を締め上げても、崩子ちゃんが無事に戻るとは考えにくい。むしろ、今この瞬間でさえ崩子ちゃんの命は咎凪に握られているのだろう。とすれば、軽率な行動はできない。咎凪の取引に簡単に応じるわけにもいかないけれど、それで崩子ちゃんが無事に帰ってくるなら、ぼくはやるしかない。

「その沈黙は前向きな考えの証拠と受け取って構わないかな？」
「……どうぞご自由に」

崩子ちゃんを助ける最善の策がない以上、ここは咎凪に従うべきか。
は、最善の策？
おい、今ぼくなんて言った？

「取引ってのは、つまりだな、少年」

咎凪は内緒話でもするように静かに、けれども口元は僅かに歪ませて。
ぼくの思惑をいとも簡単に突き崩す言葉を発した。

「取引ってのはつまり

玖渚機関、

玖渚機関のお嬢さん、

玖渚友を殺せば、
あのお嬢さんは返してやる」
「は？」
慮外、唐突、意表。
何故、どうして、ここで友の名前が出てくるんだ。意味が解らない。理解が追い付かない。何を言ってるんだ、この『呪い名』は。
「ちょっと待ってくれ」
ぼくの心は無様なくらい掻き乱される。今までの咎凪への怒りは瞬時に氷解し、疑惑と懸念がぼくの身体をドロリとなめる。脳みそから疑問符がどろどろと溢れ出る。
なぜ
なぜ
なぜ
あいつには『呪い名』に因縁なんてあるわけがないのに。
あいつが、そちらの世界に縁など持つはずがないのに。
ましてや、《咎凪》なんかにそんなものがあるはずも――――。
「驚かないでくれよ、少年。驚くのは後にしてくれ。因縁？　なんだそれは？　そんものないわけがないだろう？　因縁のない人などいないのだよ。全ての人間は全ての人間と少なからず関係や因縁はある。それの濃淡は問わないけどな」
咎凪は平坦な声で言う。
「それに、君はまだこの取引を承諾したわけじゃない。まだ成立過

程だ。あくまで君の採択にかかっているんだ。けど、その採択が闇口のお嬢さんの命運を決めることも忘れないで欲しい」

そう、確かに咎凪の言うとおり、まだ取引が成立したわけではない。

落ち着け、馬鹿め。取り乱したって、事態が解決するわけじゃない、何も好転しないぞ。

取引、咎凪は取引だと言った。

その取引はこうだ。

友を殺せば、崩子ちゃんを返す、と。

ありえない。まず、ありえない。次にありえない。次の次もありえない。

「認められるか」

ぼくは小さく呻く。

こんなふざけた取引、絶対に認められるわけがない。

ぼくは氾濫しそうな感情を抑えながら、疑問を投げかける。

「……何で友の名前が出てくるんだ？　あいつはそっちの世界には無縁なはずだろ」

「だから無縁、ではない。縁はある。因縁もある。ただ、玖渚友は少々難しい立場ではあるが」

「因縁なんて、玖渚友とあなたの間には、とてもじゃないがありそうに思えない、な」

「確かに、私自身に玖渚友との因縁はなかった。しかし、今はある。昔の話は嫌いなんだ、過ぎたことに意味はない」

「……そうだとしても、玖渚が狙われる理由がわからない。お前の口ぶりじゃ、どうも他に何かが絡んでそうだけど。何か裏でもあるのか」

「裏か、表か、なんて些細な問題さ。まぁ、実のところ少年が不思議に思うのも無理はない」

理由なき行動ほど、奇妙で鬱陶しいものはないからな、と咎凪は言う。

「だから、理由ならちゃんと教えるよ、少年。だから安心したまえ。うん、そちらの『人類最終』も派手に動いてくれるなよ。ああ、心配するな。あのお嬢さんなら今のところは、傷一つ付けていない。今のところは」

念を押すように言って、咎凪はその場に胡坐をかき、滔々と話し始めた。

「まずは理由からか……。ん、そうだな。まずは玖渚友の立ち位置から言ったほうがいいかな？」

「そんなものはいらん。とっとと、話してくれ。ぼくは待たされるのは嫌いなんだよ」

「ほう、そうか。随分と堪え性がないんだな。それとも、あの青色の天才がそんなに大切か？　くく、依存は楽でいいよな。おっと、そんな目で睨むなよ。ただの冗談だ。そうだな、あの娘は」

咎凪はあくまでぼくの反応を楽しむように、横目を流しながら、ぼくを見る。

「玖渚友は世界の接点だよ、暴力と政治を繋ぐね」

ぼくは、漏れ出しそうな感情を抑えて、唇を薄く噛む。

血の味が口中に染み渡る。

それを見て、咎凪はポケットから煙草を取り出し火をつけずに咥

えた。

「それに私達の敵でもある。目の上のたんこぶってやつかな。私たちの目的を遂げるにあたって、あの小娘の存在は酷く目障りだ。《死線の蒼》としての玖渚友の存在意義は、君が思う以上に面倒で厄介なのさ」

暴力と政治力。お互いに独立した世界。『殺し名』『呪い名』が支配する世界と『玖渚機関』が支配する世界。

その二つを、友が結んでいるだと？

「なら、何故、そんな提案をぼくに持ちかける？　ただの人殺ならそっちの世界の住人のあんたの方が適任じゃないのか？」

「もう住人ではないさ。実を言うと、私はもう《咎凪》からも引退しててな。今回はどうしようもない理由で、参戦しているに過ぎない。それはそうと、その質問の回答だが、いくら『呪い名』の《咎凪》といえど、流石に私も全盛期からかけ離れた老いぼれでね、今の玖渚機関を真向に相手取るには少々気後れするんだ。それに《チーム》とやらを相手にするのも面倒だ」

その点、少年は、と咎凪は値踏みするような目つきでぼくを見る。

「玖渚友とだけでなく、玖渚機関や玖渚直とも親交があるそうじゃないか。ならば、その手を使わないわけにはいくまい。世界広しといえど、玖渚の御嬢さんとあれほど仲がいいのは、君だけだろう？」

「どうだか」

「ふん。それが嘘であろうと本音であろうと、私の考えに変更はありえない。それに、少年、君は一度、玖渚友を壊しているじゃないか。ならば一度壊すのも二度壊すのは大差なかろう？」

「……」

それも踏まえて、ぼくを選んだというわけか。
くそったれめ。

「……ぼくを選んだ理由を概ね理解した。けど、《咎凪》であるあんたに出来ないことが、この欠陥製品であるぼくにできると思って？」

「ああ、できる。断言してやろう。なんだ、これも理由が必要か？ ふぅ。そうだな、君は『縁』というものをどういう風に考えている？」

「は？　何を言ってる」

「縁というのは実に不思議でね」咎凪はぼくを言葉をさも当然のように無視する。「縁には別に明確な基準は存在しないし、範囲も一定ではない。まったく知らない人間でも出身国が一緒だっただけで、それも何かの縁になるし、たまたますれ違っただけでも、同じ場所に同じ時刻、同じタイミングにすれ違ったと考えれば、これも何かの縁と考えられる。くく、屁理屈だなんて思うなよ」

それは、思わないさ、思わないけど。
そんなのは戯言だ。

「世界の裏にいる人間とも、数多ある星の中でこの地球という惑星に、同じ時代に生きていると思えば、これも立派な縁だよ。それに縁というは、一次的ではなく二次的にもなりうる。少年だって経験あるだろう？」

「ぼくは受動的な欠陥製品なものでね。そんな人間らしい出会いなんてないさ」

「そうかな。少年に覚えはなくとも、私にはあるぞ。例えば、江本智恵との出会いも葵井巫女子がきっかけだったろう？　それに紫木

一姫とも、赤色による牽引がなければ、少年との邂逅はありえなかったろう」

は、ぼくのことは全部お見通しってか。

それにぼくと玖渚とのことも知っているようだけど、一体どうやって。

ぼくの心中を察したのか、咎凪は意味深な笑みを浮かべる。

「つまりは、縁というは人の手に介錯され、勝手に拡大されてくのさ。本来ありえない邂逅もそうして現実になるのさ。それが縁というやつの面白いところだ」

咎凪は咥えてた煙草を手でくるくる回す。

「そう考えれば、私と玖渚友ももう立派な因縁関係だよ。けど因縁関係には強弱もあってね。そこは君も納得いくだろうが。私が玖渚の御嬢さんを狙うより、少年が狙ったほうが確実性が増す。縁とはそういうもんだよ」

「それで、ぼくに友を殺せというのか？」

「そうだ。でなければ、あのお嬢ちゃんが死ぬ」

だからな、と咎凪は煙草をポケットに戻した。

「この取引は少年にお願いしたいんだ。因縁というのは深いほうがいいに決まってる。それを考えれば、君に意外に適任者はいないだろうさ」

適任者。

玖渚にはぼくが適任だと？

そんな、ふざけた言葉でぼくと玖渚を結びつけるな。

「……ぼくが素直に正直に取引に応じると？」
「くくっ、アメリカみたいな反応だな。テロには屈しないってやつか。しかし、これでも私は父親だ。娘と同じ年頃の少女を手に掛けるのは心苦しい。だとすれば、少年、君に取引を飲んでもらうしかない」

二者択一。
崩子ちゃんを助けようとすれば、友が死ぬ。
友を助けようとすれば、崩子ちゃんが死ぬ。
こんな選択肢は、認められない。そう簡単に人の命を天秤にかけられるはずがない。しかも友の命か崩子ちゃんの命かなんて、選べるはずがない。
くそ、完全に咎凪に乗せられている。こんなのぼくのペースじゃない。

「考えるなよ、少年。思考なんて無駄さ。少年には選択する権利しかない。選ぶだけが、少年にできる最良の手段だ」
「……取引の内容は、それしかないのか？」
「当然だ。玖渚のお嬢様の命、あのお嬢さんの命。どちらも同じ命だ。対等な取引だろう」

どこが対等だ。そもそも崩子ちゃんはぼくの手から奪い取ったものだ。対等どころか、これは取引ですらない。
だが、そんなぼくの言葉など咎凪は聞きもしないだろう。

「……なら仕方ない」ぼくは咎凪を見据えた「あんたが引かないなら、この取引自体を白紙にするしかない。咎凪栂助、あんたを殺して、崩子ちゃんを助ける」

今のぼくなら、本気でこの男を殺せる。
ぼくでは無理だけど、こちらには『人類最終』の真心がいる。
真心なら息もさせずに、殺せるはずだ。
真心ならぼくの合図一つで、目の前の男をただの肉片にできる。
そのうえで、崩子ちゃんを助けるしかない。今ここで咎凪の取引を承諾してしまったら、もう両者を救うことは絶望的だ。ならば、可能性は低いけれど、その道を選ぶほかにない。

「意外と単純だな、少年。真っ直ぐなのは嫌いじゃないがね」

咎凪は立ち上がった。

「そちらがそういう姿勢でいくのなら、私も強硬手段を取らせてもらう」

では、戦争だな。と咎凪は言った。
咎凪の言葉にぼくと真心は必然、警戒心を上昇させ、目の前の『呪い名』を睨み付ける。
それと同時に、ぼくは場違いにも零崎と出夢くんの言葉を思い出していた。
ぼくより数多くの修羅場を潜り抜けて、自らも『殺し名』を名乗るプロフェッショナルな奴らが、『呪い名』についてなんと言っていたのか。
ぼくはその言葉をこれから生涯忘れることはないだろう。
忘れるどころか、一生脳裏に焼き付いて離れないに違いない。

「くく、後悔するなら今のうちにしておけ」

そう呟いて、咎凪栂助はもう一度、不敵に笑う。
尋常じゃない人の死に関わってきたであろうその破顔を、ぼくと

真心に向ける。
深く、深く、冷たく、冷たく。
まるで、既定事項をたんたんとこなすような無気力さも含めて。
『呪い名』序列第六位《咎凪党》、咎凪栂助。
世にも恐ろしい、恐怖や劣悪を擬人化したような人間。
そんな男は、理由もなく、意味もなく、根拠もなく、笑う。
咎凪は、ただ笑う。

4―3

3

「なぁ、おにーさんよ。実はさ、折り入って話があんだよ」
「なんだい？　藪から棒に？」
「何、深い問題でもないんだが、前に妹が――――理澄が野垂れ死んでるところをおにーさんが助けてくれたじゃんか？」
「それを正確に言うなら、理澄ちゃんは死んではいなかったんだけどね。うん、それで？」
「その礼をまだしてねーなーと思ってよ」
「ああ？　そうだっけ。いや、違うな。その礼なら確か、以前に狐さんがご飯を驕ってくれたことでチャラになったんじゃなかったけ？」
「そうらしいけどよ、僕個人としては、どうも釈然としないんだよ」
「なんでさ？」
「んー、それが僕にもわかんないんだけどさ。何かおにーさんにアドバンテージがあるみたいじゃんか」
「ふぅん、出夢くんって意外と義理深いんだね」
「まぁ、なんとでも思ってくれ。だから、さっきからその礼について色々考えてるんだけどよぉ」
「いいよ、そんなこと気にしなくても。第一、こうして家に泊めてもらって、十三階段の情報も教えてもらってるわけだしね」
「おにーさんはそれで満足かもしれないが、僕は満足できねぇんだよ。やっぱ、妹の借りは兄が返すものだろ？」
「んー、それについてはよくわからないってのが本音だけど。まぁでもそこまで言うなら、ぼくとしても何か考えた方がいいのかな？」
「ん、その必要はないぜ。これは僕の問題だしさ。もとい僕たち兄

妹の問題だし。さて、んー、どうしたもんかな」
「助けたって言っても別に大したことはしてないしさ、そんなに悩む必要もない気がするけど」
「そう？　ああ、じゃあこれでいいか」
「ん？　どうしたんだい、出夢くん、って、おい」
「おりゃ」
「う、うお、ぐ、うぅ、な、ぅ、うお。って、うぐ、な、何、するんだよ、いきなり！」
「何って、キスだけど？」
「しれっと言うなよ！　なんだ、もしかしてキスがぼくへのお礼っていうわけか！？」
「そうだが、なんだ、キスじゃおにーさん、不満か？」
「不満もなにも、それじゃお礼じゃなくて嫌がらせだろ！　ぼくは同性にキスされて喜ぶような属性は持っていないぞ」
「同性って言ったって、僕の体は女のそれだぜ？　ん？　あ、なるほどなるほど、おにーさんの言いたいことがよーくわかった」
「……一応、義理で聞いておくよ。何がわかったんだい？」
「理澄みたいなひょろい身体じゃ物足りないんだろ？　ぎゃはは、けどそこは安心していいぜ、僕ってばテクニシャンだからよ、そこは技で経験でカバーしてやるよ」
「ぼくは断じてそこに異論を唱えたわけじゃない。それにその話はやけにリアリティがあるから恐ろしいな」
「ああ、キスなら毎日、人識のやつとやってたからな」
「……何やら、物語をひっくり返すような重大発言を聞いたような気がするけど、この時系列じゃ出夢くんと零崎の関係はオープンになってないから、深くは突っ込まないよ」
「深くは突っ込まないって、お兄さんもやる気満々じゃねぇか」
「……もしかして、出夢くん、君って馬鹿なのか？」
「さぁな。けど頭を使う情報収集も理澄の担当だったし、もしかしたらそうかもしんねぇ」

「頼むから春日井さんみたいなキャラはやめてくれ。あの手の人物は一人で十分だ」
「誰だ、そいつ？　まぁいいや。んじゃ真面目な話」
「この流れで真面目な話ね。それじゃ出夢くん、とりあえずぼくに覆いかぶさるようなその姿勢をまずは直してくれ」
「これくらい気にすんなよ、男だろ。大事な話は目と目を見て話すんもんだぜ」
「そう言いつつ、物凄い力で押さえつけるなよ」
「いやさ、これからおにーさんは十三階段や狐さんと殺りあうわけじゃん？」
「無視か。……まぁできれば、殺すだの死ぬだのの物騒な話は避けたいけどね」
「いや、それは絶対に無理だ。《匂宮》であるこの僕が断言してやる。おにーさんはこれから先、無傷では物語を終えることはできない。何故だかわかるか？」
「……さぁね。ぼくが弱いからか？」
「それも確かに理由の一つだが、さっきも言ったことだけど。一番大きいのは、十三階段に『呪い名』がいることなんだよ」
「確か、《時宮》と《奇野》だっけ？」
「そう、その二人がいる限り、おにーさんは無事じゃすまないね」
「随分、その二人を買っているみたいだね。『呪い名』の連中が魑魅魍魎の非戦闘集団とはいえ、そんなに驚異的な存在なのかい？」
「この二人に限ったことじゃないんだけどな。第一、僕ら『殺し名』の中じゃ、というか《匂宮》の中じゃ一つの暗黙の了解があってな。『呪い名』を見かけたら、まず逃げろ。ただし《時宮》は逃げてでも殺せ、っつうのがあるんだよ」
「逃げてでも殺せって、無茶苦茶だな」
「無茶苦茶なのは『呪い名』の連中だ。いいか、おにーさん。たぶん、というか絶対。これから先、おにーさんは『呪い名』の連中とぶつかるだろうけど、もし衝突した場合、まぁ当然一番いいのは衝

突しないことだが。『呪い名』を見かけたら、まずは最悪を想定しろ」
「最悪を？」
「ああ、最悪を想定し、想定外を想定しろ。それが『呪い名』を相手取るにあたっての基本だよ」
「なるほどね、心に留めておくよ」
「なりゃ、いい。精々頑張ってくれ」
「うん、そうする。で、出夢くん。どうしてキスから、その話に？」
「ああ、いや。僕の予想じゃ、おにーさんは次の戦いで死ぬだろうかさ、死んじゃう前にキスしておこうと思って」
「……大した言い草だね。まぁさっきのアドバイス通り頑張るさ。さて、そろそろぼくの上から退いてくれない？」
「ん、まぁ焦るなよ、おにーさん。夜は長いんだぜ？　じっくりじっとり、楽しもうぜ」

以上、回想という名の走馬灯終了。
場面は戻って、例の駐車場である。
ちなみに、ぼくはあの後、しきりにキスを迫る出夢くんを一晩中相手していたわけなんだが。
まぁそんな話はどうでもいい。
ぼくは目の前の男を見据える。

「ふふ、そう怖い顔で睨まないで欲しいな、『人類最終』。その赤い髪をさらに血で染めるのは流石の私も気が引ける」
「俺様の橙は何物にも染まらないぞ」
「ん、橙？　なるほど。さすが、赤色の娘だけある。酔狂な言も親譲りなわけだな」

咎凪は顔を上げて、ぼくと真心を見た。
真心も臨戦態勢を整える。
「くく、相手は『人類最終』、まともにやったら私に勝ち目はない。しかし、少年。君達には重大な重大な致命的な弱点がある。それを利用すれば、この老いぼれでさえ、五分に相対することも可能だ」
あくまで悠然と、戦闘態勢の真心を前にしても咎凪は余裕の表情を崩さない。「例えばだな、少年」咎凪はポケットから黒い四角形の小型の箱を取り出し、そして
「こんな裏技がある」
言うと、後ろの瓦礫の山を構成していた高級車の一部が、突如、爆発した。
派手な炸裂音に、ぼくは反射的に爆音の音源である残骸の山に目を向ける。それに連動するように、連続して辺りの残骸が、それがトリガーであったかのように、次々と弾け飛ぶ。
「う」
ぼくは思わず身を屈めた。
手榴弾か何かかと推測したが、咎凪が何かを放る動作はなかった。だとすると。
「まさか、私が仕掛けたトラップがあの程度だったと思うわけないよな、少年？」
やはり爆弾か。しかもあらかじめ車に仕掛けておいたのだろう。

「くくく」

咎凪は口角を僅かに歪ませる嫌味な笑みを浮かべて、小箱を握りしめる。

なるほど、二段構えってところか。よく考えてみれば、あの車での特攻は確実性に欠けすぎている。ぼくの生死は問わないような言い方だったけれど、つくづく用意周到だ。

「けど、この程度でぼくと真心があんたを――――」

言おうとして、爆音に言葉の尾が強引に阻害される。

激しい揺れ。それと轟音。

鼓膜に弾丸をぶち込んだような轟音と震動で、ぼくは思わず膝をついた。

地震か？

いや、違う。こんなタイミングで自然災害が起こる確率なんて、限りなく零だ。

「少年は『呪い名』がどういう組織かまだわかっていないようだから、一つ教えといてあげよう」

膝をついているぼくに、咎凪はゆうゆうと声をかける。

「『呪い名』は非戦闘集団だ。私と戦おうということ自体、それは見当外れな考えだよ」

続いて、咎凪は黒い小箱をぐっと握りしめた。それに反応して、再びビル全体が激しく揺れる。

しかも今度は先ほどよりも強い振動で。激しく地面が揺らぐ。

「う、うわ」

情けない声がもれる。

半端じゃない揺れがぼくの身体だけでなく、脳みそまでも襲う。

激震に比例するように、爆ぜた車から炎が立ち上がった。さらに花火を連続して打ち上げたような、低く重い轟音がぼくの耳を劈(つんざ)く。

なんだ、こいつ。

何をした。

一体、何をした――――――？

「少年、『殺し名』と『呪い名』の決定的な違いはなんだと思う？」

爆音の狭間に、咎凪の声が響く。

「それはな、無差別か無原則かどうかだ」

その言葉の意味を考える暇などなく、辺りは発破し、炸裂し、破裂し。

ゴジラでも現れたかのような地響きが、駐車場を揺るがす。この駐車場だけじゃない、このビル全体が大きく揺れている。

天井は崩れそうなまでに激しく揺れ、腹の底を震わせるような低い轟が、生き物のように空間を支配する。

地面は割け、壁には痛々しい亀裂が入り、天井からはパイプやら何やらが落下する。

そして、不規則な揺れも音も、とある一つの可能性へと収斂していく。

それは、まさしく。

それは、まさしく。

このビルを丸ごと、吹き飛ばそうとしているように。

このビルを丸めて、破棄(はきと)飛ばそうとしているように。

まさか――――！

「くく」

咎凪がいつの間にか、高級車の残骸から離れて、入り口付近に向かっていることに気付く。

「少年、これだけは言っておく」

咎凪は子供にでも、自慢の娘にでも知恵を授けるように、ゆっくりと、けれどあの嫌な笑みは消さずに

「俺は『呪い名』だ。あまり『呪い名』を侮るなよ」

爆音の隙間を縫うように、咎凪の言葉がぼくの脳髄に響く。

やはり――――！

最初の爆音で気付くべきだった。否、相手が『呪い名』だと判明した瞬間から覚悟しておくべきだった。

明らかに、ここから逃げるには相応しくない、爆発のスケール。このビルが揺れ、崩れそうなほどの、いや、これは比喩でもなんでもない、本当に建物を倒壊させるほどの激しい衝撃と震顫。

違う、違っている。甘い。甘すぎる。その程度で、この程度では

「では、チェックメイトだ」

咎凪は手に握っていた黒い小箱を落としたかと思うと、右足で踏み潰す。ぐしゃぐしゃと、まるで咀嚼するかのように何度も何度も踏み潰す。さながら、弱い生物を蹂躙するように。

「それじゃ、少年――――」

踏み潰し終えた咎凪はぼく達に背を向けて
「取引は成立したからね。ではさようならだ。また会おう、”私の救世主”」
言って、咎凪が去ろうとして

真心が飛んだ。
爆風をも利用したかのような、凄まじい大ジャンプ。一歩で一瞬で、咎凪の背を捉える。しかし、それでも咎凪は振り返らない。あの『人類最終』を堂々と無視して、入り口へと向かう。
「なめてんじゃねぇぞ！」
真心が叫ぶ。
それでも咎凪は反応しない。真心は拳を振りかぶり
「そら、それが弱点だ、少年少女」
真心の拳が咎凪を捉えようとした瞬間、今度もまた何かが爆発した。加えて、ぼくの両脇の壁に披裂が入り吹っ飛んだ。天井も尋常じゃないほど、ぐらぐらと揺れ、そこら中に巨大なコンクリートの塊が落下する。

「っ！」
「いーちゃんっ！」

流石の轟音に、真心も振り返る。
いや、これも違う。これもぼくは間違っている。完全に読み違えている。
真心なら例え、背後で原子力潜水艦が迫っていようと、振り向いて敵を見逃すような愚行は犯さない。
ならば、何故なんて、理由を考える必要など絶無で、すなわち。

「ぼくが弱点ってわけね――――！」

両手で頭を庇いながら、崩れる天井のパイプなどをさける。
くそ。無力ならまだしも、足手まといになるなんて、ぼくってやつは本当に。
考えれば、すぐわかりそうだ。ぼく一人で何とかできるなら、真心の助力なんて必要なかったわけだし。完全に忘れていた。完璧に失念していた。ぼくは馬鹿か？

しかし、悩んでいる時間はない。今の爆音は先ほどの高級車が爆ぜた時とは規模がまるで違う。四方八方の壁が吹き飛んでいる。あの震動からすると、このビルに駐車されていた高級車にだけでなく、上階にも、おそらくこのビル全体に爆弾が仕掛けられているのだろう。

「仕掛けられているのだろう、なんて言ってる場合じゃないだろ、これは！」

あの『呪い名』は、あの咎凪は、自らの逃走ルートを確保するためだけに、これほど大規模な。くそ。何言ってんだ。いい加減、認

めろ、ぼく。こんな状況で甘言なんて期待するな。
　咎凪は、間違いなく、このビルを倒壊させるつもり、否、すでに倒壊は始まっている。

「嘘だろっ！」

　くそ、そんな馬鹿げたことが、この日本のしかも京都で起きてたまるか！　ハリウッド映画手はあるまいし！
　しかし、ぼくの思いを裏から突き崩しように爆発は連鎖する。

「いーちゃん、気をつけろっ！」

　見ると、すでに咎凪の姿はない。真心は再び飛翔に近い大ジャンプでぼくの元に近寄る。

「崩れるぞ、いーちゃんっ！」
「わかってるっ！くそ、ぼくはブルースウィルスなんかじゃないぞ」

　崩れる天井。巻き上がる粉塵。まるでハリウッド映画に飛び込んだ錯覚が起こるが、ここはハリウッドではなく日本の古都で、これはフィクションではなく現実だ。

　真心の力を借りて、一瞬先に脱出に成功し、急いでビルから離れる。
　振り向く間もなく走り、走りまくる。そして止まる。
　妙に息が切れた。それほどの距離を走ったわけではないのに。心臓の鼓動がやかましい。
　背中から崩壊の音がした。ぼくは慌てて振り返る。
　ビルは予想通り、まるでジェンガのように崩れていった。
　よく出来たＣＧだと思いたくなるような、崩壊っぷりだった。

周りにはビルから間一髪で逃げ出した人と、ただの通行人が入り混じり、すでに大混乱になっている。
けれど、不思議とぼくは静かにそれを見ていた。
ビルが崩れる音も、野次馬たちの悲鳴も、心配そうにぼくに話しかける真心の声も、何も何も聞こえなかった。轟音の連続でいかれてしまったぼくの耳には、もう何も聞こえない。
ぼくは、ただ見つめていた。
人も瓦礫も、見境なくただただ崩れていった。
ビルは間もなく崩壊した。
人も何かも巻き込んで崩落した。
崩壊、決壊、崩落。
破壊、損壊、倒壊、全壊。
粉砕、撃砕、破砕。
人も、
瓦礫も、
有機物も、
無機物も、
全て、凡て、総て

なくなった。

4－3（後書き）

戦争だと言いつつ、敵前逃亡の咎凪さん。内容と展開が突飛すぎな気もしますが、あまりぐだぐだやるのもどうかと思ったんで、強行突破です。

誤字脱字があればお願いします。

4―4（前書き）

ようやく《あの人》を出せました。

4―4

4

強さを分類し、強さを掌握し、強さを段階的にわけた場合、ぼくは間違いなく、いくら贔屓目に見ても、最弱にカテゴライズされるだろう。他人が言うならともかくぼく本人が言うのだからこれはまず間違っていない。

最小で矮小な最弱。

それがぼくの矜持だ。

とは言え、しかしいくら最弱と揶揄しようと、それはあくまで机上での話であるわけで、世界はうまく均等が取れて、釣り合っているのだから、極端な強弱は存在しない。つまり最弱が常に負けっぱなしだとは限らない。

いくら最強と言えど、いくら最弱と言えど、勝つ時もあれば負けるときもある。強い者が必ず勝つとは限らないし、弱い者が負けるとも限らない。勝者が強者、敗者が弱者とはいかないのだ。そんなに勝負自体が簡単ではないし、そうであっては面白くない。

では、人類最強はどうなのか？　強者の頂点に立つ、最強に敗北はありえるのか。最強が最強たる由縁は語るまでもないが、あの赤い請負人、哀川潤にも敗北は存在するのか。

「おいおい、いーちゃん。ちぃと最強の意味を取り間違えてるぜ」

以前、哀川さんと遊んだ時、人類最強の彼女はこう話した。

「そもそも勝ち負けに拘ってんのは二流だけさ。勝敗に一喜一憂する奴なんか一流にはなれねぇ。確かに勝負事なんてのは究極的に言

っちまえば、勝つか負けるかだが、プロレベルになってくるとな、そう簡単にはいかないんだ」

哀川さんは滅多に見せない真剣な眼差しで

「勝負ってのは、正々堂々ジャン拳ポンとはいかない。マジもんのバトルになりゃルールもなけりゃ審判も当然いないし、そもそも公平不公平なんて乳臭い決まりはない。だとするとどうなる？　そうだな、いーちゃん、お前野球は好きか？　まぁこの際、好き嫌いは関係ねぇが。ああ、そうだよ、ん、ちげぇそれはゲートボールだ。何で元気溌剌な高校生が日曜の公園でのんびり玉転がしてなきゃいけないんだ。ふん、まぁいい、とにかく野球だ野球。こいつはな九回までに多くの点数を獲得したチームが勝つってルールなんだが、よく考えてみろ。どうしてこの野球っつう競技はこうも成り立ってんのか。はん、こんなのは考えるまでもない。ずばり”ルール”があるからだ。公平で正常なルールがあるからこそ、野球という勝負事は成り立ってる。つまりだ、勝ち負けのある勝負事ってのは必ず、ルールっていう枷が存在する。じゃなけりゃ無法地帯もいいとこだろ、根底つうか根幹に絶対にして不変のお約束があっての勝負事なわけだ」

「話は長くなっちまったが」と哀川さんは一息入れ

「要するにあたし達の世界に勝つ負けるの境界線は存在しないんだ。どこまで行けば勝利で何をすれば敗北なのか、誰一人わかっちゃいない。血で血を洗う殺し合いに、乳臭えルールなんてあるわきゃねぇだろ。だからこそ勝利云々で最強を決めるのは検討違いってわけ」

ぼくはプロでもなんでもないから、その本質は判らないけれど、哀川さんの言わんとしていることはわかる。それと同時に、当然の

疑問も湧き上がる。
じゃあ一体どうすれば最強になれるんですかね？
「んだよ。もしかしていーちゃん、最強に興味あんのかよ？」
いいえ、まさか。ただの興味本位です。
「あー、お前の好奇心ってさ、たまにベクトルが狂うよな。重要なことには結構無関心なくせに、どうでもいい些事には首を突っ込みたがる。まあ、それってあたしから言わせりゃ割とすげーことだと思うぜ。みんなは右見てるのに、お前だけは左を見てる。いや、違うな。お前の場合はみんな右見てんのに、一人だけ目をつぶってるような感じか」
褒められてる気はあまりしませんね。
「褒めてるってより、呆れてるって感じだからな。で、さっきの質問か。んー、そうだな。まずいーちゃんの誤解を解くところから始めなきゃいけねーか。んーっと、あたしのこの『人類最強』って売りはさ、後天的じゃなくて先天的なんだよ」
先天的とは？　ぼくは尋ねた。
「くくく、いいかいーちゃん。例えばな、お前のその『戯言遣い』なんて大層なネーミングはいつ、誰に付けられたもんだ？」
名付けた本人は霞丘道司ことみーちゃんだが、いつからとなると思い出せない。
「ま、詳しい説明はいらん。要はお前のその『戯言遣い』っつうチ

ャーミングな名前は後から、後天的に付けられたんだってのが話のキーポイントだ。流石のお前も、この世に命を授かった瞬間から『戯言遣い』だったわけじゃあるまい」

当たり前だ。ぼくにだって幼少期と称せた時代がある。

「だろう？　大抵の連中はお前と同じさ。賞賛すべき、または卑下すべき結果を残したり、自分特有のスキルを身につけたりと、まぁその由来こそ様々だが、結局そういうことがあったその瞬間に、こういう称号は与えられんだ」

なるほど、それで後天的、ね。得心がいった。

「だけど、あたし違う」哀川さんは鋭い目つきを一層強くして「あたしは、生まれた瞬間、この世で初めて産声を上げたその瞬間から――――」

「最強、なんだよ」

……。

「おおっと、んだよ、その『全線車両遅延中、しかし原因は運転手の寝坊っ』みたいな表情はよぉ」

ふてくされながら哀川さんは

「別にギャグや冗談で言ってる訳じゃねぇぞ。こりゃ、単なる事実だ。あたしは生まれた瞬間から最強だった、それだけさ。だからあたしにとって、最強とは決して無敗のことじゃない。まぁけどカッコ良くそうは言っても、当然、幼児だったあたしが今みたく戦車を

軽く捻りつぶせるかというとそんなはずはない」

哀川さん、一人で戦車に立ち向かえるのか。やはり規格外なお方だ。

というか、それって先に名乗ったもん勝ちみたいな屁理屈のような気もする。

「ボコボコに、それこそ死ぬ寸前まで追い詰められたこともあった。けどあたしはそれを失敗とは思うが敗北とは思わない」

ぼくは首を傾げながら聞く。

「言ったろ。勝敗にはルールが必需品なんだ。ルールなしじゃ勝ち負けは決まらない。ならどうやって勝った負けたを決めるのか。そりゃ簡単だ、てめぇのてめぇ自身でルールを作ってやればいい。ん で、あたしが自ら課したルールが『人類最強』、ナポレオン風に言えば我が輩のルールに敗北の二文字はない、だよ。つまり、あたしが最強である理由なんて存在しない。最強なもんは最強なんだよ」

何とも豪快で傲慢な辞書だが、しかし持ち主が哀川さんともなると頷ける。

「けど、実を言うとな、過去にはあたしが敗北したって思うような場面もいくつかあった。この前だって、六何我樹丸っつう爺に負けちまったし、あたしがガキの頃だったら、ぷに子っていうメイドロボにコテンパンにされたしな」

爺にメイドロボって。

哀川さんは普段、何と戦っているのだろう。

ふん、と鼻を鳴らす哀川さん。「けど、そうは言ってもよぉ」

「あたしは何だかかんだ言って、負けるってことには割と平気なんだよな。気にならないって言ったら嘘になるんだろうけど。あたしだって負ければ悔しいし、リベンジしたいと思う」

いつかのお前に唆されたのだって、あたしの気まぐれじゃないんだぜ？　と哀川さんは続ける。

「だから、別に敗北についてどうこう議論するつもりはねーさ。哀川潤が敗北したって思いたい奴がいれば、勝手に思ってりゃいいさ。そんなの他人の自由だ。けどあたしはそれを負けとは思わない。それにあたしにとっちゃ敗北もある意味、勝利なんだよ」

よくわからないけど、だいぶ哀川さんが面倒そうにしているので、判ったふりをしておく。意外と面倒くさがりなお人である。

「ま、どうカッコ良くキメたところで、これがあたしだけのルールである以上、誰も認めてはくれねぇだろうけどな。それにこのルールを何も誰かに押しつけようなんて思っちゃいない。あたしは過大評価こそするが、何もあたしのようになれとは言わないさ」

と、最後は豪快に笑った。

『人類最強』のルールか。ぼくにはその細かな内容こそ理解できそうもない、きっとぼくの想像を一足飛びで越えていくのだろう。

それはぼくには出来ないレベルだ。あらゆる敵に負けずに勝ち続けるのは、ぼくには不可能だ。

ならぼくのルールとはなんだろう。

勝つだの負けるだの、如何に自分の了見が狭量であるかを知ったぼくだが、されとて己の身分はしっかり寸分なく弁えている。ぼく

は矮小で極小で、かませ狗だ。無理のものは無理、無茶は無茶。
それが自分で理解できているのが幸いか。いや災厄か。
自己防衛ならぬ自己陶酔も甚だしい。

「まぁ戯言だけどさ」

ぼくは未だに笑えなかった。

5

時は時系列へと引き戻される。

ビル倒壊後、ぼくと真心は騒ぎが大きくなる前に退散した。勿論、この期に及んで騒ぎが大きくなんてのはただの戯言で、すでに警察や野次馬が崩れたビル周囲を囲んでおり、無事帰宅するのも骨が折れた。

帰宅後、まず最初に沙咲さんから連絡があった。例の男の調査には未だに進展がないのと、これからは府警の刑事はビル倒壊事件の方へ優先に駆り出されるから、しばらくは調査も捜査も行えないとのことだ。当然ながら、ぼくはただ相槌を入れるだけで、ビル倒壊には無関係を装った。鋭い沙咲さんは、何かしらぼくの異変を察知したようだけど、まぁいい。

死者も出た。

平日の昼間という時間帯が最悪だった。

無気力ながら電源を入れたテレビ画面には、テロによる犯行か、などのテロップが出ており、チャンネルを変えれば、先ほどまでぼくと真心がいたビルの現場が映し出されてた。瓦礫に埋まる人や、

急いで救急車で運ばれていく怪我人、警察、消防隊員は勿論、見たこともない制服を着た外国人までいた。
現場を実情を伝えるアナウンサーが言うには、死亡を確認された人物は数十人に上るらしく、未だに犯人は不明。テロかどうかも不分明であり、ただただ混乱している人間の姿だけが、電波に乗せられぼくの視神経に届いた。
多くの人が死んだ。
さらにその犠牲者のほとんどがぼくとはまるで関係のない人間、他人ときた。
見知らぬ人間が死ぬ。それ自体は大して珍しくもなければ、むしろそれは日常茶飯事に起きる。
ぼくはあまりテレビを見ないのだけれど、それでもたまにニュース番組でも見ようというなら、どの局も挙って凶悪殺人事件だとか災害だとかを取り上げ、その度にその犠牲者の名が晒され、何人死んだやら何人死んだやら、絶え間なく放送され続けている。
今日のホテル崩落事件も、災害やらテロやらで処理され、多くの犠牲者が弔われるのだろう。家族や遺族は嘆き悲しみ、下手すれば自殺する者も出るかもしれない。
京都府警はこの残虐な事件をどう捉えるのだろう。いや、きっとこれは京都府警の管轄から大きく飛び越えているだろうから、警視庁、もしかしたら国家レベルの犯罪として扱われるだろう。
十中八九、災害ではなく人為的な崩壊なのだから尚更だ。
そしてぼくはその犯人を知っている。
犯人と対峙している。
『呪い名』の《咎凪党》、咎凪栂助。
これは考えを改める必要がある。大胆に思い直す必要がある。

『呪い名』
『呪い名』

『呪い名』

これほどふざけた連中だとは思わなかった。
ここまで行き過ぎた連中とは思わなかった。
なるほど、ぼくは何も知らなかったみたいだ。何も知らないで、首を挟んでいたようだ。

無知は怖い。そのせいで、多くの人間が死んだ。ぼくが策もなく突っ込んだせいで、無関係な市民が犠牲になった。

「らしくないですわね、お友達（ディアフレンド）」

夜、真心やバイト帰りのみいこさんが眠りに就いたとき、小唄さんが言った。

「今までの貴方ならそのような気持ちにはならなかった。もう少し冷静な男だと思っていましたけど」

小唄さんはさっきまで診療所にはいなかったはずだが、いつの間にか、ぼくの部屋の戸を静かに閉め、そこへ凭れている。そんな小唄さんを見ながらぼくは

「……ぼくは自分では冷静なつもりですけどね」

と、無意味に強がってみた。

「流石のぼくもこんな戦争みたいな事件に巻き込まれるとは思ってませんでしたからね。それでいて冷静に居られるほど図太くありませんよ」
「いえ、そういう意味ではありませんわ、お友達（ディアフレンド）」

小唄さんは即否定した。「私が言いたいのはそういうことではありません」

「では、どういう意味で？」

ぼくは少し意地の悪い聞き方をしてしまった。

どうやらぼくはだいぶ参っているようだ。

小唄さんはぼくを静かに見つめる。

「自分のことは自分が一番よくわかるといいますが」小唄さんは含みのある言い方で「貴方の場合は、他人以上に自分がわかっていないみたいですね」

ぼくは黙る。黙って小唄さんの言葉を待つ。

「つまり私が言いたいのは、以前の貴方なら何の策略も奇策も持たずに戦場に赴くなんてことはなかったんじゃありませんか？　ということです」

ぼくは一瞬、小唄さんの云わんことがわからなかった。

「貴方が手ぶらで戦いに臨むなど、実に貴方らしくない。いくら『人類最終』が味方だからとはいえ、貴方らしからぬ行動です」

ぼくらしからぬ行動。ぼくはただただ馬鹿みたいに反芻する。

「無謀とでも言い換えられます。いくら貴方が『呪い名』に疎いとはいえ、今までの貴方なら最善とまでいきませんが、それなりの策を弄したはずでしょう。それなのに貴方は何も考えずに、『闇口』

の娘を奪われた怒りに任せて行動した、ひたすら何も考えずに。これではまるで――――」

小唄さんは肩を竦めて

「――――哀川潤、そのものですわ、お友達（ディアフレンド）」

ぼくが、哀川さんそのもの？

意味がわからず、ぼくは間抜けにも黙るしかない。

「貴方は無意識でしょうけどね。しかし貴方と哀川潤は幾度となく共闘している。そしておそらく、貴方は望んで哀川潤に従事し、言われるがままに戦ってきたのでしょう」

「……」

「しかし貴方がいくら哀川潤と行動を共にしようが、その近くで戦おうが、貴方は貴方です。もし哀川潤のようになりたいと思うなら、悪いことは言いません。お止めなさい。哀川潤は特別のさらに特級の化け物です。貴方ごときが彼女の真似などできません」

いやいや。

確かに、ぼくは哀川さんに色々と、そりゃもうかなり多種多様に渡って様々なことをやらされたけど。それで、ぼくが哀川さんを真似しようとしてるって。

そんな事があるわけ――――。

「自覚してないようですね。しかしこの現象は貴方だけの症状というわけでもないのですよ」

ぼくに構わず小唄さんは話を続ける。

「確か貴方は『無為式』などと言われているんでしたっけ？　でしたら、それと同じです」
「同じ、とは……？」
「特性、とでも言いますわね。つまり哀川潤は貴方とは真逆の特性がある。言うなれば『朱染律』。哀川潤は否応なく周りの人間に”ある影響”を及ぼす」

哀川――――潤。最強の請負人。赤き征裁。朱染律。

「哀川潤は知っての通り『人類最強』。それは誰もが知る事実ですわ。しかしそれはあくまで哀川潤だからこそ成し遂げられる荒業。いや神業とでも換言できます」
「そりゃそうでしょうね……」

哀川さんなら神を殺せと言われても、平然とやってのけるだろう。

「故に哀川潤の周りの人間は妙な錯覚に陥る。それが到底不可能な願いだとしても、哀川潤という存在がそれを誤認させてしまう」小唄さんは目を細めながら「そうすることにより貴方のような人達は、哀川潤に魅せられてしまうんですわ、お友達（ディアフレンド）」

魅せられる。
魅了、魅惑、魅入られる。　哀川潤に魅せられる。
ぼくが哀川さんに魅せられてる？

「えぇ。けれどそれは魅了というよりは、むしろ憧れの念に近い」小唄さんは続けて「むしろ一種の畏敬の念ですかね。哀川潤に対して貴方は少しばかり情緒的すぎる」

「しかしですね」ぼくは知らず知らずに反論を試みる。

「いくらぼくでもそのくらいの分別はつきますよ。哀川さんが雲の上の存在であることぐらい」
「だから無意識なのでしょう。朱に交われば何とやらです」
小唄さんは上手く濁すように答える。だってぼくとしても、自覚があるわけじゃない。無意識、というより無心だ。
「だからと言って貴方はこれを恥じる必要なんてありませんわ、お友達（アフレンド）。強さへの憧憬や畏敬はごく自然な感情ですから。……それに、貴方みたいな愚か者と会うのは私も初めてではありませんし」
「それはつまり、えーっと『朱染律』でしたっけ？　哀川さんに影響を受けた人物がぼくの他にもいるってことですか？」
「ええ、『殺し名』『呪い名』から一般人に致まで哀川潤に魅せられた人間は数多く存在しています。貴方は知らないかもしれませんが、《二十人目の地獄》と呼ばれる男も、《奏でる悪霊》と恐れられる男も哀川潤によって見初められています。貴方もその内の一人ですわ、お友達（ディアフレンド）」

《朱染律》
朱に染めて律する。
言われてみれば、その通りだ、とぼくは思う。ぼくが哀川さんと友達でいたいと思ったのも、哀川さんに側にいたいと思ったのも、ぼくが哀川潤という大きすぎる存在に見蕩れていたからなのだ。
「《朱染律》を受けた人間は全て自分自身を拡大解釈してしまう。哀川潤に出来るなら、自分にもできると。または自分もできるようになりたいと。まるでスポーツ観戦している少年のように、ああなりたい、こうなりたい、と誤認させられてしまうのです」

なるほど。
ぼくは無意識で周りの人間を不安にさせる《無為式》
哀川さんは無意識で周りの人間を不遜にさせる《朱染律》

ふむ。
案外そうなのかもしれない。
ぼくは段々と納得してきた。

「お分かりいただけましたか？」

小唄さんの言葉を受けて、ぼくは天井を仰ぐ。
ああ、そうか。なるほど。合点がいった。
確かに。
確かに、これは。
これは、認めるしかない。
最近のぼくはおかしかった。狂っていたとも言える。　なんと言っても、先月の『死吹』の一件からだ。
ぼくらしくもない、とんだお粗末な展開。
そして今日まで。”歪な男”との邂逅、病院坂の登場、そして咎凪との戦闘。
これは、いやこれまでは、どうもぼくの本分とは言えない事ばかりだ。

ぼくらしくない。
ぼく風味ではない。　これは、これは。
ああ、なるほど。

これは確かに、赤色だ。あの真っ赤な人類最強だけが許される専売特許だ。

豪快で痛快で、無茶で無謀で、最高で最強で。
哀川潤が最強ゆえに成し遂げられる神業。

哀川潤なら”歪な男”との邂逅も気に留めないだろう。
哀川潤なら出来ないことがあればすぐさま身内に頼るだろう。
哀川潤なら無策で敵の罠に飛び込むだろう。

こうしてみると、ぼくの行動は哀川さんに似通っている。いやぼくが哀川さんを模倣しているだけか。
しかし、それも模倣以下。
物真似レベル。
実にクオリティが低い。

だけど、それも仕方がない。何せ哀川潤は人類最強。完璧に模倣するなど不可能。
それが例え、名前のない彼女ですら不可能。

それが哀川潤。人類最強。

戯言遣いが、欠陥製品が、出来るわけがない。奇跡でも起きなければ無理だ。
否、ぼくが哀川さんを真似しようしたこと自体が、奇天烈なミラクルか。

なら、どうする。

戯言遣いは人類最強にはなれない。
欠陥製品は赤い請負人にはなれない。

じゃあ、ぼくなりにやるしかない。今までも、そうだったはずだ。

ぼくは、それでも渡り合ってきた。
傍観者は傍観者なりの戦い方がある。
欠陥製品には欠陥製品の意地がある。
戯言遣いには戯言遣いの強さがある。
ならぼくがすべき事とは。
咎凪はぼくと取引をした。友を殺せば崩子ちゃんは助かると。二者択一の選択をぼくに迫った。このぼくに、この欠陥製品に、選択を迫ったのだ。
それがどれだけくだらないことなのか、どれだけ愚かなことなのか。どうやらぼくはそれを咎凪に教えてやらなければならないようだ。
「あれ」
ふと、ぼくは小唄さんがいつの間にか居なくなっているのに気付いて、嘆息する。
もしかして、これだけ言いにぼくに会いに来たのだろうか。
いや、それにしても流石小唄さん、哀川さんの好敵手。何よりも、誰よりも哀川さんを知っている。
ぼくは「どうも」と今はもういない小唄さんに向かって礼を言って、一つ深呼吸した。
「さてと」ぼくが窓際から離れてから「下らない戯言は終いだ」
ぼくは携帯電話を取り出した。

４―４（後書き）

次話は個人的に鬼門となる話なので、原作の雰囲気をぶち壊されたくない人は注意してください。

5―1（前書き）

かなりの原作ブレイクとなっております。
戯言ファンの方は心してお読みください。

5―1

0

いいこと思いついた。世界を滅ぼせばいいんだ。

1

翌日。城咲のマンションにぼくは着ていた。無論、理由は語るまでもない。

あの『呪い名』が去り際に残した言葉。

《玖渚友を殺せば、あのお嬢ちゃんは返してやる》

それが公平で正当な取引かどうかは置いておくとして、ぼくはひとまず玖渚と会うことにしたのだ。

玖渚友。ぼくの親友。青色サヴァン。死線の蒼。歩く逆鱗。

ぼくが五年前に壊しつくした少女。木端微塵に破壊し、蹂躙し、駆逐し、終わらせた少女。始まってすらいない少女を終わらせ、閉じさせ、停止させた。成長すらも停止させた。

ぼくと出会い、ぼくに壊された彼女の時は五年前から止まったままであった。総ての歯車が微動だにせず、まるで浮き彫りにされたように彼女の中心だけが、世界から切り離されたように停止していた。

物語から、世界から拒絶、隔絶された存在。それが玖渚友。

人類において肝要で明敏な彼女は、世界において不要で不憫な存在。生から追放される存在。

そんな彼女が、選んだ、選択した一つだけの解答。この世を覆す、唯一見えた光明。ただ一つの解。
さながら巧妙な抜け道のような。
さながら奇妙な逃げ道のような。
ただ、そこにあっただけの解。
誰が用意したわけでもなく、誰が望んだわけでもなく。
最初から、それしか存在していなかった解答。停止した彼女の唯一の解法にして解放。
そして決断。
彼女の人生において、最高の、最悪の決断。奇天烈な奇跡を期待する以外、活路が見いだせないほどの絶望的な道で彼女が示した決断。
それを選んだ、彼女。いつものように天真爛漫に純粋に、無邪気に、まるでそれが当たり前のように、選んだ、選んでくれた彼女。
それが玖渚友。くなぎさとも。ぼくの大切な、命よりも大切な大事な大事な存在。

「んなこと言っても友のやつと会うのは、ぼくも久々なんだけどさ」

ぼくは携帯電話を恨めしく見た後、ポケットに滑り込ませる。
あらかじめ連絡を取っておこうと思ったのだけれど、友とは依然として電話も繋がらず、かと言って、手紙なんて殊勝でアナログな手段にはまるで縁のないやつだから、自然と音沙汰のない状態が続いていた。
などと言いつつ、ぶっちゃけ、ぼくが単にびびってて、会いづらかったというのが本音なのだが。

「びびってるっておい。ぼくは中学二年の男子か」

自嘲気味に呟いて、ぼくは城咲のマンションを見上げる。昨日の

ビル倒壊の記憶と混ざって、ガラクタになった城咲のマンションがぼくの前方に出現し、一瞬緊張する。
嘆息してぼくは辺りを見渡した。
閑静な住宅街で、人っ子一人いない様はいつも通り。
今頃は京都駅付近は人でパニックだろう。昨日の今日だ。ビル倒壊事件は未だ収束する気配はないし、何しろ、日本の歴史上初めて、テロと思わしき事件なのだから、政府も世間も気が気でないだろう。そんな理由もあって、正直なところ、城咲のマンションには立ち入るのも難しいと踏んでいたが、見事杞憂に終わった。

「日本人お好みの安全神話ってやつかな。まぁぼくにしてみれば好都合だけどさ」

ぼくは意を決して、住民用のパスワードでオートロックのエントランスをくぐり、警備員に怪訝な視線を浴びせかけられながらも、エレベーターに乗り込み、玖渚の部屋の前まで行く。途中、誰にもすれ違うことなく、ぼくは玖渚の居城へと辿り着いた。
ここまではデフォルト。
そして、ベルを押す。

「……」

しかし無反応。怪訝に思いながら、再度プッシュ。
ピーンポーンと、緊張感のない音がドア越しで聞こえたが、玖渚は一向に出てこない。
怪訝に思う。留守だろうか。ぼくの経験上、友の留守は三毛猫の雄の誕生ぐらい稀なのだけれど、こうしてぼくの来訪を無視しているとなると、やはり考えられるのは、留守しかない。眠っていればインターフォンの音で目覚めるだろうし。
引きこもりの玖渚が、外出などあまり考えられないが、家にいな

いとすれば外にいるのだろう。
ぼくは諦めて踵を返そうとして、ふとドアノブに手を掛けた。
そして引く。
開いた。

「不用心だな、まったく……」

そう呟いて、ぼくは部屋の中へ。所謂不法侵入だけれど、友相手にモラルを語るのも気が引ける。それにどうせ友の部屋なのだから構いやいない。

「お邪魔しますよっと」

玄関で靴を脱ぎ、廊下を歩く。相変わらず廊下には配線やらコードがひしめき合い、ちょっとした茨の道だ。コードを踏まないよう注意深く数歩行ったところで、戸を開ける。
そこで

「ようやく来たか。高貴な私を待たせるとは――ときみ相手にこの口調は少しばかり他人行儀すぎるか。俺ときみの仲だしね」

と。
留守であるはずの玖渚宅から、聞き覚えのある声がして、ぼくは僅かに驚く。驚く、と言っても誰かしら人がいる気配を感じて不法侵入なる真似をしているのだから、ここでは驚きの方向性が異なるが。
それにしても、まさかこの人とは。何とも意外。意外の一言に尽きる。

「……えぇ、お久しぶりです。玖渚直さん」

「堅苦しい挨拶は抜きにしよう。そう改まる必要もない。これは就職面接でもなければ、軍の尋問でもないからね」

直さんはそう言って、ぼくに席に着くよう促す。ぼくは流されるまま、椅子に座り、直さんの対面になる形で相対する。直さんはその整った容姿で、軽く微笑み、紅茶を淹れて出してくれた。

玖渚直。玖渚友の直系の兄にして、玖渚機関機関長。文字通り、玖渚機関の長。ぼくをＥＲ３への編入を薦めてくれた張本人で、ぼくの恩人。

「さて、久しぶりだね、いーちゃん。こうして二人で話すのは友が決断したあの日の夜以来かな」

「そうなりますね。だと、もう半年近くなりますか」言いつつ、ぼくは部屋を窺う。「最近は年をとったせいか時間の流れが早いですよ」やはり部屋に友がいる気配はない。

「何を言うかね。きみはまだ十分に若いだろう。むしろ俺の方がその感覚は顕著だよ。本当に一年が早い」

「直さんは忙しいからじゃないですか？」

「ふふ、まぁ実際忙しいのもそうだが、それ以上に、玖渚機関での仕事に慣れたというのもあるのだろうね。よく言うだろう？　帰りは行きよりも早く感じる、と。つまりは慣れたって話さ」

時間感覚の麻痺とでも言うのかな、と直さんは、その容姿に似合う微笑を浮かべ、続けた。

「……」

ぼくには、少し判らない感覚だ。そもそも時間なんて手に余るほ

どあるのだから。

「まぁ、雑談もさておき。本題とこうか。いーちゃん、きみがここに来るのを俺は知っていたわけだが、いーちゃんはどうだい？　俺がここにいる理由がわかるか？」

「直さんがここにいる理由ですか」

実を言うと、何となくだけれど、玖渚の留守は予想がついていた。ただ、直さんが居るのは完全にぼくの予想の斜め上。誰かいるとしたら『チーム』の誰かだろうとヤマを張っていたんだけど。

「あなたの妹さんのことですよね」

これだけ聞けば当たり障りない返答に思えるだろうが、直さんならこれで十分だろう。直さんは「ご名答」と薄く笑う。

「その俺の誇るべき妹にきみは会いに来たようだけど、残念ながら今この場では会わせることはできない」

「でしょうね。ぼくもまさか会えるとは思ってもいませんでしたし」

「ふん、きみは相変わらず妙なところで鋭いな。けど、ならここへ来たんだ？　まさかここに俺が居ることを見越して来訪したと？」

直さんは自分で淹れた紅茶に唇を添える。

「いやいや、それは流石にないですよ。ぼくはそこまで達観じゃありませんし。誰かがいるだろう程度の予測です。ま、それでもあなたの妹さんに会えれば一番良かったんですけど」

「ふむ、そうか。それなら残念だったな。俺の妹に会わしてやることは叶わん。例え、それがきみの懇願でもだ」

直さんはきっぱり言い切った。強い否定の言葉に、ぼくも一瞬詰まる。

とりあえずは予測の範囲内だが、さて、どうしたものか。

「……友に何かあったんですか？」

ぼくの言葉に直さんは明らかに見て取れる嫌な表情を浮かべる。

「友、か。友、ね。まぁいい。まぁいいさ。俺も大人できみも大人だ。今この時に限りその呼び方で許してやるが」直さんは「それにしても」と続ける。

「きみにしては冷静だね。昔のきみなら、俺の妹に異変があれば、誰彼構わず有無を言わせず突っかかってきたと思うけど」

「ぼくも人並みに進歩してるんですよ。それこそ、友だけ進歩させるわけにはいきません。第一これも約束ですから」

「約束ね。俺は未だに信じられないよ。実の妹ながら理解しがたい。しかしこれで良かったと思っている。十全というわけにはいかなかったが、兄の立場から判断すれば、これで十分ハッピーエンドだ」

「……ハッピーエンドですか」

ぼくはティーカップに注がれた、淡い透き通るような紅茶を見つめながら言う。

「けど、友本人が、友が本当にこれで良かったと思えるのか」

玖渚は決断したわけだけど、それが玖渚本人の望む結果だったのか、ぼくには判らない。玖渚は本当は望んでいなかったのかもしれない。ただ自由に生きて自由に死にたかったのかもしれない。しかしぼくはそれを許さなかった。

否、許せなかった。
ぼくは掛け値なしで友が好きだった。あのプロポーズも大真面目だった。
だけど、それはぼくの都合。ぼくの都合で彼女には生きてもらいたかったし、生きて欲しかった。そして彼女はぼくの都合通り生きてくれた。
可能性は極限まで低かったけれど、彼女は生きてくれた。
しかし代償もある。彼女は生を手にして、その他全てを失った。今はまだ、真っ青な髪の毛も次第に色が落ちていき、両眼は光を失い、天才と謳われた頭脳は平凡以下へと成り下がる。それが玖渚に耐えられるのか、ぼくには不安で仕方がない。

「心配のし過ぎだよ。俺の妹はしっかり生きていくさ」

ぼくの心中を悟ったのか、直さんが言う。

「確かに、妹のあの決断は俺達の行為によるものかもしれないが、それでも友は後悔はしてない。兄としては、実に悔しいく恨めしい限りだが、俺の妹は君に心底見初められているからな。俺としては隙あらばきみの始末も考えたが、妹が望んだのあれば俺には為す術がない。俺は玖渚友の兄として、家族として、妹を尊重しなくてはならないから。と、こんな綺麗事を言ってもね、本当は腹の中はグツグツだぜ。怒りの嫉妬で手が震える」

直さんは、口ではそう言いながらも、落ちていた調子で

「だから認めるさ。いーちゃんも友も。よくよく考えれば、家族が増えただけだし、玖渚友が俺の妹であることに変わりはない」
「となると、ぼくはこれからは義兄さんと呼んだ方がいいんですかね」

「場合によっては、だな。あまりいい気分ではないが」
直さんは再びティーカップに口を付けながら「話が逸れたな」と言ってぼくを見る。
「どうせ、きみに隠し事は無駄だし賢明な判断でもないだろうから、言ってしまうが、実は俺の妹だけでなく玖渚機関全体が今、非常に危険な状況に瀕している」
「そうなんですか？」
直さんの唐突な告白に、ぼくは首を傾げる。「具体的にはどういった？」
「まず経済の流れだ。日本の経済を支えている自動車産業やＩＣ系絶縁体製品の大企業の株価の急激な下落。しかもこの下落に伴い世界各国の金融機関が何かのテロ組織によって狙われている。それに引き続き、首相近辺の国務大臣が相次ぐ襲撃され、そして先週の某国の大統領の射殺事件。さらに言えば昨日の京都ホテルの爆弾テロ。財力だけでなく政治力の世界までもが、偶然にしては出来過ぎてる程、連鎖的に問題が発生している」
「今は玖渚機関が情報を操作して表沙汰にはなっていないが」と直さんは付け足した。
なるほど。確かに最近はやたら号外が多い（みいこさんが持って帰ってくる）と思っていたが、政治だけでなく経済にも事件が起きていたのか。　しかも、日本だけにはとどまらず世界規模で。
「しかし、直さんの言い方だと、何かしらの陰謀が故意にこの一連の不祥事を引き起こしているように聞こえるんですが」

まるで、悪の組織が世界征服を狙っているような口振りだ。
「そう聞こえるか？」直さんは空になったティーカップを見つめて
「俺もこのご時世に悪の組織なるものが存在するとは信じていない。そんなのは漫画やアニメの中だけの話だからな。現実には起こりえない」

それにはぼくも同意だ。「しかし、その一連の事件と友にどういった関係が？」

「これも隠すほどのものでもないが、先日から、我が玖渚機関は名称不明の組織からクラックを受けている。しかも並大抵でないクラッカーだ。俺は知っての通り機械工学にはド素人だから、当然妹に対処してもらうことになったんだが」
「まさか友が負けたんですか？」
「いいや、今現在、玖渚機関の中枢は何とか死守している。だがかなり強力ならしい。『チーム』が間に合っていなかったら、今頃は間違いなく玖渚機関は敵の手中に落ちていただろうな」
「『チーム』が協力したと？」

玖渚の手に負えないクラッカーがこの世にいるのか。いくら弱っているとはいえ玖渚の実力はまだ健在なはずだ。それでも『チーム』の助けが必要なほど、手こずったのか。

「しかもそれだけじゃない、最近、もう一週間ほど前の話だが、ここにある人物が来たそうだ。もっと言えば、俺がこうして妹を直接保護している理由の大元はそいつなのだが」
「……ある人物とは？」
「俺も素性までも判らないが、都並大荒（つなみおおあれ）と名乗ったそうだ」

都並大荒。ぼくも、知らない名前だ。
「都並と妹がどういう会話をしたのかは不明だが、何らかの戦闘意欲を持った訪れたのは確からしい」
「戦闘意欲だって！？」
ぼくは思わず大声を上げる。
「友は、友は無事なんですか！？」
「言うまでもなく無事さ。ただタイミングが良かった。丁度妹の近くに配備していたガードが、玖渚機関でも相当腕の立つ奴でね。そいつの命と引き換えに撃退したって話だ」
ぼくを宥めようとしてか、直さんはゆっくりと冷静に話す。ぼくもとりあえず無事という直さんの言葉を信じて、漏れ出す感情にふたをした。
「……なるほど、それで保護ですか」
「ああ、妹の身に何か起きてからでは遅い。もうやや手遅れかもしれないが。それに、もう一つ懸念すべきことがある」
直さんはなおも冷静に言う。
「玖渚機関に裏切り者がいる。そいつが、クラックと襲撃した連中に情報をリークしている恐れがある」
「裏切り者、ですか？」
「それも複数だ。それにそれなりの重役だろう。俺も独自に調査をしているが、未だに尻尾をつかめていない。きみは六花に会ったか？」

「六花？　もしかして暇六花さんですか？」

会ったも何も、つい昨日一緒に食事をした仲だ。っと、結局料理は食べ損ねたのだっけか。

「そう彼女だ。彼女も俺の部下で独自に動かしていたんだが、昨日死亡が伝えられた」

「……」

死亡。六花さんは確かに人体を真っ二つにされて、死んでいた。しかし、まさか六花さんが玖渚機関の人間だったとは。

「じゃあ、もしかして聖塚一元さんって？」

「きみの想像通り、《壱外》の支部長だ。六花と一元にはきみの動向を探ってもらい、逐次連絡するよう命令していた。しかし、失敗だったよ。まさかきみの監視を任せてから、これほどすぐに殺されるとは」

そういえば、るれろさんと会った時にも変な視線を感じていたが、まさか、あれも六花さんらのものだったのだろうか。

「え、じゃあ、ちょっと待ってください。六花さんが言っていた、初春教授のことやら木賀峰助教授って、あれって演技だったんですか？」

「そうなるな」

おいおい、なんて演技力だよ。というか、ぼくそれで喋らされてるし。やばい、危うく全部を聞き出されるところだった。やばすぎる。

「まぁ初春教授は実在するし、あながち全て嘘というわけでもないだろう」直さんは締めくくるように言う。「そういうわけで、そんなきみを妹に会わせるわけにはいかない。きみは友を傷つけるような事はしないだろうが、この高貴な俺でもこれから何が起きるのかは想像できないのだ。故に、いーちゃんといえど、俺の妹に会わせることはできない」

それは、確かに諦めるしかない。しかし、ならどうする。あの取引を鵜呑みにするわけにはいかない　が、それでも崩子ちゃんを見殺しにもできない。

「何か問題があるみたいだな？」

ぼくは特に意識したつもりはなかったが、直さんは鋭く反応した。

さて。

「直さん、一つ、いや二つほど聞きたいんですけどいいですか？」

「ん、何だい？」

「少し疑問に思っていることがありまして。直さんの不利にはならない内容だと思いますので、是非聞きたいのですが」

「ふむ、内容によるな」直さんはもっともな事を言う。「妹の居場所なら教えられないがな」

「重々承知しています。大丈夫ですよ、ぼくが友の身に危険が及ぶ行動をとるわけがないでしょう。ぼくが知りたいのはですね、ごく簡単な事です」

「……言ってみろ」

「ずばりですね、そのクラッカーの攻撃はまだ続いているのか？それと集まっている『チーム』の人数です」

この二つです、とぼくは言う。
「どうでしょう？　それほど難しい質問でもないと思いますが」
「なるほど……」
直さんはしぶし考える素振りを見せてから
「クラッカーの攻撃は昨日を境目にぱったり止まった。妹が言うには、完全に撃退したわけでもないようだが、向こうも一旦小休止のつもりだろう。それと『チーム』は今、四人集まっている」
四人か。兎吊木あたりはいるだろうな。
しかし、四人。三人でもなく五人でもなく、四人。これぐらいなら、この程度なら十分いける。
「何か考えてるな？」
流石、直さん。目敏い。
「はぁ、どうでしょうかね」
「その手は食わないよ。きみの一挙手一投足、俺としては無視をするわけにはいかない」
「随分、警戒していますね」
「当たり前だ。俺の目の前にいる男は若干１５歳で、我が玖渚機関を崩壊寸前まで追い詰めた輩なのだからな」
「ところで、直さん。これは提案なんですが」
「……質問の次は提案か。高貴な俺を前にして随分な横行だな」
「昔馴染みとして聞いてくださいよ。それより、直さん、これは提案というより懇願なんですが」

「……まったく、どうやらきみは礼儀知らずというより無礼知らずみたいだな。構わん、何だ？」
「明日、死んでくれませんか？」
「断る」

即答。
そりゃそうか。

「やっぱり、無理ですよね」ぼくは一度嘆息して「どうしても、ですか？」

「……きみがどういう経緯を踏まえて、その提案、いや懇願だったか。懇願に至ったのか、俺には皆目見当もつかん。というか、そんな提案、俺が飲むと思っているのか？」
「いえいえ、まさか。ただの戯言です」
「戯言、か。きみはさっき進歩していると言ってたが」
「？」
「俺から見ればそれは進歩ではなく退歩だな、進化ではなく退化。より劣悪になった気がするな」
「……ぼくにしてみれば退化自体、進化の一部分ですよ。大体、進化という言葉だけ考えれば良くなろうが悪くなろうが、優良になろうが劣悪になろうが、変化という意味で考えれば全て進化の過程の一要素に過ぎません」
「……それも戯言か？」
「かもしれませんね」

ぼくは言う。

「この場合は、戯言というよりは傑作って感じですけど」
「？」

「ああいえ」
「ともかく、歓談はここまでだ。結論で言えば、妹に会うのはしばらく諦めろ。これは何があっても譲れない」
直さんは念を押す。「もう話すこともあるまい。俺もこれでなかなか忙しい身だからな、きみもここにいる必要はもうないだろう」
「それもそうですね、すいません、長らく時間を取ってしまって」
「いや構わんさ。忙しいと言っても、世界で二番目といったところだ」
皮肉る直さんにぼくは一礼して、外に出る。太陽がやや傾きかけ、一日も折り返し地点であるのがわかる。
「世界で二番目に忙しい、か」
先ほどの直さんの台詞を思い出す。これは皮肉であっても嘘ではないだろう。大袈裟なようだが、それほど玖渚機関の重役という立場は間隙が許されないのだ。
一先ず城咲のマンションを後にする。当初の予定とは少し違ってしまったけど、ぼくの知りたいこと以外にも有益な情報を得られたわけだから、結果オーライだ。友と会えなかったのは残念だったけれど、友にも混み合った事情があるようだし、ここは我慢しておくとしよう。
「それにしても、クラッカーに都並大荒ね」
これが咎凪の一連の行動に関与しているどうかは、現段階においては言明はできないが、無関係とは考えにくい。それに、最初の邂逅以来、何の音沙汰もない、あの男。それと元診療所での密室殺人。抱える問題は多いが、今は目先の問題に集中しよう。

「直さんには申し訳ないけど」ぼくは誰に言うわけでもなく、呟く。

「もしかしたら、近々、世界で一番忙しい人になっちゃうかもね」

5―2

2

城咲のマンションからちょっと寄り道した後、元診療所に戻ると、居間で小唄さんと真心がボードゲームで遊んでいた。
ボードゲームを挟むように、二人は向かい合い、小唄さんはサイコロを真心はサイコロを握る小唄さんの手を見つめている。

「あ、いーちゃん、お帰り」
「お帰りなさいませ、お友達（ディアフレンド）」

と。ぼくの帰宅に気付いた二人が交互に言う。

「……ただいまです」

……この二人案外仲良くやってるんだな。意外も意外。というか、そのボードゲームってここにあったのだろうか。見たことのない代物だ。
それよりも、ぼくの置かれている現状を多角的かつ鋭意に観察する限り、戯言遣いは今現在シリアスでそこそこヘヴィな局面に直面しているはずなんだけど、この二人を見る限りでは緊迫感やら緊張感の欠片も感じられない。前話で、直さんとそれなりにカッコいい会話を繰り広げた後じゃ、なおさらだ。崩子ちゃんが『呪い名』に拉致されて、中型ビルを一つ吹っ飛ばされて、直さんがいった政治も経済も揺れているこのかなり危険な現状をあざ笑うごとく、二人は何の危機感も抱いていないようだ。つまり、ぼくは何を言いたいかというと、この二人にはもう少し空気を読んでほしい。小唄さん

はしょうがないとして、真心にだけは後でちょっぴりお仕置きをしておくとする。
ぼくはとりあえず聞いてるかどうか怪しいほど、ゲームに夢中な小唄さんに簡単な報告をしてから「そういえば、みいこさんは？」と問いかけた。

「何やら、鈴無音々なる人間にやや演出過剰気味に呼ばれたみたいですわ、お友達（ディアフレンド）」

小唄さんがサイコロを振りながら答える。一応、ぼくの言葉は届いているらしい。
鈴無さん――――比叡山の延暦寺で修行と扮してアルバイトに励んでいるステキな女性――――そんな彼女はぼくにしてみれば説教好きの破戒僧だが、みいこさんにとっては良き友人関係を築いていて、ちょくちょく山を降りてはみいこさんと遊んでいる。みいこさん曰く、まぶだち、らしい。
ぼくは今日もその内の一環だろうと推測した。
一先ず歩き疲れたので、ゲームに熱中する真心と隣に座る。真剣な真心と余裕を見せる小唄さんを見れば、どちらがゲームを支配しているかは、それなりに想像がついた。
というか、ちゃっかり小唄さんが元診療所にいるのは意外だった。みいこさんと小唄さんは互いに面識はないはずだし、みいこさんのあの性格を考慮したら、この二人は地球が縦に割れても絶対に相容れなさそうだから、ぼくとしては小唄さんにここに長居されてみいこさんと鉢合わせなんてのはかなり困る。

「あら、私はちゃんと頃合いを見計らってここに来ているのですわ。あの剣術家に鉢合わせするなんて、ヘマはしませんわ」

うふふ、とぼくの考えが吹出しで出てたんじゃないかと思うくら

い、小唄さんはぼくの意中を的中させ何とも楽しそうに笑う。ぼくは全然楽しくない。
　ちなみに、みいこさんには崩子ちゃんが拉致されたことを伝えていない。最高にお人よしのあの人に事情を伝えれば、深く首を突っ込んでくるのは目に見えているからだ。しかも、みいこさん的には『呪い名』相手にリベンジを意気込んでいるので、なおさら伝えるわけにはいかない。

「また私の勝ちですわね、橙色」
「あー、くそう！　ズルいぞ、小唄っ！　サイコロに細工してるだろ！？」

と。予想通り真心が負け———正直、驚いた、小唄さん恐るべし。
二人の決着がついたところで。

「小唄さん、頼みたいことがあるんですが」

ぼくは切り出した。

「何でしょうか、お友達（ディアフレンド）」

ゲームに負けて不機嫌な様相で大の字に行儀悪く寝転がる真心をよそに、小唄さんは、まるでぼくのお願いを予知していたかごとく、悠然と不遜な態度でぼくを見た。

「この大泥棒にどういった頼みでしょうか？」
「至急会いたい人がいるんですが、小唄さんの力で取り計らってくれませんか？」
「ふむ。とりあえず名前だけ聞いておきましょうか。一体誰でしょう？　玖渚のお嬢様でしょうか？」

すっ呆けるように、小唄さんは下唇に手を添える。そんな一見、愛らしい仕草を無理やり無視して

「いいえ、違います」

強く否定する。

では、誰でしょう、と小唄さんは再度尋ねる。

「ぼくが会いたいのは――――」

沙咲さんでもなく。友でもなく。哀川さんでもなく。

真心もいる手前、ぼくはやや溜めながら

「人類最悪こと、西東天です」

3

「なるほど、実に貴方らしい手法ですわね、お友達（ディアフレンド）」

「そうでしょうかね」

小唄さんはぼくの策略まがいの考えを聞いて「以前、闇口のお嬢様が哀川潤に拉致された時もこれぐらいの発想があれば私も楽しめたのですが」と呆れるようにいう。

「あれは、ぼくだけの問題じゃありませんでしたしね。地域住民総

出の一大事でしたから」

「それもそうですわね」と、小唄さんは嫌な笑顔を浮かべながら「まさか二度も拉致されるとは、闇口のお嬢様もつくづく運がありませんわ」

「……ええ、まぁ」

最初に哀川さんに目をつけられたのは、確かに不運としか表現できない災難だったが、咎凪に拉致を許したのはぼくの油断だ。今更、後悔なんてしないけれど、反省すべき点である。

「萌太くんにバレたら殺されるどころじゃありませんよ」

あの兄が。

過保護な兄がいればこうなることもなかったのかもしれない。

「怒られるよなぁ、やっぱり」

そう、呟いて。

現状を把握する。

今すべき事は哀愁ではない。

「これでぼくの策略は以上です。どうですか、協力してくれます？」

小唄さんはすんなりぼくの頼みを了承してくれなかった。ただ頑なに断ったわけでもない。

取引。

小唄さんは、簡単な取引を持ち掛けてきた。

それはつまり、ぼくの考えている才略を小唄さんに提供し、なおかつその内容の善し悪し具合にて小唄さんが満足すれば頼みを聞く、

という取引にしては若干、論点がずれているような気がする、他愛のないものだ。所詮ぼくの貧相な発想なわけだから、大泥棒の名を欲しいままにしている小唄さんに通用するかどうか実に心許なかったが、ぼくの策略を聞いた小唄さんは

「十全ですわ。十全も十全。私からしてみれば七全、八全ですが、これは貴方が為すからこそ意味ある策。うふふ、まさに『奇策師』といったところでしょうか、お友達（ディアフレンド）」

「やめてくださいよ、人聞きの悪い」

ぼくは肩を竦めるように

「それに奇策が良策とは限らないですから。それより小唄さん、これからのあなたの動向を確認したいのですが」

「うふふ、構いませんわ、お友達（ディアフレンド）。この私が、大泥棒、石丸小唄が貴方の奇策の一部分、あの請負人のごとく請け負って差し上げましょう。ただし一つ、私としてはとても気になる点がありましてね」

小唄さんのぼくを試すように「貴方の奇策に重要な点がただ一つだけ抜けていますわね。この期に及んで、私に隠し事とは、いささか失礼じゃありませんか？」

「ああ、いえ。別にそんなつもりはないんですよ」ぼくは否定して

「ただ、これぱっかりはぼくがやらなきゃいけないことですから。小唄さんには任せられない仕事ですし」

「ふむ。貴方がそのように考えているならば、私は何も言いませんわ、お友達（ディアフレンド）。ならば私は忠実に貴方の言葉通り動いて差し上げましょう」

小唄さんは立ち上がり、紳士の挨拶のように頭を垂れて「それでいつまでに手配すればよろしくて？」

「可能な限り早い方がいいです。出来れば明日か明後日にでも」
「了解しましたわ、お友達(ディアフレンド)」

小唄さんは頷いて「では、早速とりかかりましょうか。大船、いえ豪華客船にでも乗ったつもりでいらしてくださいな」と上機嫌に笑う。

「えぇ、期待していますよ」

ぼくは片手を上げ、見送る。
すると

「うふふ、以前、死色の真紅が言っていた通りですわね、お友達(ディアフレンド)」
「はい？」
「何でもありませんわ、ではアデュー」
「おう、いってらっしゃい、小唄っ」

寝そべる真心の挨拶にコミカルに笑って小唄さんは出発した。

「さてと」

幕は上がる。役者も揃う。台本も完成した。
ならば、ぼくも始めるとしよう。
終わらせるために、始めよう。
赤色でもない、橙色でもない、薄汚れた濁色の欠陥製品の戦いを。

「戯言遣い、本領発揮といこうかな」

ぼくは笑わない。

5－3（前書き）

少し小休止です。

5―3

「いーちゃんいーちゃんいーちゃん」
「……いーちゃんは一回でいい」
「だって、いーちゃん全然こっち見てくれないんだもん。そんな遠くを見るような目つきは中学生までしか許されないよ」
「中学生までって。ぼくは精神的にも身体的にもまだまだ十四歳なんだよ。まだエヴァンゲリオンにも搭乗できるんだよ。だから問題なしさ。世間ではそろそろ成人式だとかで騒がれてるけどね」
「なら、二十歳なんでしょ？」
「全然違うよ。成人式ってさ、あれ実を言うと二十歳を祝ってるわけじゃないんだぜ？　というか元々日本じゃ十二歳から十六歳の範囲で成人を祝う元服ってのがあったんだからさ、というわけでぼくにとっちゃ成人式ってのは十四歳を祝う式典なんだよ」
「全然意味がわからないんだよ。というわけでって、何がというわけなの？」
「細かいことは気にするなよ、友。いちいち小さいことを言及してると、お肌に悪いぜ？」
「お土産にジャンクフードを買ってくるいーちゃんに言われたらおしまいだよ」
「何を言うか！　友、お前は引きこもりがちだから知らないんだろうけど、今の時代、ジャンクフードってのは、健康・滋養促進の効用のある高価な食べ物なんだぞ！」
「高価だったら、ジャンクじゃないよ」
「あれだよ、高価なものほど低劣に見えるっていうだろ？　大切なものは側にあっても気づかない的な？」
「意味不明だよ、いーちゃん。なんだか僕様ちゃんと会わないうちに、どんどん頭が深刻なことになってない？」
「馬鹿なことを言うな。ぼくは常に進化し続けるんだぞ。携帯電話

みたくな」
「どんどん薄くなっていくんだね」
「失礼な」
「ところで、いーちゃん」
「何だよ、友。改まって？」
「ここはどこ？」
「ここ？　ああ、そういえば、あんまり意識してなかったな。さぁ、ぼくは知らないよ」
「じゃあ、きっといーちゃんの夢の中だね」
「かもね。夢の中で会うなんてなんとも情緒的なシチュエーションだね」
「非科学的なシチュエーションだよ」
「けど、ぼくはこういう夢をよく見るんだよね。この間なんて、えーっと、ああ、忘れちゃったな」
「忘れちゃう夢なんて大した質量を持ってないんだよ」
「そうかな？　懐かしい誰かに会った気がするんだけど……」
「六年前の僕様ちゃんとか？」
「うーん、ありえそうだね。けど、友はあんまり変わってないからな。まぁいいよ、そんなこと」
「だね」
「それより、友、無事なのか？」
「無事っていうと？」
「いや、なんとなく。怪我とかしてるんじゃないかと思ってさ」
「僕様ちゃんは無傷だよ。ああ、でもこの言い方だと間違いかな。傷だらけだけど、大丈夫だよ」
「直さんに会わせてくれって頼んだんだけど断られちゃったよ」
「直くんは我が儘だからね」
「まぁこうして無事ならいいよ。夢に出てくるくらいだ、現実でも無事なんだろう？」
「さぁね、そんなことわからないよ」

「わからない？　友にしてみれば珍しいな」
「僕様ちゃんはもう天才じゃないからね」
「……そっか、そうだったな」
「もしかして、いーちゃん、悲しそうな顔してる？」
「ん、どうだろう。鏡がないからわからないよ」
「それもそうだね。でも僕様ちゃんとしては、いーちゃんにそういう顔されると、とっても困るんだよ」
「そう？　ならやめないと」
「うん。いーちゃんは笑わないけど、泣くからね。僕様ちゃんが他人を慰められると思う？」
「ぼくはお前がいるだけで、慰められるけどな」
「さすが僕様ちゃんだね」
「さすが友様ちゃんだ」
「もっと褒めて」
「さすが天下の友様ちゃんだ」
「もっと」
「さすが稀代の天才、世界の偉才、玖渚友ちゃんだ」
「そうじゃないよ」
「さすが空前絶後、旭日昇天、天衣無縫の我らが玖渚友だ」
「違うよ」
「……さすがは、ぼくの玖渚友だ」
「おーけー。ふふ、いーちゃん、ごーかく」
「そりゃ、どうも。っとそろそろ時間かな」
「お別れ？」
「いや違うよ。ただの小休止だ、こんなの」
「でも、これでおしまいなんでしょ？」
「おしまいじゃないさ。少なくともね」
「また会える？」
「当たり前だろ。ぼくとお前はまだ始まったばっかりだ」
「えへへ……」

「だから、ちょっと待っててくれよ。ぼくも久々に本気を出さなくちゃいけないんだから」
「遥奈ちゃんの時みたく？」
「さぁね。ぼくがあの時、本気だったかなんて誰にもわからないだろ？　ぼくだってわからないんだし」
「いーちゃんは僕様ちゃん以外には誰にも理解されないからね」
「そういうことだ。だから友、お前は待っていてくれ。ぼくが戻るまでさ」
「りょーかいだよ、いーちゃん。……ありがとね」
「ん、礼を言うのはぼくの方だよ。ありがとう、友。ぼくはお前がいるから戦える」
「うん、知ってる。いーちゃん、ぜったい帰ってきてね」
「重々承知した。精々ここで見てろよ。お前が愛した男の戦いをさ」
「臭いよ、いーちゃん。でも、待ってるよ」
「ああ、すぐ戻る。じゃあ、行くよ」
「うん、いってらっしゃい。いーちゃん」
「うん、いってきます。友」

5―3（後書き）

玖渚友をどうしても、どうしても登場させたかったので、無理やり出してみました。なんだか原作にもあったような掛け合いがありますが、ノーコメントで。

5－4（前書き）

お待たせしました。一ヶ月ぶりの更新です。宜しくお願いします。

5―4

4

狐さんとの抗争はぼくが生きてきたこの二十年間の中でも、とりわけ印象が強いわけだが、それは偏に十三階段という組織と想影真心の存在が大きかったと言えよう。

十三階段。

人類最悪の遊び人、西東天の、十三の手足。

想影真心。

人類最終、西東天の孫にして、ぼくの親友。

世界を終わらすという西東天の信念の元、集った十三階段と、世界を終わらすために、召還された想影真心。十三階段の面子はどいつもこいつも、劣悪な連中ばかりであったし、真心は真心でかなり不安定な状態であったわけだから、文字通り、命を賭した事件であった。決着までの過程で、零崎一賊は全滅し、哀川さんは敗戦を喫し、『人喰い』は殺され、兄で死神の青年が暗殺された。

悪夢のような九月で。

悪夢であった十月。

果たして、狐さんの魂胆は阻止され、ぼくもぼくなりの決着をつけたわけだが、それで狐さんとの『縁』が完全に断ち切れたかというと、そうなわけはない。むしろ、より強固になった気がする。今のところ、狐さんが何かを企むような話は入ってきてはいないが、それでも亡霊で諦めの悪いあの男はまだ執念深く、世界を終わらすつもりでいるし、ぼくもここんところ、手短なものでいえば先月の死吹の一件が記憶に新しいが、いつも通り哀川さんに終わった事件の真相を語られた際にも、僅かながら狐さんの介入があったと報告を受けている。ぼくもこうなったら一生付き合ってやると思いかけているが、それもできれば勘弁願いたい話である。しかし、こうし

て自ら進んで、狐さんと会おうとしているのだから、世話ない。崩子ちゃん救出には狐さんの助力が不可欠だから、仕方がないけれども、遣る瀬無い気持ちは隠せそうもない。

そんなわけで、閑話休題。

人類最悪との再会は小唄さんと別れて２８時間後、つまり１日と４時間後に叶った。小唄さんから元診療所に連絡があり、待ち合わせ場所と時刻を聞いて、ぼくは覚悟を決めた。

待ち合わせ場所は京都のとある墓地。ベスパを適当に停めて、待ち合わせ場所である誰のものかも知らない墓石の前で時計を確認し天を仰ぐ。空は五分晴れといったところで、ぼく以外に墓参りの人はいない。とはいえぼくも墓参りに来た訳じゃないけど。

「参る相手なんてぼくにはいないはずだけど……」

そう呟いて、辺りを見る。間違いなく待ち合わせ場所としては相応しくない指定場所だが、確かにこの時間、この季節では人もまばらで、ぼくみたいな人間や狐さんみたいな人が落ち合うには、なかなかの良スポットだ。まぁぼくも狐さんがわざわざ京都の墓地を指定した皮肉を理解していないわけではないから、狐さんの計らいに感謝するつもりはないが。

しかし、それでも。

こうも簡単に狐さんとの接触が叶うとは、思っていなかった。少なくとも、知人に会うような気軽さでもって、あの男と再会するなどとは心底信じていなかったし、ある程度の段階を踏んでやっと、ぐらいの気持ちでいたから、小唄さんからあっさり連絡が取れたと報告を受けた時は多少なり困惑があった。肩透かしを食らったようなものだ。死人や亡霊のように扱われる狐さんと二三日そこらで会えるのだから、世の中とは案外狭いんだな、と見当違いな思いが生じるほど、あっけない再会だった。あっけない。まるで仕組まれているかのように。

約束の時間に現れるかどうか、そもそも狐さんは約束を順守をするような男だったかどうか、約束など何の意味もない屑ゴミのように破り捨てる男ではなかったか。様々な思考を巡らせながら、約束の時間まで待つ。

そして、ようやく。

立派な墓石を端から数えながら、時間を潰していると。

その男は。

霞む蜃気楼のように。

妖怪のように。

否、死人のようにゆらゆらと現れた。

墓場だけに。

「よぉ、久しぶりだな、戯言遣い。実に半年ぶりぐらいじゃないか、ん？」

狐面はもうしていない。ぼくへの呼び名も俺の敵から戯言遣いへとシフトチェンジしている。相変わらず白い浴衣を身にまとい、下駄を鳴らし、幽艶な雰囲気である。ぼくは一瞬圧されて、すぐさま立ち直す。警戒心を露骨に出すつもりはなかったが、狐さんは目敏くぼくの心情を見抜いて「そう用心するなよ、呼んだのはお前だろう？」と犯しそうに笑った。

「ええ、お久しぶりです。まさかこんなに早く再会が叶うとは思いませんでしたよ」

「俺だって思っちゃいないさ。だが、そんなことはどうでもいいことだろう。現にこうして俺とお前、面と面で向き合っている以上、それ以前の思考は無意味だからな。それにこう望んだのは、他でもない、お前だろう」

そう、ぼくが望んだ。誰の意志でもない。ぼく自身の意志。ぼく

がこの再会を願ったのだから、ここまで来てどうのこうのと難癖などつけるつもりはないが、それでも皮肉の一つや二つをかましたくなるほど、狐さんは相変わらずだった。

「そういえば、お前、るれろと密会したそうじゃないか。そして今度はこの俺と密会か？　くっくっく、俺に内緒で何企んでんだ？」

「人聞きが悪いですよ、何も企んでなんかいません」

「『何も企んでなんかいません』か、ふん。俺を呼び出しておいて大した物言いだ」

狐さんこと———西東天はシニカルに笑った。

「あんな大泥棒を遣いによこして、何もないなんてことはないだろう」

狐さんはお見通しと言わんばかりに、口元を歪ませたまま、ぼくを見遣る。

そんな笑い方は、やはりそっくりだ。

哀川潤のそれに酷似している。

「ま、お前が何を考えていようと俺にはどうでもいい事さ。しかし、こうして木の実の監視抜きで人と話せるのはなかなか久々でな。実をいうとお前とあの大泥棒には少なからず感謝はしてる」

「……るれろさんの話は冗談じゃなかったんですね」

「ふん、冗談であって欲しいがな。お前も気をつけろよ、女は何をしでかすか判らんからな」

大まかな原因は狐さんにあると思うが。　心の中で密かにツッコむ。

「で、監禁中の俺を、いや因果から追放された俺を呼び出してどうするつもりだ？　まさかお喋りに洒落込むためじゃあるまい」
「……小唄さんから聞いてませんか？」
「『小唄さんから聞いてませんか』か。その問いに俺が正直に答えるとしたら、Ｎｏだな」
「……」

やはり根っからの性悪だな、あの大泥棒は。あくまでぼくの口から言わせるつもりか。このぼくの口から。六花さんの一件じゃ、まるで母性本能に目覚めたかのように、慈愛に満ちた振る舞いをしていたけれど、やはり小唄さんは小唄さんであるようだ。
それよりも、狐さんは大した事情も知らずに、このぼくの誘いに乗ってくれていたのか。軟禁されている身でありながら、随分とご苦労なことだけれど、軟禁の理由はそもそも狐さんにあるようなので、ぼくが罪悪感を感じるのは些か見当違いである。
ぼくは少し逡巡して。

「……実は、ぼくの奴隷ちゃんが『呪い名』に拉致られちゃいましてね」

拉致。崩子ちゃんの身に起きたことを有り体に言えば、この一言である。
奪われ、連れ去られてしまった。
ちょっとした油断をつかれて。
あの状況で迂闊すぎるミス。
腑抜けていると罵られても、甘んじて受けるしかない。

「それについてあなたの協力を仰ぎたい」

かつての敵を前に、ぼくは一瞬も逸らすことなく、狐さんの瞳を

見つめる。
狐さんに頼みごとをする以上、下手な小細工は無用だ。正直に、真っ直ぐに、ぼくは狐さんの返事を待つ。しかし、ぼくの直球ストレートな言葉にも、狐さんは大した変化は見られない。鋭い目つきを鋭くしたまま、皮肉な口元を歪ませる。あれ。外したか。それとも、言い方がまずかったかな。やや沈黙があって、それから狐さんは言った。

「ほう、あのおかっぱ小動物がな。くく、お前がいながら情けない話だ。しかも、俺に話を振ってくる限り相当切羽詰まっているとみえる」

狐さんはぼくの反応を楽しむように

「俺の孫もお前と一緒にいるんじゃないか？　それなのに、とんだヘマをしたもんだ」
「真心は関わっちゃいないですよ。大体、ぼくは善良な一般市民の枠から出ません。そんな奴に、どう『呪い名』に対抗しろと？」
「ふん、そう噛みつくなよ。お前、俺の娘と同じで、知人を馬鹿にされたら反論せざる得ないくちか？　だったら、それは直してほうがいいぜ。人類最悪の遊び人からの忠告だ」
「心に留めておきますよ。それより、狐さん、話を続けてもいいですか？」
「性根が腐った真面目っぷりだな。少しぐらい冗談にも付き合えよ。まぁいい、お前とはそんな話をしても無意味そうだしな」

そんな話、誰としても無意味には変わりないだろう。それに最悪の忠告なんて、わざわざ聞く必要もない。だいだい、狐さんが不真面目すぎるのだ。「それで、ん？　なんだ、俺への頼みってのは」
ぼくの仏頂面（きっと仏頂面だったろう）を意にも介さず、狐さん

は話を促す。

「……その奴隷ちゃんを奪ったのが、咎凪とかいう野郎でしてね。こいつを締め上げれるのに、狐さんにも一つ力添えをお願いしたいわけです」

「はっ、咎凪程度をひねるのに俺の協力など無意味に思えるがな。貴様には俺の孫も世紀の大泥棒も、俺の娘だってついてるじゃねえか。こんな腐った遊び人に頼んだって、何も好転しないだろ」

自虐っぽく狐さんは肩を竦める。狐さんの反応は、ぼくとしては、やや予想に反していた。咎凪の名を出せば、もう少し食いついてくるかと思ったのだけれど、狐さんは興味なさそうに、静かに続ける。

「それに、もしかしたらこの俺がその咎凪に背後に潜む黒幕かもしれないぜ？　だとしたらお前は自分で自分の首を絞めてるようなもんだ」

「それはありえませんよ」

ぼくは用意していた言葉を連ねる。

「狐さんが絡んでいるなら、流石にぼくも気付いていますよ。ぼくって一度やり合った相手には結構敏感なんです」

「『結構敏感なんです』か、ふん」

「それにるれろさんと木の実さんの監視を掻い潜って、さらに何かを企むなんて器用な真似、かなり難易度が高いでしょうしね」

勿論、狐さんの器量ならるれろさんと木の実さんの目を欺くことは可能だろうが、今の狐さんにそれほどモチベーションがあるようには見えない。大体、狐さんが黒幕なら、ぼく的には話が早くて助かる。

狐さんは誰のものかも知らない墓石を覗き込みながら、下駄を鳴らす。

「ほう、色々考えているわけだな、お前は。俺とは大違いだ。だが、それでもこの俺を顎で使う理由には至らないと思うが」

顎で使うって。なかなか最悪な言い回しだな。

「十分な理由がありますよ。十分で相応な理由が」

その言葉を聞いて狐さんは、興味をもったように――――ゆっくりとぼくに向き直る。ぼくの言葉に期待しているように、面白い実験でも眺めるように。ぼくの言葉を待つ。まるで、その言葉だけを聞きにやってきたように、なんてのは少し大袈裟だろうが。

ぼくは、やや間を空けて。

「ぼくが知る限り――――狐さんは唯一、ぼくと共闘できる人間ですから」

真心でも哀川さんでも満たせない絶対の境界線がある。

側に引っ付いてるだけなら、誰にだってできる。

味方の足を引っ張るだけなら、ぼくにだってできる。

しかし、ぼくと共闘できるのは、おそらく狐さんだけだ。

「とある人間失格となら共生みたいなことはしたことあるんですが、一緒に戦ったことなんてないんですよ。ぼくはいつも一歩前か一歩後ろにしか立っていない。同じラインに立てる人間がそもそも希少なんです」

沙咲さんや数一さん、ひかりさんやあかりさん、てる子さん。鈴

無さん、みいこさん、崩子ちゃん、真心、そして哀川さん。味方や敵は多いけれど、それでもぼくと同等のラインに立てる人間なんて、それこそ狐さんぐらいしかいない。

「この欠陥製品の相方が務まるのは、同じ欠陥製品で人類最悪の遊び人しか存在しません。だからぼくはここ来たんです」

原点に還る。ぼくは散々、友や哀川さんの流儀に合わせて、駆け回ってきた。なら、ここいらでぼくの流儀を見せてやろう。戯言遣いの戦い方を。そのためには、ぼくはかつての敵でさえ、頭を下げてやる。

「どうですか、ぼくに協力してもらえますか？」

「『協力してもらえますか』か、ふん」

狐さんは口元を歪めて

「確かに、お前みたいな欠陥製品と肩はれるのは、この俺ぐらいだろうさ。人類最悪の遊び人にしか務まるまい」

狐さんは今にも高笑いしそうに、とても愉快そうに、ぼくを睨みつける。

「普段の俺なら2秒で断るところだが、くくく、いいぜ。やっぱお前は面白い。最悪の遊び人の俺からしても、お前を最悪と言わざるをえない。久々に、俗世に興味が湧いてきた。話を続けろ」

何とも楽しそうな狐さんを見て――――ぼくは少し後悔する。

狐さんを、人類最悪を、動かすことに。

死人である狐さんに助けを乞うことに。自らの手で、自らの首を

絞めるような、取り返しのつかないことになりそうな、そんな気がしてくる。
けれど、そんな杞憂を持ち合わせていられるほど、ぼくには時間があるわけじゃない。時間は限られている。手段に構っている時間などない。

「だが、話を聞いてやる前に一つ条件があるな――――」と狐さんは真顔に戻って

「交換条件だ。俺がお前の話を聞いてやる変わりに、るれろと木の実の監視をやめさせろ」

と、至極真面目に、そう言った。

5

「そうですね、狐さん。例え話になるんですが、男が一人居て、そいつには一つのとある目的があるとします。それは男にとって自力到達不可能な目的ですけど、男は何とかしてそれを叶えようとします。さて、この場合、ぼくたちはこの男に何をしてあげられますかね？」

ぼくは問う。
場所は変わって、墓地近くの茶屋。その角の席。一応、気を使って他の客からは死角になる位置に二人対面する形で腰かける。どうやらこの店は狐さんの御用達のようで、着席早々、狐さんはあんみ

つを注文した。前は理澄ちゃんの事で料理をご馳走してもらったわけだが、今回ばかりは奢ってくれる気配はなさそうだ。
ぼくの問いに対して、狐さんはうっすらと口元を歪ませながら
「俺は心理テストは嫌いなんだかな。憩じゃあるまいし。まぁいいさ、答えてやるさ。ああ答えてやるとも」
狐さんは大袈裟にリアクションをとる。
「俺だったら、何が何でも目的を達成させる。死んでも到達させてやるさ、なんせこの世界にあるものは全て、可能かそれ以前のものだけだからだ」
「熱血な言い種ですね、そんなキャラでしたっけ」
「くくく、茶化すなよ。最悪だって努力ぐらいするんだぜ。小学生のときは進研ゼミの付録目当てで、かなり努力した」
……。
……努力の範囲がしょぼい……！　というか、あなたは神童という設定じゃなかったのか！
「で、俺は答えたぜ。ちなみにお前だったら、どうするんだ、戯言遣い」
ぼくは内心の突っ込みに蓋をして、店員にもらったお茶を啜る。
少し、考えるふりをして「ぼくだったら、その目的とやら自体を壊します」と、はっきり言い切った。事前にある程度、予想していた会話なので、どうしても芝居っぽくなってしまったが。
ぼくの言葉を聞いて「おいおい、それじゃ本末転倒だろ」と狐さんは常識人のように肩を竦める。その様は似合わないことこの上ない。常識人どころか一般人からも最も遠い位置に存在している狐さ

んには、なおさら。

「その目的とやらは俺は知らないが、そもそもの前提を破綻させていいのか？　俺が言えた義理じゃないが、相当な劣悪だぜ、俺の敵」

「最悪のあなたには言われたくない台詞ですね。でもこれはこれで、ぼくも結構考えたんですけど。むしろ、自画自賛してやりたくなるくらいの出来映えなんですがね。何てたってシンプルでいい」

「単純も複雑も同じことだろう。あるのは結果だけだ」

「実際はそうですがね。ぼくは割と倹約家でして、やらなくていいことはやらない主義なんです。まぁぼくの性質と性格上、やらなくてはいけないことをやらないって感じですけど」

「ふん」狐さんはつまらなさそうに「達成不可能な目的など目的ではないと言いたいのか？」

「いいえ、そこまでとは。ぼくは節約も好きですが努力も好きなんです」

するのは嫌いですが、とぼくは付け足す。ぼくは人の努力を見るのが好きな人間だ。人が頑張る姿は大変微笑ましい。けれど、それは決して努力を美化しているわけではなく、努力で何とかしようという人間の勇ましさに共感しているに過ぎない。努力など成功しようが、失敗しようがただの言い訳に過ぎないわけで、ましてや結果のない努力など無意味だ。だから、ぼくは努力が嫌いだし、今後一生することはないだろう。

狐さんは、今のぼくの言葉には返事をせず、運ばれてきたあんみつをスプーンで掬い、咀嚼する。そして、お茶を啜る。こいつ、本当に話聞いてんのか？

「まぁ本題に入りましょうか。狐さんも時間がないでしょうし」

「ふん、『時間がない』か。そんなもの死にたくなるほど余っているさ」
「ずばり言うと、狐さん。狐さんにやってもらいたいことはたった一つです」

あくまで。
会話の主導権はぼくがを握る。流れを狐さんに渡すわけには行かない。
ただでさえ、危ない橋なのだ。危険すぎる賭けなのだ。
なんせ、ぼくの目の前にいるのは、あの人類最悪、西東天である。
あんみつにがっついてるおっさんじゃないのだ。

「『たった一つです』か、ふん。言ってみろ」
「玖渚機関をつぶしてください」

即答した。
感情を殺して。
思惑を潰して。
ごく冷静に。
ごく冷静を、装って。
ぼくは繰り返す。

「いや、つぶすまではいかなくていい。玖渚機関を攻撃して欲しいんです。外面からでなく内面から」

ぼくの言葉に、狐さんは、笑った。
静かに頬を歪ませた。

「随分大胆だな。なんだ、六年前の続きをしようとでもいうのか？」
「まさか。それとは一切関係ありません。別区切りの問題です」

「では、何故玖渚機関を潰すのだ？　あそこはお前のこれがいるところだろ」

そう言って狐さんは小指を立てる。何とも古臭い行為だ。というか、そんな仕草するやつに初めて出会った。さすが、人類最悪。おっと、今はそれどころではない。

「茶化さないで下さいよ、現実はもっとシビアなんです。けどまぁ、実は玖渚にも関係することなんですがね」

「ふん。玖渚ね。なるほど、それでさっきの質問に繋がるわけか。まぁ俺にどうでもいい話だがな」

ぼくの質問を理解してくれたようで、狐さんはあんみつの白玉を頬張る。

「だが、ただ潰すだけなら、俺でなくても、むしろお前や俺の孫にでも任せればいいじゃねぇか」

「言ったでしょう、外面的でなく内面的に、と。それ以外にも狐さんにしか出来ないこともありますし」

「ふん。つまりオンラインで、ということか？　玖渚機関の根幹を、玖渚機関の心臓を潰せってか」

「えぇ、そうです。いくらなんでも機械工学の知識零のぼくには到底不可能ですし、真心は――――まぁ真心ならいけそうですが、それでも、それなりの時間はかかるでしょうし。しかし、狐さんなら。『砂漠の狐（デザートフォックス）』のあなたなら容易いでしょう？」

『砂漠の狐』。以前、玖渚率いる『チーム』と対峙した一匹の狐。電子世界の覇者とまで呼ばれた『チーム』にたった一匹で、対抗どころか圧倒した恐るべき存在。玖渚機関は知ってのとおり、世界レベルの財閥家系で、政治力の世界を裏で支配している最上の組織だ。

加えて、すでに全盛期に及ばないが《死線の蒼》である玖渚友に、彼女がリーダーを勤める究極絶無のサイバーテロリスト集団、『チーム』がある。この鉄壁ならぬ絶壁を破り、玖渚機関をオンラインで潰すとなると、ぼくにはやはり目の前の男に頼らざるを得ない。

人類最悪にして『砂漠の狐』、西東天。

「『砂漠の狐』。ふん、昔の話だ。今じゃ面影すらないさ」

「狐さん自身の能力はぼくにはおよそ想像もつきませんが、あなたには自分以上に便利な手足があるんじゃありませんでしたっけ？」

それが十三階段。

西東天の十三の手足。るれろさん然り木の実さん然り。

「ふん、相変わらずあざといな。だが、そんなハイリスクな頼みを二つ返事で了承するのは割りに合わないな。人類最悪にだって物事の天秤ぐらい持ってるぜ？」

「ふむ、そうですね」

これも用意していた言葉を繰り出す。

「もし狐さんが、ぼくの頼みを飲んでくれたら――――」ぼくは狐さんを見つめながら「――――このぼくも、この戯言遣いも一度だけ狐さんに従いましょう」

言ってみれば、代償。

必要な犠牲。

悲願への生け贄。

どうせ傷だらけのぼくだ。今更、自愛なんて、似合わない。崩子ちゃんやひかりさんには悪いけど、ぼくの性分は九月から変わっていない。

ぼくの言葉に狐さんは

「なるほど。くっくっく、そうくるか」

と笑う。

「どうでしょう？　悪い話、不公平な話ではないと思いますが？」

と、いっても虫が良い話には変わりないが。

「俺が玖渚機関を潰せば、お前が俺の手足になるわけか。なんて滑稽な絵図だよ、なぁ、おい」

狐さんは呆（あき）れるわけでもなく、呆（ほう）けるわけでもなく。

ただ、楽しそうに振舞う。

「確かに、お前が俺の手足になるなら、俺の悲願の成就もそう遠くないだろうが、しかし、いいのか？　安い気持ちで身を売ると取り返しのつかないことになるぜ？」

「構いません」

ぼくは断言する。

「ぼくの傷で誰かを救えるなら、安いもんですよ。安すぎますね。それに、あの咎凪には少し痛い目にあってもらいんですよ、なんせこのぼくに、取引はおろか”選択させたんですからね”」

それがどんなに愚かなことなのか。

それがどんなに儚いことなのか。

思い知らせてやる必要がある。このぼくに選択させる愚かしさを。

戯言遣いの選択を。奇天烈で荒唐無稽なミラクルを見せてやる。

「くくく、いいだろう。取引成立だ。捨てた玩具で再び遊ぶのは、俺の性に反するが、この際だ、目を瞑ってやろう。人類最悪の遊び人が、最悪の遊び方を披露してやろう」

この時のぼくは勿論、この狐さんとの取引が今後どういう風にぼくを苦しめることになるかは知らないわけで、知らない以上、過去の自分を咎めるなんてことはしないけれど、今思うとやはり思慮が欠けていた。いや、思慮は欠けていない。欠けていたのはぼくの想像力だ。ぼくには連想する力が圧倒的に足りていなかった。物語を読みきってなかった。たった一つのキーワードを見逃していた。そのせいで、ぼくはこれから進行する物語を良くも悪くも滅茶苦茶にかき乱してしまう。奇天烈な展開がより奇天烈に化けてしまう。

当然、ぼくはそんなこと、知る由もないが。

6

それから狐さんと二、三の世間話をして、ぼく達は茶屋を出た。一先ず、狐さんの軟禁状態を解放させるため、ぼくは狐さんの白いポルシェに乗って（無論、運転は狐さん。しかも乗る前に、靴を雑巾で拭かされた）、狐さんが床を置いている住居へと向かう。

道中は片道二時間程度で、京都を出たところまでは確認できたが、それ以降はどこをどう走っているか、どこに向かっているかも判らず、ただ車に揺られ続け、狐さんの拠点に着いた頃には日は大分傾いていた。拠点という言葉を用いたけれど、そこは薄暗く渋いバーでもなければ、廃墟となったホテルでもなく、極々普通のオートロック付きのマンションである。狐さんにしては平凡すぎる住まいだった。

さて、木の実さんとるれろさんの説得にどれだけの時間と労力を費やしたかを、ここで語るにしてはいまいちエンターテイメントとして娯楽性に欠けてしまうし、彼女らのプライバシーも考慮して省かせてもらうけれど、とりえあず彼女たちは一筋縄ではいかなかった。まずは狐さんが木の実さんやるれろさんの監視を掻い潜って、ぼくに逢っていたことを説明し、次に軟禁を止めるよう説得を始めたわけだが、案の定、彼女達は猛反発し、なかなかの苦戦を強いられた。少しだけ、そのやり取りを抜粋するのなら

「私の狐さんを返して！」

「いや、狐さんは元々あなたのものでもないかと……」

「違うもん！　狐さんは私と約束して一生添い遂げることになったんだもん！」

「……」

ぼくの説明も功を奏して、彼女らは渋々納得してくれたが、いやしかし『だもん』って。ちなみに発言の主は木の実さんである。そういえば、清楚な文学少女のイメージであった木の実さんだが、此度の再会で何と驚愕、銀髪でゴスロリだった。

銀髪でゴスロリである。

何度でも言うが、銀髪でゴスロリである。

銀色の髪の毛である。

あの地味目な格好は彼女の特技である空間制作能力に付与するという理由一つでなされていたわけで、あのような格好は寧ろ、彼女の希望であるのだろうから、ぼくは何も言わず何も語らず、説得を進めた。

前言撤回をするようだけど、一筋縄ではいかないと言ったものの、実は木の実さんの説得に非常に難航しただけであり、るれろさんには意外とすんなりぼくの説得に応じてくれた。彼女にしてみれば極最近にぼくと会っているし、ある程度、こういう事態は予測していたのだろう。

ただし

「事情わかったさ。だが木の実の話じゃないけどさ、狐さんまた妙な真似をしたら、即刻軟禁するからね」

と、半ば脅されてしまった。被害を受けるのは狐さんだからいいものを、愛？　とはつくづく大変なものである。

そして当の狐さんは、ぼくと木の実さん達のやり取りを見るわけでもなく、一人でボーっとしていた。相変わらず何を考えているか読めない人だけれど、きっと何も考えていないのだろう。何も考えていないくせに、世界を終わらそうとしているのだから、最悪極まりない。いや、もう本当に。

無事に木の実さん達の交渉が終了した時点で、狐さんはるれろさん等を連れて、行き先さえも告げずに消えてしまった。結局、狐さんはぼくの取引に応じるかどうか微妙なところだったけど、それなりの手ごたえはあったらしい。連絡はるれろさんか木の実さんを通すとのことで、というか結局あの二人を連れていくならば、監禁状態のままでも問題なかったような気もする。

しかし、まぁ玖渚機関を相手取る以上、単に機械工学の知識だけでなくそれなりの設備や人員も必要になるのだろうから、るれろさんや木の実さんが役に立たないことはないだろう。るれろさんは人形士で、木の実さんは空間製作者だ。世界でも稀有な技術を持つ彼女らなら、狐さんのサポートにはもってこいに違いない。

狐さんらが消えて、アパートの一室で一人取り残されたぼくは、一先ず帰ることにした。ここがどこだがはさっぱり見当もつかないが、適当にバスや駅を見つけられれば、帰れないことはあるまい。どうせ、ここは日本だ。全国路線で繋がっている、交通では不便の無い国だ。そういえば、帰る前にもう一度、墓地に寄ってベスパを回収しなくてはいけないのだった。それなりに面倒だが、仕方あるまい。長い間放置して、撤去でもされたら大変だ。

ぼくは空になった部屋を、すでに縁が切れた部屋を後にした。

何とか電車を乗り継ぎ、名も知らぬ駅を巡り、京都まで帰ってくるのは、それなりに骨が折れた。別段、遠い場所というわけでもなかったけれど、やはり見慣れない土地を歩くのはそれなりに重労働だったといえる。墓地に戻ってくる頃には日は沈んでいた。

無事に駐車した場所に残っていたベスパを回収し、元診療所に帰ろうとした時、不意に参拝している人の姿が見えた。か弱い街路灯に照らされているだけなので、その表情も性別もわからない。こんな時間に墓参りとは珍しい限りだ。加えて、昼時にも参拝客のない

この墓地では、なおさらである。ぼくは徐にそいつ近づいた。こんな時間だ。急に声をかけて驚かしてしまうのも、気が引ける。なるべく、ゆっくりと、けれど明らかに自分の存在をアピールするように、小石をじゃりじゃり踏みしめながら、参拝客に寄っていく。

「――――――――」

ようやく表情が見えそうなぐらいに寄ると、音に気付いた参拝客がこちらを見据える。左手は数本の線香を握り、右手には柄杓、傍らには手桶が置いてあり、どうやら本当に墓参りしているようだ。参拝客はぼくを上目遣いで見上げながら、静かに言った。

「こんばんわ」

おっとりと、頭を垂れる。こちらも思わず頭を下げてしまいそうになる礼儀正しいお辞儀。ぼくも慌てて、お辞儀を返す。

年端もいかない少女である。少女の童顔に大きすぎる黒縁の眼鏡に、何の特徴もない黒いストレートの髪の毛。痩せすぎず、太りすぎず、至って平均的な格好と小学生低学年ぐらい背丈で、淡い街頭に照らされ、ぼくを静かに見つめてくる。どことなく雰囲気が崩子ちゃんと似ているけれど、崩子ちゃんが鋭いナイフだとすれば、こちらの子は玩具のつるぎを持っていそうな、鷹揚そうな子だ。辺りに人はいないようだし、子供一人で来ているらしい。

「えっと、こんばんわ。君、一人？」

なんとなく軟派の誘い文句のようになってしまったけれど、こんな時間に墓参りをしている女の子にかける言葉など、ぼくは持ち合わせていない。

「一人、です。お兄さんもですか？」

黒縁眼鏡の少女は、ぼくを見ずに、墓に向き直る。

まさか、逆に少女から質問されるとは思っていなかったので、ぼくは少し返答に詰まってしまう。

「うん、ぼくも一人。えーっと、お父さんとお母さんは、いないのかな？」

「……」

少女が黙ってしまったので、ぼくはしまったと後悔する。少女一人がこんな時間に墓参りしているのだ。それくらいの事情は察するべきだった。ぼくはどう繕うべきか思案していると

「……ここへはわたし一人できました。お墓参りにきたんです」

それは見ればわかるけど。少女はそう言って、見つめるぼくをまるで無視して、手にしていた柄杓でお墓に水をまき始めた。少女の背丈では、お墓は大きすぎるようだけど、背伸びをしながら必死にまいていき、一通りまいた後、火の点いていない線香を供えた。ちなみに、花は供えられていない。

墓に刻まれた戒名には、人類小鳥とある。この子の両親だろうか。それとも親戚か。可能性としては、親戚が高そうだけど、今どきの女の子は親戚のために夜中に墓参りをするのだろうか。しないとは言い切れないけど、夜中の墓地に一人で出向くとは、大した度胸の持ち主だ。

手桶が空になるまで水をまいた少女は、柄杓などを片づけ、最後にお墓に向かって礼をした。この暗がりでも、随分手慣れた手つきだったので、どうやらこの子の墓参りは初めてではないようだ。

一通り終え、それから少女はようやくぼくを見る。

「終わったので、わたしはかえります。お兄さんはどうするんですか？」

どうするもこうも、ぼくはこんな時間、こんな場所に一人でいるか弱き少女を案じて、こうして声を掛けたのだけれど、どうもそこら辺の意図が伝わっていないらしい。帰るって言ったって、こんな少女を一人で帰らせるのも、大人としてどうかと思う。事件になってからでは遅いわけだし。

「ぼくも帰るよ。君は、一人で帰れるのかい？」

言外に、ぼくが送ってもいいという意味を込めたけれど、女の子はそれに気付かなかったのか「だいじょうです」と答える。

「わたしは一人でかえれます。師匠にも、一人でできることは一人でやれといわれていますし」

師匠、ね。

「そっか。偉いんだね、まだ小さいのに」

「わたしはえらくなんてありません。まだまだ修行中の身です」

修行中ということは、何かしらの道場とかに通っているのだろうか。とすれば、師匠という言葉にも納得がいくけど。

「なるほど。でも君はその師匠の言葉の本当の意味には気付いていないようだね」

「……ほんとうの意味？」

女の子はそこだけ興味を持ったように、眼鏡のブリッジに手を当てる。

「そうさ。言葉ってのには、裏表がある。本当の意味と、偽者の意味。真言と戯言のようにね。どうやら君は師匠の言葉の表の意味だけしか知らないみたいだから、教えておいてあげる」ぼくは少女と同じ視線になるようしゃがんで「いいかい？　『一人でできることは一人でやれ』というのは、裏を返せ『一人でできないことは一人でやるな』ってことだよ」

女の子は眼鏡の奥から黒い瞳をまっすぐに向けてくる。

「一人でできることなんて、何人でやってもできる。けど、一人でできないことは、何人かじゃなきゃできないんだ。ぼくはね、君みたいな女の子と一緒に生活してたんだけど、その子も君みたいに、いやぼくみたいに一人でいろいろやっててさ、それでかなり痛い目をみたらしい」

けど、おかげで大切なことを学べたわけだけども。

「君はまだ痛い目をみてないから、予め言っておくよ。一人で生きようとしないほうがいい。ぼくはもう手遅れだけど――――信じたり、頼ったりするのは、それなりに覚悟が必要だと思うけどさ、君はまだ間に合う。だから、って――――君にはまだ難しかったかな？」

女の子は黙ってしまった。いきなりお節介な野郎が現れたと思われているかもしれないが、一応、先を歩むものとしてのアドバイスだ。大層なアドバイスは柄でもないけど、ぼくの誇れない人生経験唯一の真言だ。

「お兄さんの言葉はよくわかりました。けど、送ってもらう必要はありません」

ちゃんと伝わってた。

女の子は墓を見つめながら、言う。

「わたしの家はこの近くなのでしんぱいしないでください。それに、わたしは平気です」

そんなわけはない。平気なはずがない。直感だけど、直観だけれど、そうぼくは思った。

「だいじょうぶです。しんぱいには及びません。それにわたしはお兄さんが思うような人間じゃありませんし」

「ぼくが思うような、か。うん、確かにぼくは君のことなんて全然知らないわけだ」

それもそうだ。ぼくは出会って数分の女の子に何を言ってるんだろう。一丁前に先輩ぶって、アドバイスだと？　ぼくの言葉には、何の意味もないのに。欠片ほどの誠意もないのに。ああ、随分恥ずかしいことしちゃってるな、ぼく。

「柄にもなく殊勝になっちゃったよ。少女に教えを説くなんてさ、ごめん。ぼくが愚かだった。反省して――――」

「子鹿（こじか）です」

「はい？」

「わたしの名前、です。子鹿（こじか）」

今更ながらの自己紹介だった。

「丁寧にどうも。ぼくは、うーん、と。そうだな、ぼくの名前は零崎――――零崎、唯識。よろしくね、子鹿ちゃん」

まさか本名を教えるわけにもいかず、適当に偽名を作った。でもまぁ、ある意味本名に近いけれど。

「よろしくです。では、わたしはかえります」

握手でも交わそうかと思ったけれど、子鹿ちゃんは明言通り、振り向きもせずにいってしまった。暗闇に小さな背中が溶けていき、すぐに見えなくなる。ぼくは一瞬追いかけようと思ったが、あれほど頑なに送るのを断られた以上、これ以上の深追いは禁物だ。心配は心配だけれど、あの調子じゃ本当に大丈夫なのだろう。

「心配は心配だけれど、ってぼくは何を言ってるんだ」

初対面のくせに、ベラベラ説教まで垂れて、挙句に自己紹介までしちゃって。これじゃ本当に軟派じゃないか。しかも世間的には最大級にやばい軟派だ。

やれやれ。どうやらぼくは疲れているようだ。久しぶりに狐さんと会って、木の実さんを説得して、見知らぬ土地から帰ってきた。それがぼくの思っている以上に、精神に疲労を蓄積させており、脳の正常な判断能力を奪ってしまったのだろう。こうなったら、とっとと帰るべきだ。帰って、明日に備えなくてはいけない。ぼくは少女と戯れている場合ではないのだ。いくら、崩子ちゃんの無事は確保されているとはいえ、油断や慢心は許されない。それに、ぼくの思惑がどこまで通用するかも定かではないのだ。

完全に子鹿ちゃんの姿が見えなってから、ぼくは呟く。

「今さら、後には退けないけどな」

墓地を出て、ベスパに跨り、ぼくは夜の京都を駆けた。風は身を切りつけるように冷たい。

7

狐さん、もといるれろさんから最初の連絡があったのは二日後であり、準備は着々と進んでいるとのことだった。話によれば、やはり設備やら人員やらに多少の問題はあったようだが、それも狐さんの手腕により解決したらしい。ぼくとしては、狐さんの情けない場面や人類最悪としての壁面しか知らないため、狐さんが活躍するような情景をどうも想像しにくいのだが、まぁ一応、神童とまでいわれた男である。やる時にはやるのだろう。

後は、狐さんがうまくやってくれるかどうかだ。玖渚機関を攻撃し、友と直さんを引きずり出してくれればいい。ぼくの考えが正しければ、これで咎凪との取引は成立するはず。まだ大仕事が残っているけれど、狐さんが成功してくれれば、勝算もぐっと高くなるはずだ。そうすれば、後はぼくの仕事だ。いや、これはぼくだけでは為せないけれど。

ぼくだから、できることがある。

ぼくにしか、できないことがある。

それは独りよがりでも強がりでもなく、そうであるというだけの事実。

崩子ちゃんを救うために、友を殺す。

友を救うために、崩子ちゃんを殺す。

選べるのは、この二つだけ。二者択一の分かれ道。人が生きることは選ぶことだと、ぼくは俄かに思う。生きるために選び、選ぶた

めに生きる。しかし、そこは、人間ならぬ人外ならぬ、欠陥製品。人間もどき。人間の成り損ないである、このぼくだ。
選択なんかしない。
選択肢なんて、くそくらえだ。
ましてや、他人に与えられる選択肢など、吐き気がする。
だから、ぼくは選ばない。
崩子ちゃんも救うし、友も救う。
崩子ちゃんも殺すし、友も殺す。
みんな救うし、みんな殺してやる。
ぼくの周りにいる人間は例外なく狂い、破綻する。ぼくの意識の介入の有無など関係なく、全てを壊滅させる。望むも恨むも、関係なく、森羅万象全て。だから、ぼくは誰にも何も施さないし、誰にも頼らない。裏切られるくらいなら、誰も信じない。壊してしまうくらいなら、最初からいらない。
ゆえに欠陥製品。それが戯言遣い。
選択の余地など、最初からない。
取引の可能性など、皆無だ。
だから、ぼくは咎凪には従わない。咎凪の思い通りには、人間の思考回路通りには動かない。
ぼくは、ぼくの手段で、ぼくの考えで、物語を進行させる。どう転ぶかはわからない。誰が生きるか、誰が死ぬかなんて、わからない。だけど、だけど。
ぼくは救いたい。ぼくという人間にとって、それがいかに困難でいかに苦痛であるかなんてのは、百も承知だ。それでも、ぼくは救いたい、と心から思う。
壊すのなんて、簡単だ。簡単すぎて、簡単すぎて、涙が出る。涙なんて、流してことないけれど。でも救いたい。ぼくは崩子ちゃんも友も救いたい。ぼくがいてみんな幸せになるなんて、思えないけれど。全てのぼくのエゴからもしれないけど。
ぼくは生きる。

願わくば、一人ではなく、みんなで、生きたい。
みんなで、幸せになりたい。無理な願望だけれど、ぼくは強く思う。
相変わらず、死にたい気分は抜けないけど、ぼくはもう死ぬことはできない。死ぬことは、許されない。大事な、大事な約束もしたことだし。
矜持はもう捨てた。
命より大切なものなんて、何もないじゃないか。
みんなで、笑って、にこやかに、凱旋しようじゃないか。
一握りの決意をもって、貫徹してやろう。
そのためにも、今は狐さんに期待するしかない。最悪に縋(すが)るしかない。それが後にどうなったとしても、今は、崩子ちゃんが優先だ。だから、今は、見守ってやろう。

『歩く逆鱗』、『青色サヴァン』玖渚友。
『砂漠の狐』、『人類最悪』西東天。

一度は見(まみ)えたことのある両者が再び向かい合う。
去年の１０月の時でさえ実現しなかった、この組み合わせ。
世紀の好カードと言っても過言ではない。

「……傑作な結末を期待してやりますか」

自嘲気味にぼくは呟いた。
そして。

――――ぼくはこの時まだ、気づいていない。
世界崩壊なんて、物語の終結なんて、いとも簡単に実現できるなんてことを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7169n/

キテレツミラクル

2011年10月13日12時49分発行